心算でゐて下さい。』

京子は唯感謝の念につゝまれて、

『どうもいろ〳〵お事多のところを有難う御坐いましたさういふ方がゐて下されば、私もほんとに心強う御坐いますわ。』と、云ひかけるのを笹山は引取つて、

『いや、私立探偵なぞといふと、恐ろしい人間のやうに思はれるが、その男は至極氣のいゝ、眞面目な、信用すべき男ですから、どうか何事に依らず腹藏なく話して相談をして下さい。私の命令ですからきつと責任をもつて働くに極つてゐますよ。名前は小谷秀之進といふのですから、よく覺えてゐて下さい。』と、云つて、煙草の吸殼をそのまゝ灰落としへ捨てゝ、『なあに、この手紙がありやもう千人力です。小谷のやうな敏腕な奴の手にかゝりや、向うが素人ですから譯もなく喜美子さんを吐き出しますよ。まあ、こゝ一兩日待つてゐて御覽なさい。今度は反對に久保さんの方から甲をぬぐやうなことになるに極つてゐまさあ。はゝゝゝは、。』と、事もなげに笑ふ。

京子もさう云はれると、もう、すつかり安心してしまつた。なるほどそんな專門家の手にかければ、あの喜美子の行方も手もなく分らうし、それに又此方のやりやうによつてはさすがの久保もどんなに閉口するか分らないのである。それを思ふと、まだ結果の現はれない先から京子はもう嬉しくて耐らないのであつた。

笹山はその話が濟むと今度は、態度を改めて、

『それから横川さん、あの手紙にあつたもうひとつの事件ですが、あれも貴女のやうに差迫つて考へなくてもいいぢやないですか。實は私も次第に依つたら田原先生のところへ私自身で出向いて、大いに論じて來ようかとも思つてゐるのだが、折角これまでに話の極つたものをどうして田原先生はそんな無法なことを云はれるのでせう。それぢやあんまり因循すぎて、私は齒痒くなつてきますよ。』と、云ひ出す。

京子は先生には嘘がついてあるので、今更笹山にいかれては自分がまたどんな叱りを受けやうも知れないので田原先生の腹の中を笹山に詳しく話して聞かせた。實は今度帝展へ出す

についてあのお七の繪が粉本として要ること、それから宮島侯爵の屏風をもらつたこと、なぞ彼女はすつかり笹山に打明けて話した。

笹山はそれを聞くと、さも滿足さうに笑つて、

『いや、そりや何よりもお目出度づくめだ。事がさう運べは、私の方も非常に仕事がしよくなる。その帝展の方は何よりの話だから、貴女も今度こそはほんとに生命をはめて努力をなさい。』と、云つて、彼は内衣嚢から大きな紙幣入の革財布を取り出して、そのなかから封筒に入つたずつしりと重みのあるものを取出して、無雜作に京子の前へ投げ出しながら『横川さん、どうも何から何迄專斷に計らつて、貴女には申譯もないが、實は此間のあのお七は愈々表裝も出來上つたので、序に增田さんへ見せたんですよ。貴女も御存じのあの增田銀行の增田さんさ。ところが、非常に氣に入つてしまつて、展覽會へ出す前に自分の手に入れて置き度いからといつて、あれを三百圓手つかずで買つて呉れましたんですよ。何にしろ繪の鑑賞家としてあれほど眼の肥えてゐる人だけあつて、やつぱり分つてゐますな。で、私もどうせ展覽會へ出すものなら、增田家所藏といふやうな札で出せば却つて繪の品位も上ゐしと思つて、實は貴女には爾後承諾をして貰ふつもりで、その話を極めてしまつたんです。これのなかに三百圓だけたしかに入つてゐますから、どうか何んにも云はずに受取つて下さい。はゝゝゝゝ。』と、鷹揚に笑ひながら云ふ。

京子はその話を聞くと却つてひどく當惑してしまつた。自分が知らない間にさうまで話が進んでゐようとは夢にも思はなかつたので、彼女は心のなかではどうしようかと思つてゐた。自分の拙い繪が三百圓といふ大金で賣れた。それのみかその金は今まざまざと自分の眼の前に投げ出されてゐるのである。この貧苦のなかに三百圓といふ大金が思ひがけもなく飛び込んできたのは、天にも昇るほど嬉しかつたが、併し田原先生の方の首尾を思ふと、京子は何かしら冷々してくるのであつた。

京子はやがて顏を伏せて、

『どうもほんとにこんなに御深切にして頂いて、私、貴方には申譯も御坐いませんけれど・・

…』と、云つて、ひどく云ひ澁りながら、『あの、私實はもうあのお七の繪は自分の手許へ取返して來たと先生に御返事をしてしまつたもんで御坐いますから、今更……』と、いふ。

笹山はそれを笑つて、

『いや、そんなことは何んでもない話ぢやないですか。どうせあれを粉本にして今度の帝展のを描くんなら、その間だけあの繪を增田さんにさう云つて借りて來りやそれで濟むぢやないですか。さうしてそれが濟んだら一度展覽會へ出して、大いに煽ほり上げて、そのあとで今度のが帝展へ出るといふ段取りにすりやもう占めたものです。だから先生の方へは飽迄手許にあるやうな顏でゐて、早く帝展の方の仕事にとりかゝるのですな。』と、いふ。

京子もさう云はれてみると、相手が笹山だけにもう何んとも云へなかつた。考へてみればあの繪が當分展覽會へさへ出なければ增田家へ賣却したこともなにも先生には知れない譯である。さうすれば、自分の手許にあるやうな顏をして濟ませる譯である。

京子は稍愁眉を開いて、

『でも、笹山さん。あの、增田さんの方のことは先生に知れるやうなことはないで御坐いませうか。』

笹山は階下の細君が持つて來てくれた鹽煎餅を無雜作にばりばり食ひながら、

『はゝゝゝ、さうどうも先生にばかり氣兼ねをしてゐないでもいゝでせう。知れたら知れた時でいゝぢやないですが。先生にしたつて、自分の秘藏弟子の作品が、他の人ならいざ知らず、あの增田さんの御意に叶つてお買ひ上げになつたとしたら、寧ろ嬉んでくれられるのが眞實ですよ。』

『でも、もし展覽會へでも出ますと、私、又破門騷ぎが起るのが辛う御坐いますわ。』

『はゝゝゝ、困つた人だねえ。いくら田原先生が頑固一點張りでも、貴女の人氣が出りやそんな分らんことは云やしないですよ。世の中といふものはもつと太膽に、もつと悧巧に渡らなけりや駄目です。殊に畫師のやうな水ものは機會といふものを狙ふのが一番肝腎だ。もう四の五の云はずに何事も私に任せてお置きなさい、私が決して惡いやうにはせんから、安

心してゐて下さい。』と云つて、ゆつたりと笑ひながら、『それよりも横川さん。この金は預りものだから、どうか一應調べてみて下さい。途中でピンを切つたとでも思はれちや、私も面目にかゝはりますからなあ。はゝゝゝゝ。』

京子はさうなつてみると、笹山の云ふやうな氣もして急に晴れやかな顏になりながら、

『あら、あんなことを、……』と、云つて、『それではこれは頂戴いたしましても宜しいんですか。』と、云つて、云ひ甲斐もなく慄へる手先でその角封を取上げて封を切つてみた。なかからは今銀行から出して來たばかりのやうな、手の切れるやうな十圓紙幣が三十枚出て來た。

京子は數をよんでゐるうちに頰が熱くなつて來て、恥かしいやうな嬉しいやうな惑亂が胸一杯に込みあげてくる。三百圓！　何んといふ澤山な金高であらう。これがあのお七の繪に對して支拂はれた金かと思ふと、京子は先づ自分で自分の眼を疑ひ、心を疑はずにはゐられないやうな心持ちになつて來た。彼女は端したなく思はれても何んだと思つて、やがて强ひて平靜を裝ひながら、『どうも有難う御坐います。確かに。』と、いつて、紙幣を又もとの角

封へしまひながら、ほんとにお庇蔭樣で、これで帝展の方の繪の繪具代や何かもすつかり心配が要らなくなりましたわ。ほんとに有難う御坐います。』と、いふ。

笹山はさも滿足さうに、合點いてみせた。

笹山はそれからも頻りに帝展のことを云つて、今度こそ死に身になつてやれ、もし今度の作品が入選すれば、田原先生ももう何も云ふことはないのであるから、どうかして土に嚙りついても入選しろと勵ましてくれた。そして金のことなぞで何か先生に云ひ憎いやうなことがあつたら、少しも遠慮はいらないから自分のところへいつて寄越せと、いつもながらの誠實な深切を見せながら云つてくれる。京子は又それで涙含ませられてしまつたのであつた。

彼此れ二時間ばかりもゆつくり腰を落着けて話すと、笹山はやがて歸り支度をして、

『それぢや横川さん、あんまり遲くなると又貴女に御迷惑だから私はもう失禮しますが、あの喜美子さんの方の一件は先刻お話ししした小谷と明日よく御相談下さい。この手紙もどうか小谷に見せて、何も隱さずに打明けて話して下さい。いづれ又そのうへで私も貴女に逢ふ機

會があるでせうから。』と、云つて、立上りながら、『や、どうもお邪魔をしました。』と、云つて、輕く一禮しながら階下へ下りてゆく。

京子は何となく物足りないやうな氣がして、その後に追ひ縋りながら、

『あら、まあ、もう少しおよろしいぢや御坐いませんか。』と、云つて引留めようとしたが、

笹山は笑つて、

『有難う。もう少時お話ししていつてもいゝのだが、戸は立てられぬ世上の口ですからなあ。はゝゝゝゝ。まあ、御免蒙りませう。』

京子はどうしたのか思はず頰を染めて、

『まあ、でも貴方と私ですもの、誰れが何を云ふもんですか。勿體なう御坐いますわ。』と、云つて、仕方がなしに玄關の方へ送り出してゆく。

その時、階下の琴子は奥から飛び出して來て、まださして見知りもないのに、馴々しく、

『あら、まあ、もうお歸りで被居いますか。生憎又降りだしまして、ほんとに困つてしまひ

ますわねえ。』と、いふ。

笹山はそれを聞くと、眉を顰めて、

『え、又降つて來ましたか』と、云つて、小耳を傾けると、成る程戸外では雨の音が軒先に聞えてゐる。笹山は頭をかいて、

『いや、こりや驚いたなあ。まさか今日はあんな天氣だつたから大丈夫だと思つてゐたが、こりや弱つた。』と、云つて、京子の方を顧みながら『横川さん、實は私雨具の用意をして居らんので、何處か此の近邊に傳は居らんでせうか知ら。』と、いふ。

琴子はそれを氣輕に受けて、

『あの、傳ならすぐ近くに御坐いますから、京子さん、一寸私が呼んで來て上げませう。一寸、どうかお待ち遊ばして。』と、いつて、それなり戸外へ出ていかうとする。

笹山はそれを押へて、笑ひながら、

『いや、態々呼びに行つて頂くには及ばんですよ。そこまで行つて乘りますから。』と、云つ

て、『横川さん。それぢや貴女お氣の毒だが、その俥の居るところまで一緒に行つて下さらんか。』と、いふ。

京子はにつこりして、

『え、さういたしませう。お易い御用です。』と、云つて、大急ぎで二階から自分の傘を取つて來て、その儘玄關へ下りてゆく。

笹山はもう麥稈帽子を被つて、靴を穿いてちやんと支度をして待つてゐた。

笹山は、琴子に、

『どうもおやかましう。』と、挨拶をして、やがて戸外の格子戸を開けると、その時、往來に立止つてゐた異樣な人影がついと傍へ逸れていつた。それは洋傘を深々とさしかけてゐるので、誰れとも顏は分らなかつたが、レインコートを着たまだ若い男らしく、どうみても今迄池島の家の前に佇んで家のなかの樣子を窺つてゐたものとしきや見えなかつた。

笹山は格子の外へついと出て、その男の後姿をじいと、鋭い眼で見送りながら、

『誰れだらう。變な奴だなあ。』と、口の中で呟いた。

京子も續いて出ながら、傘を開いて笹山にさしかけたが、ふつとその言葉を聞きつけて、

『誰れか居りますの？』と、訊く。

笹山は異樣の男の方を指さして、

『いや、どうも今あの男がそこに立つて我々の出るのをみてゐたやうだが、……』と、云つて、一寸間を置いて、『どうも實に物騷だなあ。』と、態とらしく笑ふ。

京子も眼を据ゑて、指さゝれた方を見送つたが、そこには降る雨のなかを洋傘をさした人影が何喰はぬ顏で壹岐坂の方へぽくぽく歩いてゆくばかりで、格別怪しい樣子もなかつた。

笹山も少時すると思ひかへして、

『いや、何んでもあるまい。ねえ、横川さん。今頃久保さんがこんなところをうろついて歩く譯もあるまいから聊か風聲鶴唳に驚くといふ形があるねえ。はゝゝゝゝ。』と笑つて、そのまゝ京子と相合傘をしながら往來の方へ歩み出ていつた。

道が暗いので、笹山は濡れないやうに、京子の方へ肩を寄せて、

『ねえ、横川さん。人がみたら實に怪しからんと思ふだらうねえ。男が妙齢の婦人と相合傘をして歩くなんて以つての他だ。はゝゝゝゝゝ。』

京子も思はず袂で口を掩つて、ほゝと笑ひ出しながら『あら、まあ厭な……』と、云つたつきり、顔を背けてしまつた。

俥宿はそこから一丁もなかつたので、京子は笹山をそこまで送つていつて、そこで俥に乗せた。そして再會を約して別れたが、京子は何んだか別れるのが寂しいやうで、その俥の提灯が町の彼方へ遠退くまで、ぼんやりそのあとを見送つてゐた。

十五

その翌日の朝まだ八時一寸過ぎ頃に、昨夜笹山が云つたやうに、小谷といふ男が笹山の紹

介の名刺をもつて、京子のところへ訪ねて來た。京子は慌てゝ居間を形つけてそこへ通した。

小谷といふのは四十格好の、いかにも世間人といつたやうな世辭のいゝ男で、これがそんな恐い私立探偵なぞをしてゐるのかと思はれるやうな人柄であつた。髪の薄い、頬の削けた、頭の低いその樣子をみてゐると、何處かの店の番頭のやうに思へてならなかつた。

京子は小谷に問はれるまゝに、もうすつかり笹山の云つたことを信用して、喜美子との關係やら、自分と峯村の家との關係やら、それから久保の身のうへなぞを包むところもなく物語つてしまつた。

小谷は少し猫背になつて、小さな手帳にその要點だけを書き留めてゐたが、やがて京子が喜美子からの手紙をみせると、手帳を膝のうへへ置いて、それを取上げてみながら、少時考へたあとで、

『横濱へいくとしてありますな。』と、呟くやうに云つて『ふむ、併しこりやどうも信用は出來ませんよ。先方の奴が行方を晦ます爲めに態とお妹さんにこれを書かせて出させたのかも

知れませんから、うつかりその手に乘つちや可けません。殊に横濱の方に何も引懸りがないとすると、尙ほ臭うございます。まあ假りに考へてみた時に、それほどの思ひをして誘拐したものを、他人に預けて他の土地へやつてしまふといふのも變ですし、これだけの手紙をかくだけの隙を與へるといふのが第一不思議です。もう年頃過ぎてゐる娘さんを誘拐した以上は寸分の間も眼を離しちやならん筈です。どうもこの手紙は可怪しいですなあ。これはたしかにお妹さん御自身の御手蹟でせうなあ。』

京子は合點いて、

『え、これはたしかに妹が自分で書いたものに相違ありません。』と、答へる。

小谷は默つて考へ込んでゐたが、やがて、

『いや、私の考へではまあ大概お妹さんをかくまつてある個處の見當だけはついて居るのですが、兎に角これだけ材料を供給して下すつた以上は誓つてお行方を搜して差上げます。何にしろ關係範圍が廣いので、果たして私の考へどほりにいくかどうか分りませんが、兎に角

私にひとつ腕を揮はして下さいまし。』と、云つて、所用かすむと、彼は冷たい麥湯を一杯飲んだつきりで、そのまゝそゝくさ歸つていつてしまつた。

京子は小谷が歸つていつてしまふと、何んだかひどく飽氣ない氣持ちになつてしまつた。探偵といふからにはもつと恐い、もの凄い顏でもしてゐて、たとへば質問をするにももつときびきびした要領を得た聞きかたをしさうなものである。それに小谷のはいかにも力が弱くて、押しも何も利きさうな風ではなかつた。それだけならまだしも、あんなひよひよした體で、血腥い事件や罪人を對手に何が出來るのであらうと思ふと、京子はどうも小谷を信賴する氣になれなくて、妙に賴りない心持ちになつて來た。

それでももうかうなつたうへは小谷を信じ、彼の手先に依つて喜美子の行方を搜索して貰ふより他に方法はないので、彼女は默つて、小谷からの返事をじいつと待つてゐるより他はなかつた。京子はじりじりと障子に照りつける日の色をみてゐると、涙ぐましいほど喜美子に逢ひ度くなつて來た。

その日の午後に笹山からは態々啓文社の小使にことづけて、例のお七の畫を屆けて寄越した。添書に依つてみると、増田の方から約二週間の約束でこれを借りて來たから、その間にどうか粉本をとつて、箱書をして又返してくれと書いてあつた。京子はその深切をどう感謝していゝか分らなくなつて、手紙で禮だけ云つて、丁度出來上つてゐる啓文社の雜誌の仕事を持たせて、小使を返した。

京子はやがてそのお七の畫を立派な桐箱から出して長押にかけてみた。自分では思ひも及ばないやうな立派な表裝がしてあるので、畫は自分で描いたものとは思はれない程引立つてみえる。京子はじいつとみてゐると、正田の帶をしめたうら若いお七が戀ひの惱みに責められながら、涙の眼を伏せて、自分の眼の前に歩み出てくるやうな氣がして、聲を立て度いほどの嬉れしさが込みあげて來た。かうしてみると成る程先生があゝ云つて下すつただけに、立派な出來榮である。自分の數ある作品の中で一番氣に入つてゐたものだけに、さうした權威のある讃詞を聞いたうへは妙に自信が出て、一寸した狹の線のやうなものにでも限りない滿

足を覺えるのであつた。よくこんなものが描けたと思ふ時が、京子の得意の絶頂であつた。

京子はそれと同時に、又昨夜笹山から貰つた三百圓のことが心にうづく程思ひ出されて來た。昨夜は何んだかその金のことが氣にかゝつておちおち寢てゐられないやうな氣がしたが、もう今日も朝から二度ほど机の抽斗から角封を取出して、手の切れるやうな紙幣を數へてみたりしたのであつた。

京子はふつと思ひついて、それだけの金が出來たうへは早速帝展へ出す屏風の下ごしらへにかゝらうと思つた。繪具も何うしても六七十圓は買はなければならないし、それに筆洗や、畫筆なぞも新しい、いゝのを買ひ度いので、思ひ立つたが吉日と、彼女はそれからすぐに日本橋の繪具屋へそれを買ひに行くことにした。

日盛りにもかゝはらず、京子はそれから少時すると、支度をとゝのへて家を出た。そしてその足で本郷の通りにある東京貯蓄銀行といふのへいつて、差當つて不要の二百圓だけを預けて、薄い特別當座の通帳を貰つた。その銀行は階下の池島が五年の据置貯金をやつてゐる

のでそれで知つてゐるのであつた。薄暗い窓口へいつて、新しい紙幣をずらりと出すと、金網のなかでは銀行員の眼が光つたやうに京子には思はれたのであつた。

京子は殘りの百圓を通帳と一緒に袱紗につゝみ、それをしつかりと肌に押し當てゝ、それから電車で、日本橋へ出ていつた。

十六

京子が思ひ通りの買物をして、ぶらぶら家の方へ歸り出したのはもうそろそろ黃昏時であつた。その日はいつもの日和癖をけろりと忘れてしまつたやうに空は飽迄高く晴れ渡つて、そのかはり暑氣が殊の他激しかつた。

それでも夕方になるに從つて、涼しい風が吹いて來て戸外を歩いてゐると耐らなく氣が輕くなるやうな空模樣になつて來た。

京子は夕影の出來た日本橋の大通りをぶらぶら歩いてやつと須田町までやつて來た。そこまで來ると、來る電車も來る電車もまるで人が房なりに乘つてゐて、さすがに廣い停留場も押し返すやうに混雜してゐる。

いつも夕方にはひどく混雜するのだが、それにしても今日はどうしてこんなだらうと思ふと、京子はふつとその日が川開きであることを思ひ出した。つひ今朝新聞でみながら、すつかり忘れてゐたのを彼女は今になつて思ひ出したのであつた。さう云へば兩國行きの電車が中でも一番混んでゐて、女子供にはとても乘れさうもない有樣であつた。

京子は四辻の角のところに立つて、着飾つた女達が、物好きにも芋の子を洗ふやうな混雜に揉まれてゐる樣を面白さうに眺めてゐた。どうせその中へ入つていつたとて、乘れないのは知れきつてゐるし、彼女自身はさして遠い道程でもないので、ぶらぶら家まで歩いて歸ることにしてゐたのであつた。

町並にはもうそろそろ紅い燈がぽつりぽつりと彼方此方で瞬いてくる。町のどよみは轟々

と響いて、西空に漸次と薄れてゆく夕雲の影が何とも云へないほど美しかつた。

京子は電車や自動車が危いので、やがて隙を見て萬世橋の停車場の方へ駆けぬけようとした。と、その時、突然後から、

『おゝ横川さん。横川さんぢやありませんか。』

と、呼びかける男の聲が聞えた。

京子は不意だつたので吃驚して後を振顧つてみたが、とみると、彼女のすぐ後には白の背廣を着た啓文社の黒田夢人がにこにこ笑ひながら突立つてゐる。つひ今すぐ前の西洋料理屋から出て來たものらしく、彼は楊子を喞へて、何處か意氣揚々としてゐた。

京子は二度吃驚したが、すぐに愛想よく笑つて、

『あら、黒田さん。ちつとも知りませんで……』と、云つて、改めて挨拶をする。

黒田はさもいゝところで出逢はしたといふやうに、

『や　ほんとに思ひがけないところでお眼にかゝりましたなあ。はゝゝゝ。今日は何方へ？』

京子は心の中では厭な奴に逢つたとは思つたが、さもない顔で、

『あの、私一寸日本橋まで買ひものに參りまして、……』と、云つて、『あの、今日啓文社からお使ひでしたんで、殘りの仕事を差上げて置きましたが、お受取り下すつたでせうか。』と、いふ。

黒田はこくりこくりと合點いて、

『頂きましたとも。どうも今月は大層な出來で、編輯の方で大評判ですよ。もし今日屆けて頂けなかつたら、僕がお宅へ取りに上らうと思つて樂しみにしてゐたんですが、小使かいつたためにその光榮を得ずに殘念でしたよ。はゝゝゝ。併し毎月かういふ風にやつて頂けると、僕達は大助かりです。どうか今後もよろしく願ひます。』と、冗談らしく云つて、『貴女はこれからお宅へお歸りですか。』と、訊く。

京子は言葉少なに、

『え、・・・』と、答へたが、黒田はそれをみると媚びるやうに、

『この鹽梅ぢやとても電車に乗れさうもありませんなあ。こりや弱つた。悪い時に川開きなんぞに打衝かつちやつて、はゝゝゝゝ。』と云つて、急に思ひ出したやうに、『あ、さう云へば横川さん。僕此間からお話ししようと思つてゐたんですけれど、實は今度下宿をかへましてねえ、貴女と同じ本郷へ越したんですよ。』と、いふ。

京子は默つてゐる譯にもいかないので、

『まあ、さうで御坐いますか。今度は何方で御坐いますの?』と、訊く。

黒田は内衣嚢から名刺を出して、それを京子に渡しながら、

『あの天神町の往合のなかなんですが、馬鹿にい、家でね、素人下宿としては殆んど理想に近い家なんです。實は葉書でお報らせしようかと思つてゐたんですが、そのうちに又お眼にかゝれると思つて失敬してました。どうかお近いところですから、是非一度遊びに被來つて下さい。何にしろ階下では長唄の師匠をしてゐようといふやうな粋な家ですから、短篇もの

の材料がうんとあるんで、僕も大いに觀察してやつてゐるんです。はゝゝゝゝ。』

京子も愛想笑ひをして、

『まあ、あすこいらは色町で御坐いますからさぞねえ・・・』と、いふ。

黒田は舌なめずりをしながら、

『僕の家へは雛妓が主に習ひに來るんで、實に面白いですよ。』と、いつて、馴々しく『どうです、もしお差支へがなかつたら、一寸歸りにお寄りになりませんか。』と、圖々しく切り出す。

京子は顔を伏せて、

『有難う御坐います。又そのうちに。』と、云つたが、それでも黒田は太膽に、

『兎に角この樣子ではとても電車は駄目ですから、ぶらぶら御一緒に歩いていかうぢやありませんか。』と云ふ。

京子も一方では黒田が少し醉つてゐるらしいので厭だとは思つてゐながら、又一方では黒

田を呑んでかゝつてゐるので、いくら何んでも自分に對して何が出來るものかといふ氣になつてゐた。どうせ何んなら、こんないゝ宵であるから、ぶらぶら上野あたりを散歩して歸るのもいゝと思つて、それには一人でも連れがある方が寂しくないので、彼女はやがて、

『それぢやそこいらまで御一緒にお伴をいたしませう。』と、云つて、そのまゝ黑田のあとからそつと人込みを分けていつた。黑田はほくほくして、さも得意さうに、群衆を分けていつた。

黑田は萬世橋を渡ると、態と話に紛らかして京子を御成街道の方へと誘つていつた。京子はほんたうなら松住町の方へ出てゆく方が近かつたが、何喰はぬ顏で、そのまゝ黑田と肩を並べて歩いていつた。

黑田はひどく得々した調子で、

『横川さん。ほんとに僕貴女ともう少しお親しくなつてゐると、これから川開きへでもお伴するんですがなあ。今日は實は月給日でねえ、それに來月の「文藝」といふ雜誌に頼まれて

百枚ばかりのものを書いたんで、僕の財布は實に優勢なんですよ。はゝゝゝゝ。今夜はこれから何處かへいつて、一杯やらうと思つて、實は大いに樂しみにしてゐるんですよ。この良夜を如何んせんといふやうな良い晩ぢやありませんか。』

京子はその薄ッぺらなものゝ云ひ方が可笑しくて腹の中では笑つてゐたが、それでも表面ではさあらぬ顏で、

『ほんとに男の方はよう御坐いますのねえ。お金をお取りにならうと思へば自由におとれになりますし、又お費ひにならうと思へば勝手にお費ひになれるんですものねえ。そこへいくと女はほんとにつまりませんわ。いくら費はうと思つても費ふところもありませんし、それに第一いくら働いても費へるだけのお金はとれないんで御坐いますもの。』

黑田は態と追縱らしく、

『いや、貴女なんぞは畫家として立派な腕があるんですもの、そんなことは云はせませんよ。いくらだつて描けば金は思ふさま取れるんぢやありませんか。』と、云つて、ぢろぢろ、京

子の顔色をよみながら、『僕なぞも原稿が賣れないうちは實に悲慘なものでしたよ。二十圓と纏つた仕事は到底出來んのですからなあ。併しまあ努力した甲斐があつて、此頃では文壇でもやつと認められて來ましたし、原稿も一枚一圓五十錢位は取れるので、やつと幾らか餘裕が出來て來ましたよ。はゝゝゝゝ。』

『ほんとに結構ですわ。全く自分の腕一本で働くほど氣持ちのいゝことは御坐いませんものねえ。』京子はその言葉だけは腹から云へた。

黒田は一寸の間も話を切らすまいとして、先から先と話題を追つていつたが、ともすると、その話は文學談になつて、自分の自慢に落ちてゆく。どうかして自分の新進作家としての位置を京子に認めさせようとしてゐるその態度が京子には却つて可笑しくてならなかつた。彼女は黒田が最近に發表した短篇の話をしだすと、迎合するやうに、

『ほんとに大層な御評判ださうですわねえ。私も是非一度讀まして頂き度いと思つて居りますわ。』と、いふ。

黒田は圖に乘つて、

『いや、もし貴女がほんとに讀んで下さるんなら、僕早速明日お屆けします。僕が最近に經驗した或女の微細な心理を描いたものですから、貴女方にもきつと共鳴するだらうと思つてますよ。はゝゝゝゝ。』

そんな話をしてゐるうちに彼等は西黒門町のところまで來てしまつた。京子は黒田の云ふことが漸次齒の浮くやうな調子になつて來るので、しまひには少し煩くなつて、何んだかもういゝ加減に別れ度くなつてしまつた。で、湯島の切通しの方へ曲るところで、ふいと立止つて、

『黒田さん。それでは私こゝで失禮いたしますわ。あんまり遲くなると又困ることがありますから。』と、切り出す。黒田も明るい店明りのなかへ立止つて、

『まあ、いゝでせう。もう僕の家はぢきそこなんですもの、折角此處迄來たんですから、せめてお茶でも一杯飲んでいつて下さい。』

京子は微笑んで、

『有難う御坐います。でも貴方これから何處かへお遊びに被往るんで御坐いませう。その御愉快のお邪魔をしちや濟みませんわ。』

『いや、こりや驚いた。冷評つこなしにしませうよ。僕にすりやかうして貴女と御一緒に歩いてゐる力が藝者なんぞ相手にしてゐるよりもいくら面白いか知れないんですもの。どうかもう少しの間交際つて下さい。』と、云つて、すぐ上の天神の高臺を見上げながら、『もし僕の家へ來るのが厭でしたら、せめて彼處へでもあがつてもう少しお話をしようぢやありませんか。今日は彼處からみたらきつと煙花が手にとるやうに見えますよ』と、いふ。

京子もさう云はれると無下にも斷りかねてどうせ眞砂町へ歸る方向なので、やがて黒田と一緒に男坂を上つていつた。天神の境内へ上つてみると、そこは煙花を見る人の群で一杯で學生もゐれば、藝者風の女もゐる、種々樣々の人達が薄暗い中にうようよしてゐた。

そこの崖端に立つて眺めると、唯みる眼の下は限りもない燈火の海であつた。燈の列は自

ら美しい綉を描いてそのうへには薄靄が煙のやうに搖曳してゐる。左手にみえる上野の森はその海のなかへ突出した岬の一角のやうで、時々電車のスパークが迸發するのが夜の大氣に蒼ざめた戰慄を傳へるやうにみえた。

隅田川の川筋と思ふ邊では絶えず眼を眩するやうな煙花が打上げられてゐる。ぱつと中空に開く火花は流星のやうに須臾の間に消えて、星のきらめく夜の暗に青や紅のあえかな幻影を殘してゆく。殊に仕懸け煙花の上げられる時には町の家並が火事のやうに燃えて眞紅な火龍の頭がぱつとみえたりした。其都度に何處かで子供の喚く聲が聞えて、涼しい夜風もざわめくかとばかり思はれた。

京子は昔の浮世繪に現はれた川開の艶冶な夜景を思ひ浮べたりしながら、何かしら非常に樂しい、嗾られるやうな心持ちになつてゐた。もう今からは十三四年前に、父の墓坡に連れられて柳橋の河岸にある大きな料理屋へこの煙花をみにいつた思出なぞもいつとはなしに心に歸つてくる。その時に自分達の傍にゐた雛妓の美しい衣裳なぞも今まざまざと描き出すこ

とが出來た。

二人はそこへ立つて少時の間煙花をみてゐたが、群衆は刻々に增してくるので、やがて京子は何んにも云はずに柵のところを離れた。そして今度は切通しの方へ出ていかうとすると、黑田は執念く後を追つてきて、

『横川さん。ぢやもう愈々お別れですか。どうも貴女は僕を警戒してゐて可かんですなあ。はゝゝゝゝ。それとも僕なんかと夜歩きをしちや笹山さんに叱られますかね。ほんとに貴女も氣をお注けなさらないと、あの笹山さんに今に酷い目にあはされますぜ。ありやほんとの僞善家ですからねえ。僕等はいろんなことを聞き込んでゐるんだが、もう少時の間發表を見合はせませう。何にしてもあの人が貴女を占有してゐるのは實に羨ましいですよ。』と、急にあけすけな態度になつてくる。

京子はそんなことを云はれると腹立たしくてならなかつたが、併し黑田風情の男を相手にするでもないと思つて默つてゐた。

それから間もなく京子は角立たないやうに黑田に別れて家へ歸つていつた。

十七

私立探偵の小谷があれほど引受けていつたにも不拘、それから二三日の間は喜美子の行方に對しては杳として音沙汰がなかつた。京子はそれを思ふと、もう焦悶かしくて耐らなかつたが、併しいづれにせよ、さうした黑人の手にかけても搜索の見込みがたゝないとすると、いかに自分達があくせく氣に病んだとて無駄な話なので、京子はもう何事も運命と諦めて、何うにかなるまで默つて待つてゐるより他に仕樣がないと思つた。

京子はそれよりも帝展へ出品する屏風のことが、二六時中頭を惱ますのであつた。去年はあゝして見事に入選したのであるから、今年はせめて何んとかして褒狀位には入らなければ先生に對しても申譯がない。それは今の自分の技量にしては非常に困難なことではあるが、

併しやつてやれないことはない筈である。數多い閨秀畫家のなかでも年に二三人づつは必ずさうした光榮を得るのであるから、一心が徹つて、出來上つたものがよくさへあれば決して仇なる望みに終る筈はないのである。それをするには先づ何を措いても努力である。奮勵である。さう思ふと、京子はもう胸の血が湧くやうで、考へただけでも腕節に力が入つてくるやうな緊張を覺える。彼女は朝起きるから晩寢るまで、じつと自分の心を瞻めながら藝術的な感興が横溢してくるのを待つてゐた。夜寢てからも、彼女の眼の前には畫面ばかりが夢の中にまで見えて、描かうと思ふ當體のお七が、いろいろな姿になつてくつきりと見えて來た。そのお七は漸次と自分の心の方へ近寄つてくるやうに思はれた。

構圖は日一日に極つて來た。笹山の手で增田家へ賣られたお七の繪は始終自分の部屋の形ばかりの床の間へ懸けて置いた。それをみる度に、彼女には構圖や色彩の微細なデテールまで思ひ浮べられるやうになつて、或日の午後到頭彼女は押へ切れないやうな創作慾に衝き動かされて、大判の唐紙へいよいよ下畫を取りはじめた。下畫にかゝるともう感興は先から先と湧いて來て、彼女は木炭と羽箒で巧みに美女の姿を描きだしてゐるうちに、時の經つのも何も忘れてしまつた。日が暮れて、畫面がうつすりと暗くなつて、木炭の運びもたどたどしくなつてくると、彼女は漸う夢が覺めたやうに畫面から顏を離したのであつた。

そこへ突然階下から細君が上つて來て、

『ねえ、京子さん。又あの笹山さんが被來いましたよ。此方へお通し申してよろしいんですか。』と、いふ。

京子は笹山と聞くと、何んとなく嬉れしさが胸一杯に湧いて、

『まあ、笹山さんが被來つたんですか。それならどうぞ此方へ。』と、いふ。彼女はあまり畫に專心してゐて、表の格子戸が開いたのも何も氣づかずにゐたのであつた。

やがて階段のところから、いつものやうな笑顏をしながら笹山が、

『やあ、……』と、云ひながら入つて來て、『やあ、こりや御勉强ですな。いよいよ大作にかかりましたな。はゝゝゝ。そりや何よりだ。』と、さも嬉れしさうに云つて、一杯に廣げてあ

る毛氈や唐紙をよけて、態と隅の方の窓際へいつて坐つた。

京子は氣の毒さうに、

『どうもほんとに取散らかして居りまして、御免遊ばせよ。』と、云つて、それでもそこいらを少し取形づけながら、『先達はどうもまたいろいろ有難うございました。お庇護樣で私帝展の方の準備がすつかり出來ましたんでこんな嬉れしいことは御坐いませんわ。』と、云つて、茶を入れる支度をする。

笹山は煙草を取出して、

『いや、何よりも今頃からかゝつてゐりや今度も入選は間違ひないですよ。もう此れからは何事も忘れて、精神をこの畫ひとつに打込んでやらんけりや可かん。』と、云つて、描きかけの下繪を眺めながら、『ほう、こりや下繪ですな。お七の立姿が。かうしてみただけでも何んだかすばらしいものが出來さうな氣がして、私達までがかう嬉れしくなつてくるですよ。まあどうか精々一生懸命にやつて下さい。』と、勵ますやうに云ふ。

京子はもういそいそして、やがて笹山にあつい茶をすすめて、今度の畫の計劃なぞをぽつぽつ話しだした。京子は心持ちが張り切つてゐるので、いふ言葉もはきはきして、いろんな空想やら、繪に對する希望やらが先々と唇をついて出てくる。彼女の顏には生々とした血がのぼつて、いつもより立優つて美しくみえさへした。

笹山はゆつたりと合點いて、一々彼女の言葉に批評を加へたり、勵ましたりしてゐたが、やがてふつと言葉の調子を變へて、

『横川さん、それはさうと、實はあの喜美子さんの一件ですがねえ、あれから小谷の方から何か返事がありましたか？』と、訊く。

京子もその問題を思ひ出して、

『あ、私もそのことをお伺ひ致さうと思つて居りまして、……』と、云つて、笹山の顏をじつとみながら、『あの、私もう二三日前から心待ちに待つてゐるんで御坐いますけれど、何とも音沙汰がないんで御坐いますの。どう致したんで御坐いませう。』

笹山も眉を顰めて、

『いや、それぢや此方へもまだ何とも云つて來ませんか。實は私もあのまゝになつてゐて氣がかりで耐らなかつたもんですから、今日所用の序に一寸小谷の事務所へ寄つてみたんです。ところがいゝ鹽梅に小谷もゐて、いろいろ搜索の結果を話して呉れました。』と、云つて、彼は一寸言葉を切りながら、

『ねえ、横川さん、それに就いて實は困つたことが起つたのですよ。』と、當惑したやうな顏になりながらいふ。

京子もそれを聞くと、思はず片唾を呑んで、

『まあ、何う致しましたの？』と、云つたが、笹山はそれを眼で抑へて、

『いや、そりや他のことでもありませんが、實は小谷が方々當つてみた結果、喜美子さんはどうも峰村さんの家にゐるらしいといふ推定がついたのです。小谷はあゝいふ緻密な專門家のことですから、先づ横濱の方の問題はそのまゝにして置いて、大體の見當を峰村さんの家

と、それから久保さんのゐる井上の家へつけて置いて、周圍から綿密に調べていつたのです。さうして家へ出入する商人や、それから近邊の噂といふやうなものから漸次に責めていつてみたところ、どうもあの喜美子さんは峯村さんの家に監禁されてゐるらしいといふ結論になつて來たのです。まだこれといつて確證が上つた譯ではありませんから、小谷も此處へそれをお話しにくるまでの段取りにはなつて居らんのでせうが、併し大體はさういふことになつて居るのです。喜美子さんの行方が分つたのは何よりですが、併し峰村さんの家に居るとすると、又事が面倒になつて來るですなあ。』

京子も喜美子が母の家に監禁されてゐるとなると、笹山の云ふやうに大分事が面倒になつてくるものと思はずにはゐられなかつた。見ず知らずのところへ隱されたのと違つて、母の家にゐるとすれば行住坐臥のことにはさして心配はなかつたが、併しそれと同時に、彼女の身邊には常に恐ろしい壓迫や、强迫が加へられるのは覺悟してゐなければならぬ。それは喜美子にとつてはどれほど辛いことであるか知れなかつた。

京子は眼を伏せて、

『あの、私もひよつとしたらそんなことではあるまいかと思つて居りましたが、やつぱり小谷さんの方からお調べなすつてもさうなので御坐いませうかねえ。もし峰村に居りますとすると、さぞ又喜美子が切ない思ひをしてゐやしまいかと思ひましてねえ。』

『いや、そりや仰有るまでもない。今度はきつともう手も足も出ないやうな目に逢はされてゐられるに相違ない。併し小谷の方から云はせると、もし茲でどうかして喜美子さんをもう一度貴女の側へ引戻すとなると、相手が生みのお母さんだけに非常に仕事がしにくい。それをどうか貴女にさう云つて、何んとか方法を考へて置いてくれといふのです。』

京子もさう云はれると、尤もだと思はずにはゐられなかつた。もし何かへまなことをして、親としての權利を振廻はされでもすれば一層關係が紛糾してくるのである。京子は考へ深い顏になつて、

『ほんとにそれは小谷さんの仰有るとほりですわ。私もひとつよう〳〵前後のことを考へて、何んとかうまい方法を考へませう。峯村の家にゐるといふことがはつきり分れば、又何んとか仕樣もあると思ひますわ。』と、云つて稍安心したやうに、『でもほんとにお庇護樣でどうやら行方も知れて、私もどんなにか安心が出來ますでせう。ほんとに何もかも皆貴方のお力で御坐いますわ。』と、しんみり禮を云ふ。

笹山は微笑みもしずに、

『いや、京子さん。まだそんなことを云つて安心してゐられる場合ではありませんよ。十中七八は峯村さんだらうと當てがついただけで、何もまだ確證が上つた譯ではないのですから、今決して手を緩めてはいけません。貴女の方でも充分手を廻して、先から先と捜つてみる必要があるのです。さうして確かにゐるといふ證據が上つたらそのうへで充分手をつくして取戻す手段を講じなけりやいけません。』

さう云はれても京子は何んだかもう喜美子の居所が分つたやうな氣がして、妙に胸が開いてゆくのであつた。彼女は頻りにありさうなことばかり考へて、それに一々自分の考へを當

てはめていかうとした。笹山は笑つて浮の空で返事だけしてゐた。

十八

笹山はそれから少時の間話したあとで、いつものやうに立ち際よく歸り支度して、まるで笑談のやうに、

『横川さん。どうです、今夜はひとつせめて散歩がてらに、電車の停留場まででもぶらぶら送つて來ませんか。さう一日家にばかり引籠つてゐては、いまに筆が澁るやうになりますよ。』と、いふ。

京子もにつこりして、

『ほんとにねえ。私も實は散歩にでも出ようかと思つて居りましたところですわ。それではそこいらまでお送り致しませう。』と、云つて、窓から一寸戸外をのぞいてみながら、『お、今

夜はい、月夜で御坐いますわねえ。本郷通りはさぞ人が出て居りますでせうねえ。』と、いふ。

京子はやがて手早く身支度をして、笹山と一緒に戸外へ出た。琴子は上框のところまで出て來て、二人の出てゆくのをそれとなく見送つてゐた。

笹山は戸外へ出ると、さも氣が輕さうに、

『今夜はほんとにい、晩ですなあ。こんな晩にたつた一人で歩くのも興がない。ほんとにい、月だ。』なぞと云つて歩いてゐたが、本郷通りの角まで來ると、ふつと思ひついたやうに、

『ねえ、横川さん。何處かそこいらで、何か冷たいものでも飲んでいかうぢやありませんか。私は喉が渴いて耐らんから』と、いふ。

京子は度々のことなので、もう此頃ではすつかり馴れてしまつて、

『え、お伴いたしませうとも。此處いらにはアイスクリームやなんか飲ませる家は澤山御坐いますわ。』なぞといかにも氣輕に返事をする。

笹山は笑つて、

『ほんとに此處いらにはさういふ家は何軒もあるですなあ。私の家の近邊なぞときたら、まるで田舍でねえ、晩になつて子供を連れて散歩に出ても何ひとつ飲ませてやることは出來んのですよ。』と、云つて、往來の人影を見ながら、『どうもえらい人出だ。まるで緣日のやうですなあ』なぞといふ。

廣い本鄕通りには、兩側の歩道に明るい店明りが輝いて、そのなかを身輕ないでたちをした學生や、勤人風の男や、束髮に結つた女なぞが、涼みがてらにぶらぶら散歩して歩いてゐる。山の手は山の手で又夏の宵の賑はひがあつて、中形の浴衣を着た若い奥さんなぞの後姿は、何處となく艶めかしかつた。

笹山は、とある横町の角にある長樂軒といふ新らしいカッフェの前までくると、ふつと足を止めて、

『お、長樂軒といふのは此れですか。此間開店したばかりだと思つてゐたが、立派な店になりましたなあ。ひとつ此處へ入つてアイスクリームでも飲みませうか。』と、いふ。

京子は店の中から聞えてくる唆るやうな蓄音機の音に誘はれて、そのまゝ笹山の後についてその店へ入つていつた。

店へ入るとすぐとッつきのところに大きな階段があつて、そこから二階の廣間へ上れるやうになつてゐる。階上には卓の數にして十四五も並ぶ位な廣間が二間つづいてゐて、彼等が上つていつた時には可成客がたて込んでゐた。

笹山はつかつか廣間へ入つて、煽風器のすぐ下にある空いた卓へいつて、どつかと無雜作に腰を据ゑながら、

『さ、横川さん。此處が空いてゐますよ。』と、云つて、京子の方へ笑顔をみせる。

京子もそこへ入つていつて、皆の客に顔を見られるのが恥かしさうに、そつと椅子に就いた。そこへ白粉をこてこて塗つた女給仕が注文を聞きに來たので、笹山は京子に、

『貴女は何を飲みますか。アイスクリーム？それとも何か別なものですか？』と、優しい調子で聞く。

京子は顔を伏せて、

『私、あの、貴方の召飲るものなら、何んでも結構ですわ。』と、いふ。

笹山はそれではと云つて、アイスクリームソーダを二つ注文した。女給仕は二人の樣をじろりとみながら卓の傍を離れていつた。

笹山はそつと四邊を見廻はしながら、

『さすがに新らしい家だけに氣持ちがいゝですなあ。それに此處いらは學生の客が大部分を占めてゐるんでごみごみしてゐなくていゝですよ。これが下町で御覽なさい、いろんな客がごつちやになるんで、趣味が蕪雜になつて、却つてカツフエらしい氣分がなくなつてしまふですよ。』

さう云つてゐるところへ、突然すぐ傍の大きな棕梠竹の影から、一人の男がぬうつと顔を出して、

『やあ、笹山さん。』と、いふ。それは背廣を着たまだ若い男で、向ふから射して來る光を受

けて眼鏡だけがぎらりと光つた。よくみると、それは例の黑田夢人であつた。

笹山も京子もあんまり不意だつたので、悸乎としてしまつた。それでも笹山はすぐにさり氣ない笑顔になつて、

『やあ、黑田君か。相變らずこんなところでカツフエ荒らしをやつとるな。はゝゝゝゝ。』と向ふを掩ふやうに笑ふ。

黑田はそのまゝ卓子から立つて此方へ歩いて來ながら『はゝゝゝゝ。カツフエ荒らしはないでせう。僕は今度此處の定連になつたんですから、どうかそのつもりで被居つて下さい。はゝゝゝゝ。』と云つて、態と今氣がついたやうな顔をしながら、『よう、横川さんも御一緒なんですか。こりやお揃ひで、はゝゝゝゝ。』と、意味ありげに、態とらしく笑ふ。さういふ彼は可成り醉つてゐるらしかつた。

京子は笹山が一緒であるだけに妙に氣がひけて、唯微笑みながら挨拶を返しただけであつた。

黒田はそのまゝ折柄やつて來た十八九の可愛らしい女給仕を呼んで、

『おい、お千代さん。僕はこの卓へ一緒になるから、あのウキスキイソーダを此方へ持つて來ておくれ。』と、命じて『ねえ、笹山さん、一緒になつてもいゝでせう。今夜はひとつあなたを強請らなくつちやならないことがあるから、その覺悟で被居い。はゝゝゝゝ。ねえ横川さん貴女も涼しい顏をして、はゝゝゝゝゝゝ。どうも實に怪しからん。』と、笑談らしくいつて、有り合ふ椅子にどつかと坐る。

笹山はさういはれると不愉快さうな顏になつて、

『どうも大した景氣だねえ。當時流行の新進作家で、ぱつぱと原稿料の入る人はさすがに違つたものだねえ。はゝゝゝゝ。』と、笑つて、『いや、併し君なんぞは丁度こゝいらのウエイトレッスぐらゐが程度だよ。まあ、精々飲んで廻るさ。』と、話を逸らすやうに皮肉にいふ。

黒田はその眼を見返して、

『ウエイトレッス、至極結構。はゝゝゝ、僕なんざ、貴方がたと違つて、なんでも女でありさへすりやい、時代なんですからなあ。はゝゝゝゝゝ』と、云つたが、さういふ調子は平常と違つて何處か傲慢なところがあつた。啓文社では厭にへいつくしてゐる黒田が、笹山の前でかうした馴々しい人を人とも思はないやうな口をきくのが端でみてゐる京子には寧ろ小憎らしくてならなかつた。

笹山と京子はやがて女給仕が注文した飲みものをもつて來たので、麥稈の吸口をとつて吸ひだすと、黒田はそれを傍からかふやうに、

『アイスクリームソーダとは無事ですなあ。今夜は何方のお歸りです。お二人連れで夜の散歩なぞはお羨ましいですなあ。はゝゝゝゝ。』

笹山は厭な顏をして、

『おい、黒田君、笑談もいゝ加減にし給へ。我々の行動を君達のやうな生若い連中と一緒にされちや甚だ迷惑だ。あんまり出過ぎた口を利くと人が笑ふよ。』

黒田も醉つてゐるので、一寸氣色ばんで、

『いや、懸したつて駄目ですよ。僕はもうちやんとこの黒い眼で睨んでゐるんだ。はゝゝゝ。横川さん。貴女もそんなに澄ましてゐないで、せめてウエスキイの一杯位御馳走をして下すつても罰も當らんでせう。どうせ勘定はこの笹山さんの懐から出るんですからね。はゝゝゝゝ。』

京子はさういはれると腹立たしさを抑へて默つてゐた。笹山は眼を光らして、

『おい、黒田君、詰らんことをいふのはいゝ、加減にしたらよからう。今夜は醉つてゐるんだからまあ許して置くが、あんまり下らんことをいふと君の爲めにならんよ。』と、底氣味の惡い聲で、威嚇すやうにいふ。

黒田はそれでも執拗く、

『いや、貴方の方こそ白ばつくれなくてもようございますよ。かういふところを見せつけられちやこのまゝぢや置けない。何んとかしてこの僕を買收して置かないと、明日つから編輯が煩うございますぜ。』と、何處か一生懸命なところをみせながらいふ。

笹山はその顏をじいつと見ながら少時の間默つてゐたが、やがて投げ出すやうに、

『ほんとに困つた男だ。酒に醉ふと此れだから可かん。一體君は近頃妙につけ上つて居つて可かんよ。もう少し他人に對する禮を知り給へ。そんなことをしとると君の不利益になるぞ。』と、又先を掩ふやうにいふ。

黒田は鼻の先でせゝら笑つて、

『いや、不利益になつたつて、どうしたつて構はんです。どうせ僕ももうさう長くは貴方の麾下にも居らんでせうからなあ。自分で原稿を賣つて飯が食へるやうになりや、それが何よりなんですから。はゝゝゝゝ。雛鳥も三年經ちや巣立ちますよ。』と、いかにもつけ上つたものゝ云ひ方をする。

笹山はむッとしたやうな顏をしてゐたが、やがて我を押へてゐるやうに、

『大した氣焰だね。まあ、いゝ。兎に角そんな問題は今茲で論すべきことぢやない。まあ、いづれ明日でも酒がさめたら、一度私のところへやつて來たらよからう。充分戒飾してやる

から。』と、云つて、彼は京子の方を顧みながら、『横川さん。それぢや遲くなると可けないから、そろそろいかうぢやありませんか。こんな醉ッ拂ひを相手にして居ると、此方がコケになる。はゝゝゝ。』と、敵意を示すやうに云つて、そのまゝ卓子を立つてしまつた。

京子もその後からついていつた。

黑田は二人のあとを燃えるやうな眼で見送つてゐたが、やがてそつぽを向いて、端に聞える位な舌打ちをして、

『人を馬鹿にしてゐやがらあ！』と、吐き出すやうに云つた。

笹山は戸外へ出てくると、又いつものにこやかな顏になつて、

『いや、横川さん。とんだ奴に見付かつてしまひましたなあ。彼奴は社でも一番口の煩い奴だから、何を云ひ觸らして歩くか知れませんぜ。とんだ御迷惑をかけてしまひましたなあ。』と、氣の毒さうに云ふ。

京子は却つて恐縮して、

『いゝえ、どういたしまして、私こそほんとに御迷惑をかけてしまひましたわ。』と、いふのを笹山は抑へて、

『いや、貴女と私との噂はもう此間から若い社員達の間で問題になつて居るのです。あゝいふ手合ひはいろんな風說をたてたがるもので、つまり私が貴女に對して盡す親切を妙な意味に解釋してゐるのですなあ。どうも若いものといふものはこれで困るですよ。』

京子も眞面目になつて、

『あの、私もそんな噂は耳に致しましたわ。でも、云ふ人には何んとでも云はせて置けばよろしいぢや御坐いませんか。私、一々辯解して歩くのは却つて可けないと思ひましてもう何を云はれてもほんとに平氣で居りますのよ。』

『いや、貴女がその氣でゐて下さればそれに越したことはありませんが、矢張りあゝして鼻の先で何か云はれると、少しは腹も立ちますからなあ。』と、云つて、笹山はなるべく人眼を避けるやうに道の片影の方へ入つていきながら『それにあの黑田は此頃どうも可かんので

す。彼奴の書く下らない三文小説が少しづつ賣れだしたんで、もう有頂天になつて居るのです。少し具眼者がみれば、どうしてあんなものを買ふ者があるかと思ふやうな小説だが、それでもやつぱり安すつぽい時流に投じるとみえて、たとへ一枚八十錢にでも一圓にでも賣れるから附け上るのです。唯氣焰を吐いて歩いてゐるだけならまだ可愛いが、この頃では社の仕事は怠ける、行く先々では禮を失して失敗をやつてくる。實に手がつけられんのです。今の態度だつてさうぢやありませんか。實に人を馬鹿にした無禮な云ひ方です。』と、稍本氣に憤慨しながらいふ。

京子も引入れられて、

『ほんとにねえ、私も隨分だと思ひましたわ。傍で伺つてゐましても、むかむかいたしましたわ。』と、いふ。

笹山は吸ひかけの煙草をぽいと歩道の溝へ投げ捨てて、

『いや、明日もし出社して來たら、私うんと油をとつてやりますよ。いくら酒に醉つて居つ

たつて、餘り見境がなさすぎるぢやないですか。次第に依つちやもうあんな奴は首にしてしまつたつて、社ではちつとも惜しくはないのですから、向ふの出やうに依つたら、さういふ手段もとつてやらうと思つて居るのです。今迄かうしていろいろ我々の厄介になつて、それでやつと一人前の人間になりかけて居るのに、その恩義も忘れて、あんな毒口をきくとは以つての外です。あんな強がりを云つてゐたつて、今社から離れりや彼奴は途方に暮れるのですからなあ。原稿だつて社の一員として働いて居るからこそ、世間で何んかいはれるのです。ほんとにあんな馬鹿にはつける薬がないですなあ、はゝゝゝゝ。』彼は鷹揚に笑つてはるながら、漸次と腹立たしさが込み上げてくるのが、端からも分つた。

京子も笹山の云ふ方が尤もだと思つた。あんな厭らしい男は、放逐されようが、何うしようが、皆身から出た錆なのだ、仕方がないと思はずにはゐられなかつた。

二人はそんなことを話しながら歩いてゐるうちに、いつの間にかお茶の水の方へ曲る角のところまで來てしまつた。そこいらへ來ると店明りも稍寂しくなつて、人の往來も疎らにな

つたが、その時、向ふ角のところから、突如一臺の俥が明るい月光のなかからついと駛り出て來た。俥上には一人の年輩の男がパナマの帽子を被つて、紗の紋付を着て乘つてゐたが、どうしたのか屹と眼を据ゑて笹山と肩を並べて歩いてゐる京子の方を少時の間見まもつていつた。京子はうつかりしてゐたので少しも氣がつかなかつたが、それは彼女の師匠の田原翠嶺で、俥が遠く行過ぎてしまふまで彼は後を振顧つて、二人の樣子を見送つてゐた。

二人は涼しい夜風の吹き通ふお茶の水橋のうへまで來て、そこで少時の間話したあとで、やつと袂を分つたのであつた。笹山はそこの橋下の停車場から省線の電車で四谷まで行くといふので、京子は橋の欄干に倚つて、彼がプラットフォームへ降りてゆくのをぼんやり見送つてゐた。笹山に別れてしまつたあとの彼女の心持ちは妙に寂しかつた。

十九

その翌々日の午後、京子が又下書に沒頭してゐると、そこへふつと小谷が訪ねて來た。彼は今日は古風なフロックなぞを着て妙に改まつた態度で階上へ上つて來たが、京子が夢中になつて木炭を運ばせてゐるのを見ると、彼はひどく恐縮して入口に手を支へながら、

『こりやどうもお仕事の最中にとんだお邪魔をいたしましたな。どうぞもうお構ひなく、今日は私、一寸その後の樣子を御報告に伺つただけですから、すぐにお暇をいたします。それに此れから仲間のもの丶法事に廻らなければなりませんので。……』と、云つて、どうしても室の中へ入らうとしない。

京子は仕方がなしに、そのまゝ自分の方が端近へ出ていつて、彼の話を聞いた。

小谷は一昨夜笹山が云つた通り喜美子が峯村家へ監禁されてゐることを極力主張した。現に出入りの呉服屋が峯村の家の奥廊下でたしかに喜美子を見たといふ證言さへあるので、彼女はどうあつてもそれに相違ないといつた。就ては今後どういふ方法で、彼女を誘ひ出すかが問題で、彼は態々それを相談しに來たのであつた。

京子はもう一圖にその氣になつて、喜美子が峯村の家にゐるものと信じきつてしまつた。彼女は投げ出すやうな調子で、

『あの、實は一昨夜も笹山さんからそのお話を伺つたんですが、もし峯村の家に引取られてゐるものとすれば、一寸手の出しやうがありませんわねえ。茲で變なことをすれば又煩くなりますし、それに私も今こんな仕事にかゝつてゐますので、喜美子の爲めにいざこざするやうではほんとに困つてしまひますわ。そりや妹のことを思ふと可哀さうでなりませんけれど、でももう私達の力には及ばないんですもの。』と、半分は悄れかへつて、半分はもう諦めてゐるやうにいふ。

小谷はバットの吸ひかけを取出して、それへ火をつけながら、

『いや、全く仰有る通りで御坐います。相手が峯村さんぢや全くどうにもなりませんからなあ。もし私どものやうなものが手を廻はして、彼方樣の御機嫌にでも觸るやうなことでも致しますと、それこそ取返しがつきませんからなあ。實は私もその點が心配でなりませんので、かうして今日お伺ひしてみたんで御坐いますが、……』と、いふ。

京子も思案に沈んで、

『ほんとに困つたことが出來ましたわねえ。あの峯村へ連れていつてしまふなんて、久保の方も隨分憎らしいことをしますのねえ。』と、云つて、彼女は又下繪の方へ氣を取られながら、『でもうかうなつちやどうにもならないと思ひますわ。妹はこの前にもあゝやつて家をぬけ出して來たんですから、今度もいよいよとなればどんなことをしてでも又家出をするだらうと思ひますわ。それを頼りにまあ、かうやつて樣子をみてゐるより他に仕樣がありますまいねえ。』と、いふ。

小谷も考へ深い顏になつて、

『まあ、さう考へればさうですが、併し私としてみればなんとかしてお妹さんをお救ひしなければ氣が濟まないのですよ。それには貴女の方で大體の筋をかいて頂いて、それを心にして、私もひと働きしてみたいのです。ですからどうか貴女の方でそのお含みで、私に何かい

ゝ手蔓を與へて下さいませんでせうか。』と、いふ。

京子はいろいろに考へてみたが、差當つてい、手蔓といふやうなものも思ひつかないし、それに又こゝでいざこざしては大事な仕事に差障りがくるので、當分の間もう喜美子の問題はそのまゝにして置かうと思諦めずにはゐられなかつた。で、彼女は靜かな聲になつて、

『ほんとに貴方にはいろいろ御面倒をかけましたけれどもう峯村の家へ行つてゐることが確實になりました以上は、私當分もうさうやつて放棄つて置くより他に仕樣がないと思ひますわ。』と、いつて、いろいろ峯村の家と自分との間に繃綿してゐる事情なども語つたあとで、

『それに、母だつて自分のお腹を痛めたほんたうの娘なんですから、まさか喜美子の生命にかゝはるやうな目にも逢はせまいと思ひます。あの子だつてもう一度は家出をする味も覺えてゐるんですから、いよいよとなればどうにかして家を逃げ出して、私のところへやつて來るだらうと思ひますわ。』

小谷は思ひ惑つてゐるやうに、

『まあ、さう仰有ればさうですなあ。』と、云つたが、やがてしばらくすると、彼ば何か別な考へが胸に湧いて來たやうに、『それではまあ兎に角、私の方ではもう一應峯村さんのお宅の方をよく取調べてみまして、もし何かいい手蔓でも御坐いますやうなら早速又御相談に上ることにしませう。それでは今日は先を急ぎますから、此れで失禮をいたします。これから駒込の寺まで參らなければなりませんので、……』と、愛想笑ひをして、額から流れ出る汗を拭きふき歸つていつてしまつた。

京子はたつた一人になると、また直ぐさま下繪に取懸つた。喜美子のことを先から先と考へてゆくと、どうしてもうかうかしてゐられないやうな氣はしたが、それも畫の方へ熱中してゆく心持には到底敵はなかつた。彼女は少時すると、もう何も彼も忘れて、唯一心に木炭を運ばせた。

京子はその日も夜に入るまで仕事をしつづけてしまつた。

京子は電燈がついて、そこいらが急に暮れかゝつてくると、何かしら妙に賴りないやうな

心持になつて來た。階下では池島が好きな牛肉でも煮てゐるとみえて、食慾をそゝるやうな匂ひが階段を傳つて匂つてくる。何處かに家庭の温かさを思はせるやうなその匂ひを嗅ぐと、京子は何かしら心寂しくて耐らなくなつてくるのであつた。たつた一人だといふ孤獨の感が、さうした藝術的な感興に疲れたあとではいつも彼女の胸を惱ますのであつた。

京子はかうした晩には田原先生にでも逢つて、下繪に對する自分の計劃を語り、いろいろ批評をして貰つたり又勵まして貰つたりするのが何よりだと思つて、そのまま茶漬をかッ込んで、彼女はぶらりと家を出た。

先生の家へ來てみると、その晩は生憎先生は所用で他行して留守であつた。で、仕方がなしに京子は奥さんと少時の間世間話をしてそのまゝ又しよんぼり家へ歸つて來たが、本郷通りへ出ると氣が變つて、そのまゝお茶の水の方までぶらぶら散歩にいつた。

一時間ほど經つて家へ歸つてみると、階下の細君の琴子は慌ただしく女關まで躍け出て來て、

『ねえ、横川さん。今大變な人が貴女を訪ねて來ましたよ。』と、眼を丸くしていふ。

京子は女關へ上りながら、吃驚して、

『まあ、誰れが參りましたの？』と、訊いたが、細君は立つたまゝ、

『あの、まだお若い方で、お名前は黒田とか仰有いましたよ。何んですか知りませんけれど、もうぐづぐづに醉つて被居つて、貴女は被居るかつて、お聞きなさいますの。で、貴女がお留守だつて云ひますと、笹山さんと一緒に出たんぢやないかつて、そりやくどくお訊きになるんですの。さうして、こゝの板敷きのところへ坐つておしまひなすつたきり、つひ今し方まで、何かぶつぶつ管を巻いて被居つて、ほんとに私達困りましたわ。』

そこへ池島も出て來て、

『やあ、横川さん。お歸んなさい。ほんとに困つた人が來ましてなあ。私は餘り失敬なことをいふんで腹が立つてならなかつたから、餘程きめつけてやらうかと思つたんですが、貴女とどういふ關係の方か分らんので、控へて居つたのですよ。』と、云つて、稍嘲けるやうに、

『一體ありや何者です？』

京子は黒田といふ名を聞くと、恥かしくなつて、

『そりやどうも御迷惑をかけて相濟みませんでした。いいえありやあの、啓文社にゐる社員の一人で、ほんとに困つてしまひますの。』と、云つて、『あの、もしこれから又參りましたら、どうか御迷惑でも留守だと仰有つてお歸しになつて下さいませんか。私、あんな人に逢ふ用はひとつもないんですから。』と、いふ。

琴子もさう云はれると、合點いて、

『ほんとにあんな人とおつき合ひになつちや可けませんわ。今も池島とそのお話をしてゐたんですが、あんなにお酒を飲む方に碌な方はありませんよ。あんな方と往來なすつて被居りや末はきつとよくないことが起りますわ。』と、心配さうに云つて、『それぢやもうこれから訪ねていらしつても、いつもお留守だつてお斷りをして宜しいんですわねえ。』

京子も氣の毒さうに、

『え、どうか、さういふことにお願ひいたします。ほんとに御迷惑をかけて相濟みません』

京子はそんな問答をしてゐるのが何んだか氣詰りで耐らないので、そのまゝ二階の居間へ上つてしまつた。

京子は又下畫にかゝつて、到頭その晩も一時過ぎまで起きてゐた。

二十

それから後は、晩になると、毎晩のやうに黒田が醉つて訪ねて來た。方々開け放してある夏の夜のことゝて、階下で琴子や英一を捕へて管を卷いてゐる黒田の聲がともすると手にとるやうに聞えてくるやうなこともあつたが、それでも階下の人達は京子の爲めよかれと思つて、いつもうまく彼を追返してくれた。

或晩なぞは、歸るまで待つてゐるといつて、玄關の上框のところへ二時間近くも腰をか

けて待つてゐたりした。京子は手水に下りることも出來ないので、二階で死ぬ思ひをした。

京子がやつと大體の下畫をこしらへあげたのは、それから二十日ばかり後のことであつた。まだ考へ直さなければならないところが幾個所もあるので、態と田原先生にも見せずに、更らに考案を凝らしてゐた。

増田家へ賣つた幅は期限が來たので、又笹山の手から先方へ返して貰つた。笹山にもそれからは廻はり合せが悪くて、一度も逢はないので、京子はそれが妙に氣がかりになつてゐた。

そのうちに、榮屋の手で開かれる三越の展覽會はいよいよ準備もとゝのつて、九月の一日から十日間の豫定で華々しく開會されることになつた。京子はその通知狀がくると、目錄の中にちやんとあのお七の繪が入つてゐるので、先づ何とも云へない不安を覺えて、氣がわくわくしてしまつた。何よりも彼女は田原先生の思惑を考へたのである。

丁度開會の當日には朝のうちに笹山から速達便が來て午後の二時に會場へいつてゐるから

是非彼方へ來てくれと書いてあつた。京子は何んだかそんな晴れがましいところへ出てゆくのが氣恥かしかつたが、併し笹山からさう親切に云はれてみると、行かない譯にはいかなかつた。彼女は展覽されるといふ喜びよりも、寧ろ田原先生へ對する氣兼ねの方が更らに心を惱ますのであつた。

午後になると、京子はいつになく美しく化粧をして、銘仙ではあるがこざつぱりした單衣を着て、家を出ていつた。その日は朝からどんよりと曇つてゐて、妙にいらいらするやうな蒸し暑い日であつた。道の二丁も歩くと汗は氣味悪く脊筋へ流れて來て、京子は仕方がなしに小さな扇子をはためかせながら歩いていつた。

本郷の三丁目から電車に乘らうと思つたが、折柄の日曜で非常に電車が混んでゐるので、彼女はそこから外濠へ出て、順天堂の前からやつと乘つた。そして日本銀行前までいつてそこで下りて、又洋傘をさしかけながら室町の方へ歩いていつたが、その時、ふつと後から、

『横川さん。』と、呼ぶものがある。

吃驚して振顧つてみると、後からにこにこ笑ひながら來るのは思ひがけもない笹山であつた。京子はにつこりして、

『まあ、貴方……』と、云つたつきり、呆れたやうな顔をして立止つてしまつた。

笹山も笑つて、

『はゝゝゝゝ。いゝところで逢ひましたなあ。まるで貴女の後を追跡してゐるやうだが、實は私も駿河臺下から貴女の乘つたすぐ後の電車に乘つて居つたのですよ。停留場へつく毎に聲をかけようと思つたが、何んだか氣恥かしくつてね、はゝゝゝ』

京子は笹山と肩を並べて歩きながら、

『まあ、さうで御座いましたか。私ちつとも知りませんで、ほんとに失禮いたしましたわ。』

と、云つて、『あの、その後は心にもなく御無沙汰をして居りまして、ほんとに御免遊ばせよ。』

と、詫びる。

笹山はそれを抑へて、

『いや、御無沙汰は私の方からこそです。實は一寸家の方に取込みがあつたもんですから、社へも缺勤して居つてね』

『まあ、お取込みつて何んで御坐いますの？。』

『いや、實は家の家内と子供が一緒に窒扶斯になつてしまひましてな、それを神田の橋口病院へ入院させたり何かしたものですから、もう家の中はえらい騒ぎで、さういふ私も一時隔離されたも同樣で、こゝ二週間はどまるで外出しなかつたのですよ。』

京子はそれを聞くと、ひどく吃驚して、

『まあ、お二人ともチブスに？どうしたといふんで御坐いませう。それであとの御容態は如何で御坐いますの？』

笹山は一寸悄れてみせながら、

『いや、それが何うも甚だ面白くないので、家内の方も子供の方も同じ經過をとつて居るのです。まあ、こゝ二三日してみなけりや海のものとも山のものとも分りませんが、さすがの

私もいさゝか閉口して居るのですよ。』

京子はその顔をみながら、

『まあ、そんなにお悪いんで御坐いますか、私ちつとも存じませんで、……』

『いや、一寸手紙でも上げようと思つたんですが、そんなことをして貴女に心配をかけるでもないと思つて、そのまゝにして置いたのです。』と、云つて、彼はまづさうに煙草をすひながら、『實はつひ先達家内が國の方で法事があつて歸省したあの時に、病菌をもつて來たらしいのですなあ。田舍のことですから食物なぞも亂暴なものをやりますし、それに縣下でも有名なチブスの流行地なのですからなあ。……』

さう云つてゐるうちに、二人は三越の正面の入口へ來てしまつた。京子はあんまり思ひ懸けないことを聞かされたので、例のお七の繪のことを話す機もなにもなくなつて、そのまゝ群衆に押されながら店の中へ入つてしまつた。

店では丁度季節がはりのさまざまな賣出しで、押しかへすやうな混雜を呈してゐた。美しい飾りや、さらきらした硝子棚や、方々の天井から下つてゐる旗なぞをみると、さすがに京子も女らしい唆られるやうな氣分を感じて、足は自然と輕くなつてゆく。

笹山は客と客との間を分けて舊館の方の展覽會場へ入つていつた。京子は美しく着飾つた女達の姿に眼を惹かれたり、又華やかな衣類の染色に眼を奪はれたりしながら彼よりも少し遲れて、やつと會場へ入つていつた。

展覽會場も新聞紙上なぞで呼びものになつてゐただけに、非常な賑はひであつた。

笹山は入口のところで待つてゐて、京子の顔がみえると、

『ねえ、横川さん、兎に角一寸事務所へいつてみませう。』と、いつて、すぐ傍の幕で劃られた事務所へ入つていつた。

と、みるとそこには榮屋の主人をはじめ、雜誌や新聞の記者や、相當に名のある畫壇の雄將達が、五六人卓子を圍んで賑やかに談笑してゐた。

笹山はそれをみると、いつもの鷹揚な態度になつて、

『やあ、こりや皆さんお揃ひですな。』と、いひながら卓子の方へ近寄つていつたが、榮屋の主人はいきなり立つてきて、ペコペコ頭を下げながら、いろいろ會を開くに就いて厄介になつた禮をいふ。

笹山はそれを輕くうけて、

『いや、どうも屈かんことで。實は家に病人さへなけりや私が自身で出向いて、もう少し御盡力をする筈でしたが、實に殘念でした。』

主人は又辭儀をして、

『いゝえ、もうどう致しまして。お庇護樣で非常な盛會で、もう朝から今迄に二十二點も賣約があるやうな景氣でして、ほんとに私も嬉んで居りますのです。』

『ふむ、さうですか。そりや何よりだ。まあその分なら結構です。』と、云つて、笹山は隅の方に顏を伏せて立つてゐる京子の方を向きながら、『横川さん。あなたまだ皆さんとお近づきがないでせうから、私から御紹介しませう。』と、いふ。

京子は恥かしくて頰が紅くなるのを覺えたが、それでも二歩ばかり卓子の方へ近寄つて、皆に叮嚀な辭儀をした。

笹山は皆の方を向いて、

『あの、皆さん、この方が「お七」の繪の閨秀畫家横川京子さんです。どうか將來ともよろしく。』と、いかにも場馴れた調子で紹介する。

京子が紹介された相手のなかで、彼女の頭に殘つた名は、當時日の出の勢ひである新進の白峯秀邦とそれから仙波湖山であつた。二人とも美術學校派の鏘々たるもので、まだ年は三十になるかならない位な若い畫家であつたが、この二人の描くものは、いつも京子の敬服の的になつてゐるのであつた。京子は計らずもさうした連中に出會したので、もう嬉れしくて耐らなかつた。

白面の青年である白峯秀邦は傍にあつた椅子を引寄せて、

『さ、此方へおかけなさい。』と、云つてくれる。その一言にさへ彼女は不思議な嬉れしさを

覺えるのであつた。

京子はすゝめられるがまゝにそつとその椅子へ座を占めた。

やがてその卓子では「お七」の畫の批評が初まつた。いづれも去年の帝展の入選畫に比較して出色の出來だといつて、讃めそやしてくれた。殊に白峯秀邦は、京子の方を向いて、

『いや、こんなことを申しちや失禮かもしれませんが全く結構な出來榮だと思ひます。あの繪にはどうしたつて女の方でなけりや描けないところがありますなあ。實に感じのいゝ畫だ。』と、世辭ではないらしい眞面目な口調で云つてくれる。

京子はひどく面目を施して、顏を伏せたまゝ光榮に醉つてゐた。

笹山は卓子のうへへ兩肱をついて、頻りに京子の畫風の宣傳をやつた。彼の一言一句には實に巧みな宣傳的な意味があつて、人に反感は與へずに極力彼女を推奬する手段は極めて妙を得てゐた。

皆は一から十まで共鳴した。白峯はなかでも一番熱心で、藝術家らしい細かい感情をその

眼に現はしながら、『全く笹山さんの仰有るとほりです。そりやあの畫には所謂田原派の缺點もあるが、併しそれは横川さんの獨創力で今に立派に拭ひ消されてしまふと思ひます。横川さんだつて今にきつとあゝいふ保守的な臭味が厭になる時代が來ると思ふ。もう何を云つたつて新らしいものゝ時代ですからなあ。』と、いふ。

その論には仙波湖山も贊成で、彼は眼鏡のなかから四邊を見廻はしながら、

『これからの畫はもう手法の問題ぢやない。心の問題です。私はたしかに横川さんのものにはその萠芽が現はれてゐると思ふ。あのお七はたしかに現代人の苦悶をもつて、畫面のうへに立つてゐると思ひます。その點が最も嘱目すべきものだと思ひますよ。』などといふ。

笹山は今度の帝展にもう一つお七の大作を出すことを話して、皆の期待を強ふるやうにした。皆はそれを心から歡迎してゐるらしくみえた。

京子は嬉れしさに唯ぼうつとして、一言も發しずに皆の云ふことを聞いてゐた。

白峯は皆が論議を闘してゐる間に、そつと隙をみて京子の方を向きながら、

『あなたは今何方にお住ひです。やつぱり田原さんのところへ寄宿でもしてゐられるのですか？』と、小聲で訊く。

京子は顔を紅くして、

『い、え、あの、私、先生のすぐ傍に下宿をいたして居りますの。』と、答へたが、白峯はその時袂から名刺を取り出して、

『では、やつぱり本郷ですな。私も彌生町に居りますから、どうかお序でもあつたら、お遊びに被來つて下さい。』と、いふ。

京子も自分の下宿してゐる池島の家を敎へて、どうかこれからよろしくお願ひいたしますと丁寧に云つた。

笹山は注意深い眼でその樣をちらりと偸みたが、しばらくすると、此方を向いて、

『横川さん、それぢや展覽會の樣子を一寸見て來ませうか。』と、いつて、卓子を立ち上る。

京子もつゝましやかに椅子を離れて、皆に一禮したあとで、笹山のあとからついていつた。

場内へ入ると、群衆は彼方此方に塊つて、陳列畫をみてゐた。明るい光のなかには若い女達の着物の色が華やかに輝いて、數多い畫がまるで花畑でもみるやうに先から先と續いてゐた。

笹山はそれを一々みて歩きながら、

『ねえ、横川さん、今のやうにして皆を手なづけて置けば、もう大丈夫ですよ。今度の「お七」は大當り間違なしといふところですな。きつと大した評判になりますよ。さうなりや帝展の前景氣にもなつて、非常にいゝですなあ。』と、小聲で耳打ちをする。

京子は唯一途に嬉れしくて、

『ほんとにいろいろ有難う御坐いました。』と、云つた。

第二室の初端のところには京子の「お七」がかけてあつた。そこは大家と稱すべき人のものばかり集めた室の一部なので、京子としては非常な光榮といはなければならなかつた。殊に

屏風や、額縁をはめた比較的滋いものばかりのなかに、唯一幅立派な表裝をした華やかな美人畫がかゝつてゐるので、ひどく引立つてみえ、その前は身動きもならぬほど觀客が混みあつてゐた。

京子はもうかッとしてしまつた。人々がいろいろな讃辭やら、批評やらを投げてゆくのが空耳に聞えて、彼女は心臓が喉のところまでも込み上げてくるやうな心持ちがした。

笹山はさも得意さうな顏で頻りに、畫の陳列してある位置のいゝことや、増田家所藏といふ銘の打つてあるのがいかにも堂々としてゐることなどをいつてゐたが、京子はやがてふつと後を振顧つた拍子に、すぐ後に或異樣な人影をみた。それはパナマの帽子をかぶつて紋付袴といふいでたちをした風采のあがらぬ老紳士で、その紳士の眼はまるで釘づけにされたやうに京子の方をみてゐるのであつた。京子はそれをみると、悸乎として、その瞬間に背中から冷汗の滲むやうな心持ちがした。

その老紳士は彼女の先生である田原翠嶺であつた。

田原は京子と眸が逢ふと、腹立たしさうな厳かな顏をしながらそのまゝついとそこを離れて、群衆を分けて室の彼方へつかつかと歩み去つてしまつた。

京子がやつと氣を取り直して方々を捜して歩いた時分にはもう田原の姿は場内にはみえなかつた。

二十一

その翌日の夕方のことであつた。田原先生のところからは突然女中が使にやつて來て、もし手が空いてゐるならこれからすぐに京子に來るやうにといふ。女中はさう云ひ置いてすぐにすたすた歸つていつてしまつた。

京子はもう覺悟をしてゐた。昨日三越の展覽會場で、あゝして端なくも先生に出會してしまつた以上は、もう何う辯解したとて到底駄目な話である。いつぞやもあれほど固く言葉

をつがはれたのであるから、今度こそきつと先生から激しい小言を食はされるに相違ないと思つて、彼女はもう今朝から實はびくびくしてゐたのであつた。その爲めに仕事の方も手につかず、彼女は畫筆をもつたまゝ、茫然として時を過してゐたのであつた。

いよいよ先生のところから呼び出しが來てみると、京子は覺悟はしてゐながらも胸が痛いほど躍つてならなかつた。この前の時にもあれほど嚴格に云はれたのだし、それに昨日の先生の顔色でみると、今度ばかりはとても生中なことでは濟みさうもないやうな氣がする。ひよつとして破門といふことにでもなつたら、どうしようと思ふと、京子は何んとなく先生の家へいくのが恐くて耐らなかつた。

併し一旦伺ふと返事をしてしまつたからには、愚圖愚圖してゐる譯にもいかないので、彼女はやがて身繕ひをして、とぼとぼと家を出ていつた。

先生の家の門をくぐると、京子の胸は又ひとしほ激しく躍つて來た。もう何を云はれても唯自分が惡いのであるから、出來るだけ素直に謝つてしまはうと心に思ひ極めながら、彼女

はやがて思ひ切つて、いつもの通り臺所口から上つていつた。と、そこの隣りの茶の間のところには夫人がゐて、京子の姿をみると、唯ならない顔をしがならいきなり立つて來て、彼女を小蔭へ呼び込みながら、

『あの、横川さん。實は今晩は先生が大層御機嫌が惡くて、何んですか非常に貴女に對して腹を立てゝ被居るやうですから、どうかそのつもりで居て下さいな。いろいろ譯も伺ひましたけれど、さう云ふことは私達が一切立入る可きことではありませんから、私は何にも云ひません。唯貴女は先生のいふことをよく聞いて、もし御自分が惡いと思つたら、先生に謝りなさい。決して逆つてはなりませんよ。』と、親切に云つてくれる。

京子はその言葉を聞くと、胸は益々冷たくなつてくる。彼女は唯默つて合點きながらそのまゝ奥の先生の畫室へ入つていつた。

畫室にはいつものやうに明るい電燈が點つて、開け拂つた障子のところからは夜風が絶えず涼しげな蟲の聲々を運んで來た。先生は紫檀の机に倚つて、何か雜誌のやうなものを讀ん

でゐたが、京子が入つて來る足音を聞きつけると、じろりと此方をみた。その眼は陰欝に輝いて、蒼ざめた顔には胃病患者のやうな不機嫌な色が浮んでゐた。

京子はその顔を一眼みるともう肩がすくんで、それなり敷居際へ坐つて、わくわくしながら丁寧に挨拶をした。

先生はひと言も口をきかずにその姿をじろりじろりと見据ゑてゐたが、やがて憤怒に充ちた聲で、

『おい、横川。あんたはあれほど云つて置いたのに、どうして昨日のやうなあんな不始末なことをして呉れたのだ。あんたはこの私にうまうまと一杯食はせたのだな。私を偽つたのだな。』と、早口に云つて、ぶるぶる聲を慄はしながら、『もう私はあんたの辯解を聞く必要はない。此前の時にあれほど云つて置いたのだから、今度こそもう少しも假借して居る餘地はない。どうか今日限りあんたの名を私の門下生のうちから削つて貰はう。師を師とも思はんやうな、そんな人間は私の門下に置くことは出來ん。人を馬鹿にするのも大概にして貰はうぢ

やないか。』と、一氣に云つて退ける。

京子はもうすつかり悄れ返つて、そのまゝ涙ぐみながら兩手を支へて、

『先生、ほんとに何とも申譯も御坐いません。實は私、今日早速此方までお詫びに出ようと思つて居りましたんで御坐いますけれど、どういたしても臆病な氣ばかりいたしまして、……』と、云つて、首を垂れながら、『あの、あの繪のことはもう何事も私が悪う御坐いましたので御坐います。先生があれほど仰有いましたのに、私、つひうかうかいたして居りまして、あんなことになつてしまひましたんで御坐います。私陳列になります迄少しも存じませんで……』と、云ひかけるのを、田原は引奪くるやうに、

『默んなさい。あんたはこのうへまだ私を誑らうとするのか。何處まで憎い人だらう。私はあんたにはそれほど馬鹿な人間に見られて居るのか。』と、叫んで、燃えるやうな眼光で京子の顔を見据ゑながら、『知らぬも存ぜぬもあるもんぢやない。あんたは今になつてそんな白々しいことを云つてもこの私を胡魔化す譯にはいかんよ。あれほどあの笹山と交通をして居

りながらよくそんなことが云へたもんだ。私はもうあんたに對しては少しも信用を置くことが出來んのだ。どうかこのうへは何んにも云はずに私の命令どほりにして下さい。私はこのうへあんたの馬鹿々々しい辯解なぞを聞くのは實に不愉快でならんからなあ。』と、いふ。

京子は更に低く首を垂れて、

『いゝえ、あの、私ももうそんな辯解なぞは申上げません。何事も私が惡いのを十分知つて居りますので、唯私は先生にお詫びを申上げ度いので御坐います。それには一應私の方の事情も申上げて置きませんければ、私も立つ瀬が御坐いませんから。』と、云つて、彼女は無駄とは知りつゝも、誠實な心持ちであのお七の繪の成行きを話しだした。

田原は苦蟲を噛みつぶしたやうな顔をしてじいつと此方をみてゐたが、やがて突込むやうに、

『そんな、何も知らんものが、どうしてあんなに夜遲く笹山と一緒に外を出歩いたり、さも自慢さうに二人で展覽會場を歩き廻つたりして居るのだ。私はあんたがあの繪を笹山と相

談のうへで增田家へ高い價で賣りつけたことも聞いて知つて居る。それから此頃、あんたがあの笹山と妙な噂を立てられて居ることもすつかり知つて居るのだ。ほんとにあんたはどうしてさう墮落してしまつたのだ。あんな笹山のやうな俗人に誘惑されて、墮落していくなぞとは實に何んといふ淺猿しいことだらう。もしあんたのお父さんが生きてゐられたら、何んなに口惜しがられるだらう。亡られた蓼坡さんは實に氣品の高い立派な人格の人であつた。そのお父さんの子にも似合はず、いかに衣食の爲めとは云ひながら自分の節操まで賣つて、目前の安逸を貪るとは實に言語道斷な話だ。私はもうあんたのその無恥な顔をみるのさへ腹が立つて。』と、唾でも吐くやうにいふ。

京子はそれを云はれると、さすがに胸が納まらなくて、

『先生、それはあんまりなお言葉で御坐います。私、いかに何んでもそんな笹山さんなんぞに……』

『いや、もう何も云ふ必要はない。私はすつかり證據を握つて居るのだ。今更になつて何か

云ふと却つて襤褸を出すから、もう何も云はん方があんたの爲めだ。さあ、もうどうか歸つて貰はう。そして今日以後は一切もう私の家への出入は差止めるから、師弟の緣も今日限りと思つて貰はう。もう何も云ふこともなければ、聞くこともない。それぢやまあ、精々勝手氣儘な眞似をして、自分の藝術を荒ませ、身を持崩してしまふのもよからう。私もあんたの師でもなし、あんたも亦この翠嶺の門下でもないとなれば、何もお互に責任を持ち合ふこともないのだから、どうなりと勝手にするがいゝ。さ、もう用はないから、歸つて貰はう。』と、一途にいふ。

京子はせめて笹山のことだけでも、何か云ひ譯がし度かつた。併し田原がかう云ひ出した以上は、もう何を云つたとて耳に入らないのは知れてゐるので、口惜しさは胸一杯に溢れてゐながら、彼女はもう諦めて歸るより他はなかつた。いづれそのうちには又少しは機嫌の直ることもあらうし、その時にもう一度逢つて、理をつめて詫びをすれば又何とかならないものでもあるまいと思つて、彼女は溢れ出る涙を押し拭ひながら、

『先生、それではもう何んにも申上げません。いづれ時が經ちましたら、何事も解つて頂けると存じますから、今日は仰せに從ひまして、これでお別れをいたします。』と、涙聲で云つてやがてすごすごとそこを立つて、又先刻の茶の間の方へ歸つていつた。

田原はそれと一緒にくるりと後を向いて、また雜誌の頁に眼をさらしだした。

茶の間へ來ると、夫人はさも心配さうな顏でそこの緣先へ立つてゐて、京子が涙を拭きながら出て來るのをみると、ついと彼女の方へ寄つて來て、

『横川さん。どうしました。先生に何かお叱りを受けたでせう？』と、訊く。

京子は合點いて、

『あの、私、何か先生が誤解遊ばしてゐるとみえまして、破門をすると仰有るので御坐います。私、先生のお言葉に背きましたのは重々惡いと存じますけれど、それにはいろいろ深い事情も御坐いますので、‥‥』

『いゝえ、それは私だつて考へないんぢやないんです。ですけれど、先生はあゝいふ性分で

すから、今一途になつて被居るんです。それに又貴女も決して今立派な口のきけることばかりもして被居らないやうですから、まあ、こゝ少時の間先生の仰有るやうにして貴女ひとりで勉強をなさい。そのうちには先生のお心の解ける時も來ませうし、さうしたら、私からもまたよくお取做しをしますから。』と、親切に云つてくれる。

京子はさう云はれると、耐らなくなつて、

『奥様、私、今になつてもし先生に破門をされてしまひましてはもうどうすることも出來なくなります。どうか御立腹はどんなことをしてもお詫びを申し上げますから奥様からもよろしくおとりなしが願ひ度いんで御坐います。これほど御恩になつて居りますのに、私、これなりになつてしまひましては亡りました父に對しても濟みませんで御坐いますから・・・・』と、涙ながらにいふ。

夫人も同情してゐるやうに、

『ほんとにさうですとも。折角これまでに手も上つて來たのに、今先生に離れてしまつてはあなたもさぞ惜しいでせう。ですから、よいくそこを考へて、貴女もこれからは出來るだけ身を慎しまなけりや可けませんよ。それだけは私からもくれぐれも御忠告をして置きます。』

京子は夫人にも疑はれてゐると知つて、何んとも云へない悲しい心持ちになりながら、

『あの、唯今も先生からいろいろ私の身持のことでお叱りを受けましたけれど、そればつかりは私、少しも覺えのないことで御坐いますから、どうかせめて奥様だけでも信じて頂き度う御坐いますわ。私、いかに貧乏はいたして居りましても、いかに焦つては居りましても、自分の身持ちだけは決して人に後指をさゝれないやうに慎しんで居りますつもりで御坐いますわ。そりや人様は何んと仰有いますか知れませんけれど、私はもう神様の前へ出ましても、何處へ出ましても、私、決して恥かしいとは思ひません。・・・・』

さう云ひかけてゐるところへ、畫室の方からは田原が焦々するやうに手を拍つ音が聞えてきた。

それをきくと夫人はそはそはして、

『まあ、何は兎もあれ、今夜はもうこのまゝお歸りなさい。さうして貴女もゆつくり前後のことをお考へになつて、たとへ嘘にもそんな忌はしい疑ひを受けるやうなことは向後一切なさらないやうになすつた方が、私はいゝと思ひます。女は節操を疑はれるのが一番可けないことなんですからねえ。』と、云つて、夫人はそのまゝ京子の傍を離れながら、『あの、それでは奥で呼んで居りますから、私もこれで失禮します。どうか今私が申したことは呉れぐれもお守りなすつて。……』さう云つて、夫人はそれなり長廊下を傳つて奥の方へ姿を隠してしまつた。

京子も殘惜しいやうな氣はしたが、何事ももう後日に殘して、到頭そのまゝしよんぼり田原の家を出てしまつた。

戸外へ出てみると、空は限りなく晴れて、水のやうな夜風が頻りに動いてゐた。

二十二

京子は考へれば考へるほど悲しくて耐らないので、それから少時の間頭を冷まさうと思つて、そこいらを足に任せて散歩して歩いた。そして半時ばかり經つてから漸う池島の家の門口まで歸つてくると、その時、出會頭に、

『お、横川さん！』と、いふ聲に打突かつた。

京子はぼんやりしてゐたので、ひどく吃驚して顔をあげてみると、そこに立つてゐるのは浴衣がけの身輕な風裝をした黒田であつた。

黒田はまた醉つてゐるとみえて、にたりにたりと氣味惡く笑ひ出しながら、

『や、横川さん。到頭捕へましたぜ。もう此頃はいつも居留守ばかりでどうも實に恐縮ですなあ。はゝゝゝゝ。今日はいゝ鹽梅にお眼にかゝれて何よりですよ。かう顔を突き合は

せちやいかに貴女でも居ないとは云へますまい。はゝゝゝゝ。』と、態と聲高に云ふ。

京子は困つた奴に出會したと思つて、挨拶もしずに眉を顰めてゐた。黑田はそんなことには構はずに、

『横川さん。僕は一寸お話し度いことがあつて來たんですが、どうか一時間ばかり御面會をお許しになつて頂く譯には參りませんでせうか。家へ上げて下さればよし、それとも又此間の長樂軒へでもお伴いたしませうか。はゝゝゝゝ。』

京子はその笑聲が蟲唾の走るほど厭で、やがていつになくつんつんしながら、

『あの、私今夜は非常に取込んで居りますから、どうか又被來つて下さいまし。』と、いふ。

黑田はその顏を覗き込むやうにして、

『いや、その又は眞平ですよ。今夜を外したら、それこそいつ又お眼にかゝれるか分りやしませんや。そんな意地の悪いことを仰有らずに、どうか一時間だけ逢つて下さい。僕は決して厭なことを云ひに來たんぢやないんです。實は貴女にとつて非常に不利益になる事件を聞

き込んだので、それを貴女にお報らせに來たんです。』と、眞顏でいふ。

京子は、又笹山のことでもいふのだらうと思つて、ひどく煩さうに

『あなたの仰有ることなら、大概分つてゐますわ。私、今夜はほんとにそんな御冗談なんか伺つてゐられませんから、どうかこの次になつて下さいまし。それにいつも夜になつてそんなに醉つてなんぞ被來られちや、私ほんとに迷惑をいたしますから、これからはもう一切お斷りをいたします。もしほんとに御用があるんなら、お酒なんぞ召飲らずに、晝間のうちに被來つて下さいまし。』と、きつぱりいふ。

黑田は頭をかいて、

『いや、どうも手嚴しいですなあ、はゝゝゝゝ。まことにどうも相濟みません。』と、揶揄ふやうにぺこぺこ頭を下げて、『酒を飲んでくるのは惡いかも知れませんが、併し貴女の警戒振りも隨分手嚴しいですからなあ。はゝゝゝゝ。あれぢやいかに僕だつて意地になつてしまふ。』と、云つて、氣を變へながら、『今夜は全く用があつてやつて來たんですから、どうかそ

んなことを云はずに僕の話だけ聞いて下さい。さうしないと貴女はみすみすとんだ目に逢はんけりやならんのですから。』といふ。

京子はいつまでこんなものにかゝづらつてゐる氣もしないので、焦々しながら、

『私、何事にもせよ、今夜は伺つてゐられませんから、失禮いたします。』と、云ひ捨てゝ、そのまゝ委細構はずに池島の家の格子戸を開けてなかへ入つていつてしまふ。

黑田はそれを煩くつけて來て、自分も格子のなかへ入つて、京子のあとからづかづか遠慮會釋もなく、家のなかへ上つて來ながら、

『いや、もうかうして捕へた以上はどうしたつて、逃がしやしませんよ。はゝゝゝ。何も貴女の爲めを思つてお話しをしようといふのに、さう劍もほろゝに扱ばなくつてもいゝでせう。』と、云つて、そのまゝ京子のあとから階段を上つてゆく。

折柄その聲をきゝつけて、茶の間の方から飛び出して來た階下の細君の琴子は呆れたやうな顔をして、默つてみてゐた。

京子は到頭黑田が二階へ上つて來てしまつたので、泣きさうな顔になりながら、

『ほんとに貴方も隨分な方ですのねえ。これほどお斷り申してゐるのに、どうしてそんなことをなさるんです。』と、ほんとに腹を立てゝゐるやうに云ふ。

黑田は窓際へいつて、平氣な顔でべたりと坐りながら、

『はゝゝゝ。怒つちや可けませんよ。それよりもまあ兎に角僕の方もお察しを願ひますよ。今迄に少くとも十五六度は足を運んでゐませうが、いつも居留守さ。大概しつこくもならうぢやありませんか。はゝゝゝゝ。』

京子は眼を光らして、

『そりや貴方、貴方の御勝手ぢやありませんか。此方ではお眼にかゝる必要がないといふのに、貴方の方で煩く被來るから惡いんですわ。』

『はゝゝゝ。恐入りました。仰せの通り僕の方が惡うございますとも。餘計な親切かも知れませんがかうして貴女の利益の爲めに奔走してあげてゐるのに、ゲジゲジ扱ひは全く埋まり

ませんなあ。まあい、、兎に角ようございますよ。今に僕の腹のなかが分るでせう。貴女の爲めならいかなる侮辱も忍ばなけりやなりますまい。』と、焦悶かしさうに云つて、さて浴衣の前を繕ひながら、『早く話の主題に入らないと、又突き出されでもすると可けませんから、僕はお話の方から先にしてしまひませう。實は僕も今日いよいよ啓文社の方からお拂ひ箱になつてしまつたんです。先日來から笹山さんにいろんな失敬なことを云つたといふので、今日社へ出ると、あの人から頭ごなしに怒鳴りつけられたんです。僕も腹が立ちましたから、すぐその場で此方から辭職を申込んで、まあ到頭お互に厭なことを云ひ合つて、物別れになつてしまつたんですよ。で、僕は此間から或新聞社から是非來いといはれてゐるので、早速そつちへ身を賣ることに極めて、即日體の所屬がへといふことになつたんです。新聞社の方は啓文社よりもぐつと待遇もよし、第一社會部長や編輯長なんかが僕を尊敬してゐて呉れるだけでも僕には愉快ですからなあ。笹山さんの方ぢや僕が啓文社を出たら路頭に迷ふだらうと思つて、頻りに恩を被せてゐましたが、僕ももう今ぢやそんなブーアな人間ぢやありませんよ。僕があの新聞社へ入つたと聞いたら笹山さんは手もなく鼻を明かされることになるんですから、どんな顏をするかと思つて、實に痛快で耐らんのです。』と、いふ。

京子はこの黑田が到頭首になつたのかと思ふと、い、氣味だと思つた。いくら强いことを云つてゐても、黑田は内心困つてゐるのだらうと思つて、彼女は心の中では態をみろといふやうな氣でゐたのであつた。

黑田は頻りに今度の勤め口の自慢をして、社會面の記事はもう自分の自由になるといふやうなことをひけらかしてゐたが、やがてひと膝進み出て、

『ねえ、横川さん。そこで僕は實は笹山さんの云ひ分が頗る癪に障つたので、これから大いにあの人に復讐を試みようと思ふんです。それには何よりも新聞を利用するのが一番ですから、茲二三日したらあの笹山さんの色魔振りを大々的に素破拔いてやらうと思ふんです。そこで問題は貴女のうへに落ちて來ますが、貴女も今度の展覽會の繪が非常に評判がいゝやうですから、社會部長は是非貴女をつかまへて來て、その記事の對照にしてくれと煩くいふの

です。僕もそれは至極いゝとは思ふのですが半面から考へると又一寸思ひ切れないところもあるのでねえ。實はそれで一應貴女に御相談に上つたのですよ。まあ、考へても御覽なさい。「閨秀畫家の戀」つてなことを二號の大標題で出して御覽なさい。今は時季ですからワッと受けまさあね。はゝゝゝゝゝ。』と。彼は嵩にかかつたやうに笑ふ。

京子はそれを聞くと、我れにもなく顏色を變へてしまつた。笹山の情事の對照として新聞に自分の名が出る。固より身に覺えもないことなので、何を書かれても恐くはないが、併しそんな惡辣な性質の新聞であつてみればきつとあることないことをいゝ加減に刺戟的に、面白可笑しく書き連ねて、それで卑俗な讀者の興味を唆るに違ひない。さうなれば自分の名に傷がつくのは知れてゐる。殊には今しがたも田原先生からあゝ云はれて歸つて來たばかりの自分である。もしそんなものが先生の眼にでも觸れたとしたら、その結果はどうであらう。それよりも廣い世人の眼の前にそんな情ない記事が現はれたら、これからの自分の前途はどうなるであらう。それを思ふと京子は冷汗が滲むやうな心持にならずにはゐられなかつた。

黑田はさうした京子の心を見拔いたやうに、今度は又威嚇するやうな調子で、

『ねえ、横川さん。かういふ記事のことですから無論我々は責任を持ちやしません。それに材料といつても僕が啓文社で見聞きしたくらゐのものしきやないのですが、それでも僕は最近にかうして始終貴女の行動を監視してゐるのですから、書きやうはいくらでもあるのです。僕は自體が作者ですからなあ。他人の戀愛事件を面白く讀ませるぐらゐなことは朝飯前ですよ。そのかはり御當人に迷惑のかゝるやうなことも平氣でやりますから、それは前以て御覺悟を願ひます。はゝゝゝゝゝゝ。』

京子は默つて顏を伏せて、それには返事もしなかつた。

黑田は猶も言葉をつづけて、

『それに第一あの笹山といふ男は全く社會的にいつても是非一度散々こきおろして葬つてしまふ必要があるのです。今迄にも何遍も貴女にお話したとほり彼奴は恐るべき色魔ですからなあ。あんな何喰はぬ顏をしてゐますがあれで今迄に何人女を殺したか知れんのですよ。實

際刀なり拳銃なりで殺せば罰を受けなけりやなりませんが、女を精神的に殺した奴は社會的に制裁を加へるより他に仕様がないのですからなあ。僕が知つてゐる範圍でもあの笹山さんは看護婦や、女教員や、それから未亡人といつたやうな種類の女を、少くとも五六人は犠牲に供してゐますからなあ。貴女もそんなことをしてゐりや必ず第何十人目かの犠牲者に數へられて、彼奴の血祭りに上げられるですよ。眼を醒ますのは全く今ですぜ。』と、いふ。

それを聞くと、京子は又かつと腹立たしい心持ちになつて、

『黒田さん、もう澤山です。あなたは笹山さんに恨みがあるから、そんなことを仰有るんです。私はあなたが何んと仰有つてもちつとも信用しません。自分で確實だと信じてゐる道は私は大手を振つて歩いてゐるんですから、どうか端からつまらないことを仰有るのはよして下さいまし。私はそんな淺墓な犠牲になるやうな、そんな女ぢやありませんから、どうか御安心なすつて下さい。』と、いふ。

黒田は反感の出た眼でじろり見返して、

『はゝゝゝ。これほどいつても貴女は眼が覺めないんですかねえ。それならもう已むを得ない。それぢや今の新聞の記事のことも貴女は格別何も關係はないと仰有るでせう。さうなりや僕の方はあやまるものだ。貴女の方で突放して貰へば僕の方では、どうでもかけるのです。これでなまじ人情をもたれると、やつぱりいくら商賣でも滅多なことは書けないもんで、筆がいぢけてちつとも面白くなくなつてしまひますからなあ。』と、憎々しくいふ。

京子は意地は張つてゐながらも、内心ではその問題でひどく脅かされてゐるのであつた。と云つて、今更こんな黒田のやうな男に頭を下げるのも業腹なので、京子は態と平氣な顏を裝ひながら、默つて彼の顏をきつと見返してゐた。

黒田はそれからも散々笹山のことを惡様に罵つて、完膚なきまでに彼をこきおろしたが、それでも京子が取合はないので、自分でも張合ひがぬけたか、やがて吐き出すやうな調子で、

『いや、それならそれでいゝです。僕は實は貴女が何ういふお考へでゐられるかと思つて、一寸氣を引いてみたのだが、貴女がさういふ風に輕くみてゐられるのなら、僕の方ぢや勿怪

の幸ひです。先づ貴女とあの笹山さんの關係を面白く脚色して書いて、初陣の功績にしますかなあ。はゝゝゝ。』と、力めて笑つて、『だが横川さん。後で腹を立てたつて駄目ですよ。僕の書いた記事がどういふ影響を生んでも、僕は一切責任を持ちませんよ。それだけは今からきつぱりお斷りをして置きます。』と、いふ。

京子は何うにも出來なくなつて、もう自棄になりながら、

『えゝ、ようございますとも。私身に覺えのないことですから、いくらどんなことをお書きになつたつて平氣ですわ。そんなことを云つて、私を威嚇かさうとなすつたつて、私はちつとも驚きやいたしませんよ。私は弱いやうにみえても、これで一生懸命になれば何んなことでも平氣でする女ですからねえ。』と、眞紅になつていつて、きつと反對に今度は黑田の顏を睨み返しながら、『そのかはりもう今日限り貴方もこの家へ被來つちや厭ですわ。たとへ今後はどういふことがありましても、私一切貴方にはお眼にかゝりませんから、どうかそのおつもりで被居つて下さい。』と、きつぱり云つて退ける。

黑田もさすがにさういはれると、少してれてゐたが、それでも內心では腹を立てゝゐるやうな顏で、

『はゝゝゝ、横川さん。大變に今日は强いことを云ひますね。やつぱり笹山さんがついてゐるから貴女も氣が强いんでせう。まあいゝ。まあ精々安心して、我々の力を馬鹿にして被居い。今にぎうといふ眼に逢はして上げるから、その時になつて泣き面をなさるな。これで僕も貴女にや甘がられてゐても、厭なことをさせりや一寸小手先の利く男ですぜ。まあ何はともあれ、蓋をあけるまで樂しみにして被居い。はゝゝゝ。』と、云つて、とんでもない時に取つてつけたやうに笑ふ。

京子には、その不貞つ腐れな、圖々しい態度が益々癪に障るばかりであつた。彼女はもう必死になつて、

『黑田さん。もうそれで仰有るだけのことは仰有つてしまつたんでせう。それならそれで、どうかお引取り下さい。此處は貴方なんぞの被居るところぢやないんです。御用が濟んだら

さつさとお歸り下さい。』と、せき立てる。

黒田もひどく反感をみせて、

『いや、さう仰有らなくとも歸るときには歸りますよ。折角人が好意で相談に來てあげりやこの御挨拶だ。貴女もずゐぶん眼先のみえない人ですねえ。』と、云つてしぶしぶ立ち上りながら、『それぢや僕はこれで失敬します。ほんとに僕の書いた記事がどういふ結果を惹起しても、もう責任を持ちませんよ。ようございますね。それぢや左樣なら。』と、云つて、つかつか階段の方へ出てゆく。その樣子にはその實止めるなら今だといふやうな未練がましいところがあつた。彼は新聞の記事といふのを利用して、何か京子の弱點を握り、そこから彼女に接近していかうとしてゐるのは眼にみえてゐたが、生憎にもその手段が成功しなかつたので、ひどく焦れてゐるやうな樣子もみえてゐた。

京子は默つて、黒田を送り出した。併し彼が下駄を突懸けて戸外へ出ていつてしまふと何んだか急に心細くなつて來て、心の底では非常な不安の氣が萠してくる。何糞ッといふやうな意地を張つてゐる半面では、あんな强がりを云つて、殊更に黒田に挑戰しなくてもよかつたといふやうな後悔も湧いてくるのであつた。

京子はその晩、焦れにじれて、到頭臥床へ入つても曉方ぢかくまで眠りをなさなかつた。先生の破門の件や、帝展への出品のことや、それから黒田のことなどを考へると、もう胸のなかが亂麻のやうに混亂して、切ない嘆息ばかりが出てくるのであつた。

二十三

その翌日の朝、田原のところからはやつて置いた屏風を返へせといつて、伸夫が受取りに來た。京子はまさかこれまで取返しに來やしまいと思つてゐたので、ひどく失望してしまつたが、併しもうかうなつてはそれを返さないといふ譯にはいかないので、仕方がなしにその伸夫に擔がせて返してしまつた。

京子は妙にがらんとしてしまつた自分の居間の眞中へ坐つて、それから長いこと茫然してたも同然である。いかに立腹したとは云へ一旦吳れたものを返せといふ先生の心持ちを考へてみると京子にはあんまり情ないやうな氣もする。自分がそれへ畢世の努力を傾けてお七の繪を描き、帝展へ出品して自分の藝術の價値を天下に問はうとしてゐるのは先生とてもよく知つてゐる筈である。それにその屏風まで取返さうといふのは、つまり自分の折角の苦心や希望までも奪つてしまはうといふのである。何んといふ慘いしかたであらう。先生もさういふことまでするからには、もう破門のことも斷然この際に實行してしまふつもりでゐるに相違ない。もう今後は誰れが何をしても到底妥協の道はないであらうか。それを思ふと、京子はさすがに何とも云へない心細さと、悲しさとを感じずにはゐられないのであつた。

もうあの田原の門下に加はつてから、京子は六年あまりの歳月を閲してゐるのである。その間には辛いことも情ないことも幾度あつたか知れなかつたが、併しそれと同時に彼女は田

原からひとかたならぬ恩顧と撫育も受けてゐるのである。亡き父の夢坡を惜しむあまりに、田原は全く他人とは思はれないやうな親切もつくして、自分に畫筆をとることを敎へて吳れたのである。自分が丹青の道に漸う眼鼻がついて來たのも全くあの田原のお庇護であつた。それに今になつてこんな悲しい破目になつては京子はもう立つ瀨がないやうに思はれるので、あつた。今迄の恩義を思ふと、徒らに自分の身ばかりが悲しまれて、果たして自分はそれほどまでに先生に對して不埒を働いたのであらうかといふ疑問が先々と湧てくる。いくら考へても、どうしても彼女にはそんなにまで責められるやうな罪を犯してゐるとは信じられなかつた。昔から頑固で、むら氣で、意地張りな先生の性質はよく知つてゐるだけに、彼女にはどうしても先生のやり方の方が殘酷なやうな氣がして、寧ろ恨めしくさへなつてくるのであつた。京子はそんなことを思つて、折角描いた下畫までずたずたに破り棄ててしまひ度いやうな絶望的な心持ちで、到頭その日は一日うかうかと時を消してしまつた。そしてさうなつてみると、誰れよりも一番頼りになるのは、あの笹山一人なので、彼女はどうかして笹山に

逢つて前後の事情を打明けて、これから先のことが相談し度くて耐らなくなつた。併しさうかうしてゐるうちに啓文社の退ける時間がすぎてしまつたので、何處をどうたづねて彼に逢へようとも當てがつかず、その日はそのまま早く寢に就いてしまつた。

その翌日、京子は笹山が啓文社へ出社する時間を見計らつて自分で電話をかけてみた。もし彼が出社してゐたら、何處かで逢ふ約束をしてその歸りを待つつもりでゐたので、彼女は嘸笹山の聲だけでも早く聞き度いのであつた。併し生憎にもその時には笹山は啓文社にゐなかつた。彼はあれから細君の病氣が惡いので、ずつと缺勤してゐて、當分の間はいつから出社するか分らないといふ返事であつた。

それをきくと京子は何んだかひどく落膽してしまつた。そんなに細君の病氣が惡いとすれば、こゝ少時の間はどうしても逢へないであらう。さうなれば自分ひとりで苦しい、切ない思ひをして、この難境に處していかなけりやならないのである。京子は喜美子のことなぞは少しも思ひ出さないほど心持ちが行き詰めて、途方に暮れてしまつた。

併し晩になつて、京子がたつた一人で貧しい夕飯をやつてゐるとそこへ突然笹山がやつて來た。いつになく彼は單衣の着流しで、鳥打帽子を被つてまるで書生のやうな無雜作な風裝をしてゐる。

京子は階段のところから斷りもなくぬうッと上つて來る彼の顏をみると、眞紅になつて慌てゝ食べかけのお膳を押入れのなかへ隱しながら、

『まあ、貴方、ようこそ。さ、どうか取散らかして居りますけれど、……』と、云つて、窓際へ座蒲團をしく。

笹山はいつものやうにやさしく微笑んではゐたが、併し妙に影のある聲で、

『こりやとんだお取込み最中にお邪魔をしましたなあ。さ、どうか遠慮なく濟ましてしまつて下さい。私はすぐに歸りますから。』と、いふ。さういふ顏は明るい電燈の光でみると、ひどく面窶れがして、何處か蒼ざめてゐた。

京子はすぐに茶の支度をしながら、

『いゝえ、もう濟んだんですの。どうかそんなことを仰有らずに御悠りなすつて下さいまし。今夜は實はいろいろお話をいたし度いこともありましてね。』と、云つて、愛想よくにつこりしながら、『あの、それはさうと、今日啓文社へ電話をかけましたら、たしか奥さまが大層お惡いさうで、いかがで御坐いますの。さぞ御心配で御坐いませうねえ。』と、眉をひそめる。

笹山は片肱を窓にもたせかけてぐつたりと膝をくづしながら微笑んでゐたが、やがて喉にからむ痰をきつて、

『いや、さういふお見舞ももう無駄になつてしまつたのです。實は妻は殘念ながら今朝たうとう亡つてしまひました。それだけならまだいゝのですが、實は息もやつぱりそれから三時間ほど遲れて母のあとを追つてしまつたのです。さすがの私もそれで今日はもうすつかり氣ぬけがして、何をしてもひとつも手につかんですよ。』と、云つて、ほろりとする。

京子はそれを聞くと、悚乎として、

『まあ、お二人とも……』と、云つたつきり少時の間は言葉さへ出て來なかつた。

笹山は悄然と首を垂れて、

『いや、死んでしまつたものは、全くどうにもならんですが、併し私にしてみれば實に殘念でねえ。昨日は二人ともどうやらすこしは容態が開いて來たのですが、やつぱり定命がなかつたものとみえて、今朝になつて急に惡くなつてしまつたのです。一時に二人に死なれてしまつたので、私はまだどうも夢のやうな氣がしてならんのですよ。』と、云つて、顏をあげながら、無理に笑つてみせる。

京子は耐らなくなつて、譯もなく涙ぐみながら、

『まあ、ほんとにお二人とも御一緒にいけないなんてどうしたと申すんで御坐いませう。さぞねえ、お力落としで、……』と、云つて、あとは聲を呑んでしまふ。彼女はまだ笹山の細君にも、息にも唯の一度も逢つたことはなかつたが、併し、一時に二人を喪つてしまつた笹山のうへを思ふと、氣の毒で泣かずにはゐなれないのであつた。逢つたことはなくても、何

かしら亡つた人達の顔が想像されるやうな氣がして、彼女は自分までが胸が暗くなつてくるのであつた。

京子はやつと思ひ返して、心から悔みを云ひながら、

『それでお跡をどう遊ばしますの。お一人でさぞお困りで御坐いませうねえ。』と、心配さうにいふ。

笹山は聲を低くして、

『まあ、兎に角親戚のものが來て、今跡始末をしてくれてはゐますが、何にしろあんまり急なことなんで、私は何をしても手につかんのですよ。あとのことなぞも考へるには考へてもさつぱり頭が役に立たんのでねえ。生きてゐるうちにはさう大して難有いとも思はなかつた妻ですが、しかしかうなつてみると何んだか非常な損失のやうに思はれて、私は全くのところすつかり力落しをしてしまつたのです。』

京子も深く合點いて、

『ほんとにさうで御坐いませうともねえ。お察し申しますわ。』と、しんみり云つて、『あの、それでお葬式はどうなりますの。』

『さあ、それが實は問題になつて居るのです。死體は病院から今晩私の宅の方へ引取つて、明日通夜をして、明後日の朝ほんの型ばかりの營みをしたあとでそのまゝ火葬をすまして、鄉里へもつていつてしまはうと思つて居るのです。私は東京には墓地といふものを持つて居らんもんですから。』

『それではお葬式は御鄉里の方で遊ばすので御坐いますか。それならそれの方がよろしう御坐いますわ。ほんとにお事多いお體なのに、大變な事になつてしまひましたわねえ。私もなんですか、夢でもみてゐるやうな心持ちが致しますわ。』と、いふ。

笹山は少時間を置いて、

『今夜も實は家で佛の夜伽をしてやらなければならんのですが、私はどうしても亡つた二人の寢て居る枕元に默つて坐つて居ることが出來んのです。私はこんなに心の平靜を失はうと

は思はなかつた。どうか横川さん。私の意氣地のないのを笑はんで下さい。妻や息に一度きに死なれてみると全く耐らんですからなあ。』と、云つて、彼はふつと蒼ざめたその頬へほろりと涙を流した。

京子はさうした笹山の悲しみがいぢらしく思はれてならなかつた。その清い涙で笹山の純良な、眞實な心がみえるやうな氣がして、彼女は何とも云へない同情の念に打たれたのであつた。田原先生が何んといはうが、あの黒田が何んと云はうが、笹山はこの通り美しい感情をもつた善良な人間である。世の中に親子の愛情ほど純眞なものはない。今この笹山は其純眞なものを自分に示し、自分の前で汚れのない涙を流してゐるのである。さう思ふと京子は自分までが耐らなくなつて、思はず袖口で涙を押拭ひながら、今自分で出來るだけの力を竭しても、どうかして笹山を慰めてやらうと思はずにはゐられなかつた。

笹山はさうしてゐるうちに少しは明るい心持ちになつたか、やがて氣を取直して、

『いや、京子さん。どうもつまらん愚痴ばかり並べて濟みません。實は私今日は神田の親戚

屋まで打合はせに出て來たのですが、その歸りに何んだか急にあなたに逢ひ度くなつたもんですから、到頭此方へ廻つたのですよ。いくら年をとつても、人間といふものは何か大きな打撃に逢ふとやつぱり親しい人に甘えたいやうな子供らしい心持ちが湧いてくるもんですなあ。はゝゝゝゝ。』と、寂しく笑つて、『いや、もう八時だ。かうしてもゐられない。どりやひとつそろそろ歸るとしませうか。』と、云つて、殘惜しさうに立ち支度をする。

京子はこれから妻や子の亡骸の待つてゐる寂しい家の方へ歸つていく笹山の心の中を想ひやつて、頻りに情つぽく引きとめながら、

『まあ、およろしいぢや御坐いませんか。これからお歸り遊ばすと又どうせ悲しい思ひばかりなさらなけりやならないんですから、もう少しこゝでお遊びになつて被居いましな。私も今夜はすることがないんで寂しくつて耐らないんですもの。』と、いふ。

さう云はれると笹山は又立ちかけた膝を落として、少時の間ぼんやり考へてゐたが、やがてまた氣が變つたやうに、

『京子さん。いつもあなたを誘ひ出して濟まんが、もし暇なら何處かそこいらまで一緒につきあつて呉れませんか。私は何んだかうしてゐると氣が沈んでゆくばかりなので、少し酒でも飲んでみたらと思ふんです。それも一人ぢやどうしても氣が向かんですから、あなた迷惑でも一緒につきあつて呉れませんか。』と、いふ。

京子は二つ返事で、

『えゝ、おつきあひしますとも。私が御一緒にいつてお氣が晴れるやうなら、何處へでもお伴いたしますわ。』と、云つて、笑顔になりながら、『ほんとにこんな晩こそ少しお酒でも召飲るといゝんですわ。それでないとお心持ちが却つて妙になつていくばかりで、しまひには御自分でどうにもならなくなつてしまひますわ。』と、態といそいそしながらいふ。

二人はやがていつものやうに、ふらりと戸外へ出た。

二十四

それから二時間ばかり後に、笹山と京子とは、牛込の神樂坂下から一寸右に折れた横丁の中にある高砂といふ怪しげな家の二階座敷で、擬ひ紫檀の卓を眞中に兩方から差向ひになつて、頻りに語り合つてゐた。卓のうへにはくさぐさの料理が並べられて、銚子の數ももう三四本重なつたので、笹山はひどく醉つてゐた。京子も相手をして一盃二盃と少しづつ嘗め味はつてゐるうちに、いつの間にか隨分飲んだとみえて、すつかりいゝ心持ちになつてゐた。京子はそこの家の門の前へ立つた時、奥座敷の方で三味線の音なぞも聞えるので變な家だとは思つたが、併し今ではもうそんなことはまるで忘れてゐた。笹山は上る時に今日は生憎金を持つて來なかつたから、どうかこゝで勘辨してくれといつたが、そこの家では笹山をよく知つてゐるらしかつた。

京子は亡き人の話から漸次と自分の問題の方へ話をもつていかずにはゐられなかつた。先づ田原先生から破門の宣告を受けた話からしはじめると、笹山もすつかり氣持ちが變つたやうに、

『いや、そりやもう當然さうある可きことだと思つて居つたのですよ。一昨日のあの樣子でみたつて、分りまさあ。あの頑固な、保守的な田原さんのことだから、あゝして見附かつてしまつた以上は、どうせひと騒動起るにきまつてゐる。私はあの時には何とも云はなかつたが、併しきつと貴女が昨日あたり先生のところへ呼びつけられて、えらい目に逢はされて居るだらうと思つて居つたのさ。はゝゝゝゝ。』と、笑つて、『併し、京子さん、もうさうなつたら仕方がないぢやないか。此方では自分の存立の爲めに最善の方法を盡して居るのに、それが先生の主義に反するからといつて、今更どうにもならんぢやないか。破門されたら、破門されたでいゝ。貴女はもう立派に一人で立つていける腕があるのだから、此際うんとひとつ覺悟をきめて一人立ちになつてしまつたらどうだ。もう何も恐れることはない。今更詫び

を入れて、もう一度もとの通りにして貰ふだけの必要は少しもないと思ふ。』と、勢つていふ。

京子はそれでも稍心細さうに、

『でも、私、今迄にこれほどお世話になつた先生のことですから、このまゝにしてしまふのはあんまり義理知らずのやうになりやしまいかと思ひますわ。ですからもう一度お詫びをするだけはして見ようと思ひますし、それにやつぱり何と申しましても、今先生に離れてしまひますと、私、何んですか杖を失してしまつたやうで、心細う御坐いますわ。』

笹山は大きく笑つて、

『はゝゝゝ。そんな意氣地のない話があるもんですか。あなたは女だからさう思ふかも知れんが、なあに、もうあなたには師匠も要らなけりや杖もいらんですよ。それにまあ兎に角今の時勢といふものを御覽なさい。田原翠嶺はそりや大家かも知れんが、併しもうそろそろ時世といふものから忘れられていかうとしてゐる過去の人です。これから芽を出し花を咲せていかうといふ貴女が、果してそんな人を頼りにしてゐていゝか悪いかも問題だと思ふ。第

一一昨日展覽會の事務所で皆が何んといつてゐました。仙波だつて、白峯だつて皆あなたを讃めないものはなかつたぢやありませんか、そればかりぢやない。貴女に田原派の臭味があるのを、皆はひどく攻擊さへしてゐたぢやありませんか。もう何を云つても若いもの丶時代ですよ。いくら田原さんが威張つたつて時代といふものには敵はんですからなあ。今破門の宣告をうけたのは、一方からいふと却つて非常にいゝことかも知れん。貴女としては正に利用すべき好機會とも云へるでせう。今の世の中はもう義理だとか、情實だとかいふものに束縛されてゐる時代ぢやない。貴女もそこはようく考へてみなけりやなりませんよ。』と、いふ。

京子にはその言葉が非常な感動を與へたのであつた。彼の云ふところは一々肺腑を衝いて、さういはれてみると、何から何迄が自分の胸にも共鳴するやうに思はれる。全く仙波や白峯の云つたことは彼女の耳にも殘つてゐた。それから時代といふもの丶移り變りもよく彼女には呑込めた。しかしそれでも彼女はまだどうしても田原先生のことだけは思ひ切れないのであつた。

京子はもう一應よく考へてみたうへで、改めてその問題を相談するからといつて、今度は笹山に黑田の一件を話した。それを聞いて彼がさぞ憤慨するだらうと思ひの外、彼はまるで齒牙にもかけないやうに鼻の先で笑つて、

『ふむ、あの馬鹿が、そんなことを云つて威嚇しに來ましたか。はゝゝゝゝゝ。いゝですよ。構はんでお置きなさい。あんな奴に何にが出來るもんですか。』と、いふ。

京子はそれでも心配さうに、

『でも、此の場合ですから、もしひよつとしたことでも書かれますと私世間の人にどんな誤解を受けないとも限りませんし、それに先生の方へも顏向けが出來ませんから。』と、いふ。

笹山は盃を啣みながら、

『いや、先生の事よりも何よりも人氣といふものが今は一番恐ろしいですよ。だからもし、彼奴がそんなことをするやうでしたら、此私が第一默つて居やしません。私が一旦かうして引受けた以上はもう何事も私に任せて安心して被居い。』と、ゆつたりしたいつもの笑顏にな

つて、『まあ考へても御覽なさい。あの黑田が今度入つた新聞は發行部數にして僅か一萬かそこいらの吹けば飛ぶやうな小新聞ぢやありませんか。東京新報といふ名はえらいが、まるで信用もなけりや勢力もない新聞です。それにあんな馬鹿が入社したつて、さう最初から社會部の記事なんかが自由に書けるもんぢやないです。よしんば書けるにしたところで、私はちつとも驚きやしません。その前に手を廻して、記事を差止めさせるまでのことです。私も今迄この里で二十五六年も飯を食つて來た男だ。それぐらゐなカは憚りながらもつてゐますよ。まだ尻に卵の殼をくッつけてゐる分際でゐながら、私を社會的に葬るなぞとはよくもぬけぬけと云へたもんだ。彼奴も到頭誇大妄想狂になつてしまひましたかな。はゝゝゝゝ。人を葬る前に、自分が口を乾されて餓死にをすることから先に考へて置かなけりやならんですよ。』と、態と聲を上げて笑ふ。

京子はもうそのひと言で、すつかり安心してしまつた。いかに黑田が何をしたとて、この笹山に賴つてゐさへすればもう間違ひはないといふ確信が、益々彼女を笹山の方へ惹きつけてゆくのであつた。京子はにつこりして、

『私もさうだらうとは思ひましたが、でもあんまり恐いことばかり云ふもんですから氣味が悪くなりましてねえ。ほんとに今の若い人は眼先ばかりのことで動くから先が見え透いてしまふんで御坐いますわねえ。ほんとにあの黑田さんなんか、裏からみると甘う御坐いますのねえ。』と、笑ふ。

笹山も笑つて、

『はゝゝゝゝ。併し黑田としちや畢世の智慧をしぼつて企んだ仕事に相違ないですよ。あの男は隨分あなたに戀ひをしてゐるんだつていふから、當人にすりや一生懸命さ。それに甘いといはれちや、新進の小說家も形なしですね。はゝゝゝゝ。』と、云つて、又銚子を取上げながら、

『京子さん。どうかもう一杯飲んでください。貴女は見かけの割りになかなか飲けるぢやありませんか。何にしろあれほどの酒豪であつた横川蓼坡さんの娘さんだからやつぱり遺傳で

すかな。はゝゝゝゝ。』と、云つて、置酌をしてやりながら、『いや、若い女の人にこんな家で酒なんぞすゝめちや可かんが、併し今夜は何んだか氣が變になつてゐるのだからどうか許して下さい。』と、いふ。

京子は笹山の心の中を察すると、それを斷るのが氣の毒で耐らなくなつて、紅く熱つた頰を押へながら、

『私、つひ知らずに頂いてゐてすつかり醉つてしまひましたわ。』と、云ひ云ひ飲んだが、その時には何んだか無上に氣が浮いて、彼女は時々家が廻るやうな心持ちさへしたのであつた。

京子はそれからも强ひられて又二つ三つ盃を重ねたが、到頭我れにもなく醉ひ倒れてしまつて、もう十一時過ぎてからやつと俥で送られて本郷の家へ歸つていつたのであつた。後に殘つた笹山はどうしたか彼女はまるで知らなかつた。

二十五

その翌日は、朝から小雨がしとしとと降つて、云ひやうもない佗びしい日だつた。京子は昨夜の酒が祟つて、夜半にも寢苦しく、幾度か起きて階下へ水を飲みに下りていつたりしたが、いつも起きる七時になつてみても、どうも頭が重くて起きられなかつた。で、到頭いつになく十一時近くまでも臥床のなかでもぞもぞしてゐた。階下の細君は心配してもしや體でも惡いのではないかといつて、態々見に來て吳れたりした。

京子には何よりも心配になるのは、昨夜心にもなく醉つて、あの笹山に醜態をみせやしないかといふことであつた。若い女の身空で酒なぞを飲むさへあるに、いくら笹山がすゝめたからといつて、量を過ごして前後不覺に醉つてしまつたのは、何としても恥かしかつた。醉つてゐる間に云つたり、したりしたことをひとつも覺えてゐないので、益々それが氣にかゝ

つて、京子は何かしら唯身を責めてならないのであつた。もしやあの笹山の前で見るに耐へないやうな醜態でも演じてゐたらどうしよう、と思ふと、彼女は路傍に倒れて嘔吐なぞをしてゐる醉漢なども思ひ遣られて、額から冷汗が滲むやうな心持ちにならずにはゐられないのであつた。そして又その間に、笹山が自分に對してどういふことをしたかといふやうなことも氣にならないではなかつた。

午近くなると、さすがに京子も寢てはゐられなくなつてそろそろ起き上つた。居間の寢道具を形づけたり、掃除をしたりしたあとで、階下の水口へいつて冷たい水で顏を洗つてくると、それでもいくらか氣持ちがさつぱりして來た。朝飯はとてもいけさうもないので、彼女はその支度もしずにそのまゝ又机の前に坐つてぼんやり考へ込んでしまつた。

障子に映る灰色の光をみてゐると、彼女は無上に感傷的な心持ちばかりが胸をついてくる。その日は又どうしたのか、行方の知れぬ妹の喜美子のことがやたらに思ひ出されて、矢も楯も耐らないほど逢ひ度くて、逢ひ度くて耐らなくなつてくる。今頃はあの喜美子は何處

で何をしてゐることだらう。峯村の家にゐるといふ大體の見當だけはついてゐるのだが、それもまだ確證があがつた譯ではない。此頃ではいろいろなことにかまけてゐて、思ひ出すことも少なかつたが、一度思ひ出すと、我慢が出來ないほど心配になつてくる。あゝした氣の弱い女のことであるから、もし見も知らぬ土地へでも誘拐されていつたとしたら何うであらう。それを思つただけでも、京子は胸がどきどきしてくるのであつた。

京子は又此れから先のことも氣になつて氣になつてならなかつた。先生から破門の宣告を受けたうへはもう他人を賴まずに自分ひとりで一生の目的に向つて邁進していかなければならない。果たして自分にそれだけの力があるであらうか。又いかなる艱難にも處していけるだけの勇氣があるであらうか。昨夜の笹山の言葉を思ひ出すと、稍力をつけられるやうな氣もするが、かうして胸に手を置いて冷靜に考へてみると、どうもまだ不安でならなかつた。

京子が差當つて困つてゐるのは、帝展出品の問題であつた。もう出品の受入れ日も目睫の間に迫つてゐる。少しでも餘裕をもつ爲めには今日明日のうちにいよいよ本圖に取りかゝら

なければならないのである。それに折角の屏風は先生のところへ引上げられてしまつたので、彼女はそれに代るべきものを得る手段さへなかつた。圖柄が圖柄とて普通の絹地に描いたのではとても引立たないので、彼女は何を措いても屏風に描き度かつた。今先生から貰つたやうな屏風を新たに造らせるとすると、少くとも二百圓のうへはかゝるので、彼女には一寸手に及ばなかつた。増田家から貰つた金も漸次と減らしてしまつたので今では百圓あまりしきや銀行の通帳には殘つてゐなかつた。あと百圓あまりの金の融通さへ出來れば何んとかならないものでもなかつたが、併しそれだけの金は到底京子には右から左には出來なかつた。

京子はもし帝展へ出品することが出來ないとなると、自分はどうなるであらう。折角これほどの意氣込みでかかつたものを、みすみす無駄にしてしまふのは、死ぬよりも辛かつた。大方出來上つた下描をみるにつけても、彼女は齒嚙みをしたいほど口惜しくてならなかつたが、と云つて、もうかうなつてしまつてはどうにもならないのであつた。

そんなこんなを考へつめてゆくうちに京子はヒステリックな氣持ちになつて、もう泣けるだけ泣いて泣いて泣きつくし度くなつて來た。で、彼女はそのまゝ、疊のうへへ突俯して、聲を忍びながら心の中の涙を流しつくすやうに激しく歔欷しはじた。さうなると云ひ甲斐もなく涙は先々と溢れて來て、彼女は悲しさのどん底に落ちてゆくやうな氣持ちがして來た。亡き父のことなぞも思ひ出されて、心はますます悲しみに閉ざされてゆく。併しすつかり泣いてしまふと、それでもいくらか心持が輕くなつて來た。

京子は夕方までうつらうつらと時を消してしまつたが、ふつと笹山の葬式のことを思ひ出して、せめて正式に悔みにだけはいつて置かなければならないと思ひついた。出棺は明日の十一時で、谷中の齋場で告別式を執行つて、そのあとで町屋の火葬場へ送るといつてゐたから、今夜の通夜にはどうあつても顔を出さなければ義理が缺けると思つた。で、彼女は輕い夕飯を濟ますと、ひと風呂浴びて來て、氣持ちのよくなつたところでうつすり身だしなみに化粧なぞもしたあとで出支度をした。

京子はそれから電車で四谷へ向つた。番地はよく知らなかつたが、それでもよく處をきいてゐるので、笹山の家はすぐに分つた。板塀に衝門のついた二階建ての可成りな家構へで、思つたよりもはるかに立派な住居であつた。

門の前には俥が三臺ほど提灯をつけぱなしたまゝ乘り捨てゝあつて、そつと玄關へ入つていつてみると、形ばかりの式臺をした前には通夜の客がたてこんでゐるとみえて、下駄がずらりと並んでゐた。京子はそんな混雜の中へ入つてゆくのは氣恥かしいやうな氣もしたが、そこへ若い書生が取次ぎに出て來たので、彼女はやむなく本郷通りで買つて來た線香の箱を出して、悔みの口上だけ云つた。と、書生は一寸お待ち下さいといつてそのまゝ奥へ入つていつたが、やがて引違へに笹山が紋付なぞを着込んでひよつくら出て來て、

『やあ……』と、云ひながら式臺へ下りて來て、『こりや態々御丁寧に有難う。』と、につこりしながらいふ。

京子はそれでも切口上で一應の悔みを云つて、やがて聲を低くしながら、

『あの、昨晩はほんとに失禮いたしました。私何んですかあんまり醉つてしまひまして、貴方にお眼にかゝるのがお恥かしくつて……』と、云ひながら、我れにもなく頰を染めた。

笹山も笑つて、

『はゝゝゝ。いや、どうも私こそ失禮してしまひました。今日は體でも惡くして寢てゐやしないかと思つて實は心配して居つたのですよ。』と、云つて、奥の方へ氣を配りながら、『あの甚だ失禮な申分ですが、今夜は啓文社や新聞關係の人達があの通り澤山つめかけて來て居るので、又人の口が煩いから、あなた、折角來て下すつたが、お通夜の方は遠慮して下さらんか。實は今も貴女のことがそれとなく問題になつて居るので、そこへあなたが入つて來られては貴女も迷惑だと思ひますから。』と、稍當惑してゐるやうにいふ。

京子はさう云はれると返事に困つて、

『まあ……』と、云つたが、眼を逸らして、『あのそんなに大勢さんがおみえになつてゐますんでしたら、私も恥かしう御座いますから、あの、佛樣には失禮で御座いますけれど、こち

らでもう御免を蒙りますわ。』と、いふ。

笹山は氣の毒さうに、

『ほんとに濟みません。いつもならこんなことを云ふんぢやありませんけれど、何かと煩い此頃のことですから、此方で注意してかゝらんととんだことになりますからなあ。どうかほんとに惡しからず思つて下さい。』と、云つて、京子の方へ顏を寄せながら、『あの、それで私は明後日骨上げがすむと晩の汽車で鄕里の方へ歸りますから、多分一週間ぐらゐは貴女にもお眼にかゝれないと思ひます。併しなる可く早く此方へ歸つて來るやうにしますから、何かのことはいづれお眼にかゝつてゆつくりお話ししようぢやないですか。いろいろ私の方でも考へてゐることがありますから。』と、いふ。

京子はこの後一週間も笹山に逢へないとなると妙に心寂しい氣がして、

『まあ、一週間もおかゝりになるんで御座いますの。』と、云つたが、ふつと又自分でも何んといふ譯もなく頰が熱くなつてくるので。彼女はそれを紛らかすやうに笑つて、

『あの、それではどうかお歸り遊ばしたら、すぐにお報らせになつて下さいましな。私もいろいろ御相談いたし度いことが溜つて居りますから。』と、いふ。

笹山は合點いて、

『いや、又どうせ鄕里の方から手紙でお打合はせをしますよ。それに啓文社の方も大分怠けて居るので、重要な用事も澤山滯つて居るので、私もなるべく早く歸つて來度いのです。』

『ほんとにどうかもし何んで御座いましたらお早くお歸り遊ばして下さいましな。』と、云つて京子はそのまゝ歸り支度をしながら、『あの、それからどうか昨晩のことはお氣にお留め遊ばさないで下さいましな。私ほんとにお恥かしくつて、……。』

『いや、私も御同樣です、何事も貴女と私との間の祕密ですから構はんぢやないですか。はゝゝゝ。』と、笹山は笑つて、『それぢや又お眼にかゝります。どうも有難う。』

『いゝえ、お邪魔をいたしました。それでは御機嫌ようお立ち遊ばせ。』と、京子は丁寧に辭儀をして、それから殘惜しさうに笹山の家の玄關を離れた。

笹山は京子が門を出るまで式臺のところから見送つてゐて、彼女が門のところでもう一度振返つて會釋をすると、彼はにつこり笑つて頭を下げた。

そこへ又通夜の客とみえて、伸が二臺ほどつながつてやつて來て、門のところで梶棒を下ろした。京子は何故か身を憚つて、逃げるやうに往來の方へ出ていつた。

二十六

笹山はその翌日豫定のやうに妻と子の葬式を濟まして、その翌日骨上げが濟むと遺骨をもつて晩の七時半の急行列車で、郷里である名古屋の在へ歸つていつた。

京子も告別式には參列しようかと思つたが、通夜でさへ遠慮してくれといはれてゐるものを、そんな處へ出ていつて又何かと面倒が起ると可けないと思つて、その日も行かずに濟ましてしまつた。そして心の中ではさうまでして笹山のことで世間へ氣兼ねをしなければならないのが不思議にも思はれたが、併し笹山があれほど神經質になつてゐるところをみると、自分も何かしら、さうしなければならないやうな氣がしてくるのであつた。この際であるから何事につけても變な噂のたゝないやうにするのが、彼女は何よりだと思つてゐたのであつた。

笹山が郷里へ歸つてしまふと、僅か一週間の別れでも京子には何んとなく寂しくてゐられないのであつた。相談相手のないのが何よりも心細くて、彼女は日に日に迫つてくる帝展の開催を心の中ではおどおどしながら待つてゐるのであつた。もう今日を外したら到底間に合はないと毎日のやうに思ひながら、一日々々と日が過ぎ去つてゆくのであつた。

或晩のこと、京子はもうじりじりしてとても靜かにしてゐられないので、又例の繪の下繪を廣げて、惡いところを直したり、細かい自分の構圖を變へたりしてゐるとそこへ突然階下では格子戸の開く音がして、やがて細君が階段をみしみしきしませながら上つて來た。

京子は又ひよつとかしたらあの黑田が來たのではあるまいかと思つて、眉を顰めてゐると、

細君は上口から手を伸ばして一葉の名刺を出しながら、小聲で、

『あの、横川さん、かういふ方がお見えになりましたが、お通しして宜しいんですか。』と、いふ。

京子はその名刺をみると、吃驚してしまつた。それには思ひもかけない、白峰秀邦の名が書いてある。あの白峰がどうしてこんな處へと思ふと、彼女は何かなしに胸が激しく躍つてくるのであつた。

京子はやがてさも當惑したやうな顔で、間内を眺め廻しながら、

『こんなに取散らかしてゐるところへお通しするのは何んですけれど、でも仕樣がありませんわねえ。』と、云つて、慌てゝ立つてそこいらを取形づけながら、『あの、それではどうか此方へお上り下さるやうにさう仰有つて下さいましな。』と、いふ。

細君は心得て階下へ下りていつた。

と、間もなく、京子が身繕ひをしてゐるところへ階下からは白峰が滿面に笑みを含みながら上つて來た。まだ一度しきや逢つたことがないので、妙に取りつき場がないやうに、彼は上框のところへ遠慮がましく坐つて、

『やあ、どうもお仕事中にお邪魔をしました。』と、云つて挨拶をする。

京子も丁寧にそれを迎へて、

『どうも穢いところでほんとにお恥かしう御座います。さ、どうか此方へお入りになつて下さいましな。そこではあんまり失禮で御座いますから。』と、云つて窓際に敷いた座蒲團をすすめる。

白峰は一度は辭退したが、やがて、

『それでは御免蒙ります。』と、云つて、そのまゝそつちへ居坐り寄つてゆく。

京子は下繪がひろげてあるのでさも恥かしさうにもぢもぢしてゐたが、どうかして白峰に不快の念を起させないやうに力めて愛想よく振舞ひながら、

『ほんとによく被來つて下さいました。私まさか貴方が被來つて下さらうとは思ひませんで

……』などといふ。さういふうちにも胸ばかりが躍つて、頬がかつかとしてくゐので、京子はそれが氣になつてならなかつた。

白峰はやがて袂から古代布の煙草入れを出して、そのなかから金口を一本ぬきだして火をつけながら、

『いや、實は先達から一度伺はなけりやならん用があつたのですが、私も忙がしくてゐるもんですから、つひ今日まで延びのびになつてしまひまして……』と、云つて下繪の方をばかりじろじろみながら、『あの、これは今度の帝展のですか？』と、聞く。

京子は恥かしさうな嬌態をして、

『まあ、そのつもりで居りますんで御座いますけれど、どうも思ふやうに參らないもんで御座いますから。』と、いふ。

白峰は半身後の方へ吸ひ寄せられてゆくやうに片手をついて眺め入りながら、

『あの、失禮ですが、拜見させて頂いてもいゝでせうか。』と、いふ。

京子は頰を紅らめて、

『こんなものを御覽になつちや厭で御座いますわ。ほんとに出來が惡いんで御座いますものの。』と、いつたが、白峰はひどく興味を覺えてゐるやうに到頭中腰になつて漸次と繪の方へ摺り寄つていきながら一生懸命になつて畫面へ眺め入つた。

京子も仕方がなしに起つてそつと電燈を繪の方へ引張つて來たが、その手は云ひ甲斐もなく慄へてゐた。

白峰は專門家らしい態度で仔細に筆のあとを見ながら眼を遠ざけたり近めたりして一心になつて見入つてゐたが、やがてさも感じ入つたやうに、思はず、

『うむ、うまい。』と、口走る。そして京子の方を向きながら、『横川さん、こりや此間の三越の展覽會のよりも數等いゝですなあ。實にいゝ。貴女が辿つていかうとしてゐられる道はたしかにいゝ。失禮ですが、私はこの畫ですつかり敬服してしまひました。三越へお出しになつたのは忌憚なく云ふと、まだどうも私には多少の疑問が殘つて居つたのですが、これを拜

見してすつかり敬服してしまひました。私は何よりもこのお七の姿態が實に氣に入りました。』と、飽かず畫面に眺め入りながら口を極めて推奬する。

京子は氣恥かしいなかにも、さう云はれると嬉しさが喉もとまでも込みあげてくるのであつた。このお七の繪はまだ田原先生にも誰れにもみせないのである。笹山がみてくれたきりで專門家の眼にはまだ一度も觸れてゐないのである。それに今畫壇の新進として日の出の勢力をもつてゐる白峰からかうした飾り氣のない推讃の言葉を受けては、京子とても飛び立つやうな嬉しさを覺えない譯にはいかないのであつた。それにまだ彼女とても描きはしたものゝ、この畫に對してさまでの自信がある譯ではないのであつた。大體の構圖はかうと形をつけてみただけで、まだまだ工夫の必要はいくらもあると思つてゐたのであつた。それにも不拘、白峰は心の底からの好意をもつてこれを讃めてくれてゐるのである。さう思ふと京子は我れながら可笑しいほど氣が浮々してくるのであつた。

白峰はやがて又もとの座へ歸つて、藝術家らしい興奮を眼に輝かしながら、

『いや、横川さん。全くすばらしい出來ですよ。これなら帝展へお出しになつても間違ひなく入選します。今度はいよいよ賞に入りますかな。はゝゝゝゝ。』と、自分も嬉しさうに笑つて、『併し全く日本の畫壇から貴女のやうな閨秀畫家が一人でも多く出て呉れるといふことはたしかに心强いことです。どうか今度は一生懸命になつて努力をなさるやうに、私からもお願ひして置きます。』と、重々しくいふ。

京子は唯もう嬉しくて、涙の滲むやうな心持ちになつてゐたが、それにつけても口惜しいのは屏風をとられて帝展の出品が出來ないことであつた。彼女はそれを思ふと、いくら我慢をしようとしても、雙眼には涙が滲み出てくるのであつた。

京子はやがて顏を伏せたまゝ、

『あの、こんなまづいものをさうまでに仰有つて下すつてほんとに私何んとお禮を申上げてよろしいか分りませんわ。私貴方のお言葉でどんなに力がつきましたらう。私、自分では何んで御座いますか少しも自信が御座いませんでしたのに……』と、いふ。

白峰は紫色の煙を吐きながら、

『いや、これで自信がなくちや、どんなものが出來たら自信が出來るのです。そんなに謙遜なすつちや私は何とも云へなくなるぢやありませんか。』と、笑つて、『あの、それでいつ頃から本物におかゝりになるんです。もう出品の受付日までにあと一月しきやないぢやありませんか。餘程お急ぎにならんと間に合ひませんぜ。』と、心配さうにいふ。

京子は眼を瞬いて涙を押隱しながら、少時の間默つて俯向いてゐたが、やがて、

『あの、私、實は今度はもう出品しまいかと思つて居りますんですわ。』と、消え入るやうな悲しさうな聲でいふ。

白峰はそれを聞くと驚いて、

『え、出品なさらない？』と、いつたが、京子はもう我慢が出來なくなつて、

『あの、私、恥ぢをお話しいたさなければ分りませんけれど、實はこれを描かうと思ひまして田原先生から結構な屏風を頂いて居りましたんですの。ところが一寸事情が御座いまして

その屏風を先生の方へお返ししなけりやならなくなりましたもんですから。私、それですつかり氣落ちがしてしまひまして、もう何んですか下繪が出來ずちつとも氣が進みませんのですわ。』と、訴へるやうにいふ。

白峰は怪訝な顔で、

『併しそりや妙なお話ぢやありませんか。田原さんだつてもう期日が切迫してゐるのは御承知なのに、何んだつて今になつてそんなことをなさるんでせう。』と、いふ。

京子は此間のこともあるので、却つて破門のことを話して、白峰の意見を聞いてみるのもいゝやうな氣がしてつひうつかり口を滑らしながら、

『あの、實は、私、貴方がたにはお話しいたし憎いんで御座いますけれど、あの、今度私或ことで誤解を受けまして、つい先達先生から破門の宣告を受けてしまひましたんで御座いますわ。それが爲めに私、折角頂きました屏風もそのまゝ又お返ししなければならなくなりまして……』と、あとはさすがに云ひ澁つてしまふ。

白峰はそれを聞くと、さすがに驚いたらしく、少時の間はまじまじ京子の顔をみてゐたが、やがて稍皮肉な調子で、

『ふむ、ぢや田原さんは貴方を破門してしまつたんですか。相變らずあの人はそんな昔風なことをやつてゐるんですねえ。あの人はあなたのやうな人に離れられてしまつてこれから先どうするんでせう。あの門下からは隨分い、人も出てゐますが、今ぢや誰れもあの人と交渉のある人はないぢやありませんか。恐らく貴方ぐらゐが一番最後まで田原さんのところに殘つてゐる有望なお弟子さんでせう。それにあなたまで破門してしまふといふのはどういふんでせう。本來なら、あべこべに向うから待遇を厚くして、離れていくのを防がんけりやならん地位にあるのぢやないでせうか。』と、いふ。

京子はその言葉で稍力を得て顔は上げずに、

『あの、もとを云へばつまらないことからさうなつたんで御座いますけれど、私も變な誤解を受けてこのまゝになつてしまひますのは殘念で御座いますから、いづれそのうちに一度お

詫びにだけは出ようと思つて居りますんですけれど……』

『いや、もうさうまでしてあの田原さんの門下に列してゐる必要はないでせう。これからは貴女によつて却つて田原さんの名聲が存續されこそすれ、貴女としてはもう田原さんの門下であるといふことがさう名譽でもないですからなあ。』と、いふ。急進的な、血氣盛んな彼は、もう時勢に遲れた大家なぞその價値は認めないといふやうにいふ。

京子もさう云はれると、さすがに女だけにあんまりだといふ氣もいくらかして、そのまゝ默つてしまつた。

白峰はひと膝進み出て、

『いや、併し貴女が田原先生からさういふ宣告を受けたといふことは、私達にとつては非常な福音ですよ。貴女があの人と緣を切つてさへ下されば、私達は却つて非常に好都合なのです。』と、云つて、眼を輝かしながら、『あの、實は、私が今夜伺つたのは他のことぢやないのですが、ほんとうのことを申上げると少しお願ひがあつて態々伺つたのです。實は先日來我

我の方の仲間の間でもあなたのお七の絵が非常に問題になつて、誰れも彼もあなたの御技量を非常に推奬してゐるのです。で、もし出來ることなら、我々の今やつてゐます繪畫協會の方へ入つて頂ければといふのが皆の希望だもんですから、實は私が代表者の一人としてかうして交渉に上つたのです。』と、いふ。

京子はさう云はれると思はず顏を上げて、涙に濕んだ眼を大きく開きながら少時の間は口もきけないやうな顏をしてゐた。

白峰や仙波が今中心になつて起してゐる繪畫協會といふのは畫壇でも有名な團體で、最近では帝展に不平を懷いてゐる大家は勿論、若手の賣出しの畫家の大部分は參加してゐるので、その活動は眼覺ましく、上野でも帝展を向うへ廻はして、すばらしく世間の視聽をそばだたしめてゐるのであつた。これから認められようとする若い畫家は協會へ推薦されることを非常な名譽にしてゐるので、京子も其の幹部側ともいふべき白峰がかうして態々訪ねて來てくれたうへに、入會をすゝめてくれるのをみると、もう胸がどくどくするほど躍つてきた。

彼女は内心夢ではないかといふやうな氣さへしてゐるのであつた。

白峰は猶ほも言葉をつづけて、

『あの、それで實は私達は田原さんと貴女との間がさうなつてゐようとは少しも知らないので、ひよつとしたら田原さんの方から何か抗議が出やしないかといふ懸念もあつたのですが、兎に角一應御相談に出てみたうへで、いづれなりとも極めて頂くことにして、私は使者の役目を引受けて來たのです。』と、云つて、笑ひながら、『ですから私は今のお話を伺つて却つて安心したのです。田原さんが破門をするといはれるのなら、これほど好都合なことはないぢやありませんか。いつそどうです。もうこのまゝ田原さんの方は思ひ切つてしまつて、廣い天地に出る氣にはなりませんか。』と、いふ。

京子は差當つてどう返事をしていゝか分らないので、默つて首垂れてゐた。

白峰はそれからも現時の畫壇の趨勢や、それから田原の畫風の古いこと、協會の事業の前途といふやうなことを嚙んでくゝめるやうに話して、若し藝術のうへで長い生命を生きよう

とするのなら、今のうちにすべて古いものを絶つて一歩でも二歩でも新らしく拓かれた道へ入つてゆく必要があることを力説した。さう云はれてみると京子はもう一も二もなくその説に服するのであつたが、併しさうかといつてすぐそれに承諾を與へるだけの決斷がどうしてもつかないのであつた。今協會へ推薦されるといふのは願つてもないことである。殊に田原先生のところから破門されてすぐに、さうした光榮が自分を待つてゐてくれるといふのは世間態もすばらしくよかつた。彼女はそれだけは何を措いても嬉れしかつたが、併し胸に手を置いて考へてみると、何かしら田原先生に對して濟まないやうな氣がしてならない。いかに自分には辛い先生であつても、このまゝ誘はれるがまゝに背いてしまつてはあんまり情誼にかけてゐるやうな氣がする。彼女はその一事で迷はない譯にはいかなかつた。

白峯はそれとみてとつて、餘裕をみせながら、

『いや、併し横川さん。これは貴女としては一生の大問題なのですから、決して今すぐに御即答を得ようといふのぢやありません。どうかひとつ充分お考へ下すつて、もしそのお考へ

がついたら、どうか私達の運動に參加して下すつて、充分働いて頂き度いのです。それに會期も今のところ十一月になつてゐますから出品の繪も帝展より半月の餘も遲く受付けるやうになつてゐるのです。ですから、どうか充分お考へになつて御諾否の御返事を伺はして下さい。もしこのお七の繪がそつくり私の方へ頂けるやうにでもなつたら、それこそこんな好都合なことはないですからなあ。』と、又下畫の方を見ながらいふ。

京子はやつと口を切つて、

『どうも御親切に仰有つて下すつてほんとに何んとお禮を申上げてよろしいか分りませんわ。こんな未熟なものを協會へ推薦して頂くなんて、私ほんとに光榮なんで御座いますけれど、私それに就いて少し考へて置き度いことも御座いますから、どうかこゝ一兩日の間考へさせて頂き度う御座いますわ。大變に失禮な申しやうで御座いますけれど、どうか不惡。』と、いふ。さう云ひながらも彼女は、心の中では何とも云へない得意さを覺えてゐるのであつた。

白峯はそれから一時間ばかりいろんな話をして、二三日中に又もう一度訪ねてくるからといつて、その晩は歸つていつた。彼は立ち際に、

『あなた、たつたおひとりで生活して被居るんですか。ほんとにお羨ましいことですなあ。』

と、云つて、四邊を見廻してゐたが、『繪を描くには全く一人に限りますなあ。我々はいゝ畫室さへもつてゐればもう何も要らんですよ。』と、云つて、そのまゝ愛想のいゝ會釋をして歸つていつてしまつた。

京子はたつた一人になると、まるで夢をみてゐるやうなぼうッとした氣持ちで、ぼんやり下繪の前へ坐つてゐた。彼女はさうしてゐても聲を出して躍り廻り度いやうな氣がして、無上に胸が喘いでくる。彼女は前途のことを考へようと思つても却つてわくわくして何事も考へられなかつた。そのまゝ彼女は到頭一時過ぎまでうつとり下繪の前へ坐つてゐた。

二十七

それからはもう京子は夜となく晝となく前途のことばかり考へてゐた。いつそこのまゝ田原先生の方とは全く縁を切つて、白峯のいふやうに協會の方へ奔つてしまはうか。さうした考へは漸次と彼女の胸の中で募つて來たが、併しそれと同時に又田原先生が氣の毒なやうな氣もしてくる。もし自分が此處ですべてにいゝ策を執らうとするには、是非もう一度先生に逢つて、一應は詫びをしてみたうへで、もしそれでも先生が自分を許して呉れなければその時こそ、はつきり自分の意志を話して正々堂々と協會の方へ移つていくに如くはない。さうすれば何事も明るく、理路もはつきりとなつてくる。京子はやつとさう考へをきめて或日の夕方田原先生の家へ訪ねていつてみた。何んとなく入り憎いのをやつと我慢していつものやうに臺所口から入つてゆくと、先生の夫人はそこで女中達と一緒に夕飯の支度をしてゐたが、

彼女の顔をみるとさも懐かしさうに、

『お、横川さん、久濶でしたね。』と、云つて、もう彼女の來意を察してゐるやうに、『あの、一寸待つて下さいよ、私奥へいつて伺つて來ますから。』と、云ひ捨てゝそのまゝいそいそ奥へ入つていつてしまつた。

夫人はさうしたまゝいつまでも出て來なかつた。京子は初めのうちは何かしら望みがあるやうな氣がしてゐたが、漸次と時がたつにつれて、不安は刻々に増して來た。これほど時間がかゝるやうでは、先生と夫人とが、何かむづかしい話をしあつてゐるのではあるまいか。先生がもう斷じて自分には逢はぬと云ひ張つてゐるのを夫人は頻りに取做してゐるのではあるまいか。さう思ふと京子はひどく暗い心持ちになつて來た。どうせ許して呉れないものならもう已むを得ないが、しかしかうして態々詫びに來てゐるものを、逢ひもしずに追歸すのはあんまりである。もういつそのこと協會へいくことを言明して、潔く先生の門下を去つてしまはうか。併しさうは云ふものゝ自分に果たしてそれを云ひ切るだけの勇氣があるであらうか。京子は一心に勢つてゐながらも、何んだか胸の底には弱い氣が頻りに湧いてくるのであつた。

もの、三十分もたつと、夫人は氣ぬけがしたやうなしよんぼりした顔をしてまた出て來て、京子の顔をみながら、さも氣の毒さうに、

『ねえ、横川さん。折角來て下さいましたけど、やつぱりまだ駄目なんですよ。いくらさう申しても、貴女にはもう一生逢はないなんて申して、ちつとも私の云ふことなんか聞き入れてくれませんの、ほんとに先生はどうしてあんなんでせうねえ。』と、嘆息を吐くやうにいふ。

京子はそれを聞くと、どうしたのか涙含ましい氣持ちになつて、

『夫人。私實は今日は先生にお目にかゝつて是非御相談をいたし度いことがあつて伺ひましたんで御座いますが、たつてお逢ひ下さらないと仰有るならもう致し方も御座いません。それではどうかよろしく。』と、云ひ捨てゝ、彼女はもう一刻の間もそこにはゐられないやうにすたすたと臺所を出てしまつた。

後では夫人が二三度京子の名を呼んだやうであつたが京子はそれを耳にもかけずに急ぎ足に戸外へ出ていつてしまつた。

往來へ出てみると、何よりも口惜しさが先に立つて、京子の眼からは涙ばかりが先々と溢れて來た。此方ではこれほどに思つてゐるものを、何んといふ無情い先生の心であらう。自分が先生から非難される唯一の理由は唯先生の云ひ付けに背いて展覽會へ繪を出品したといふことだけに止まるのである。それも評判でも悪くて、先生の名譽に累を及ぼしたとでも云ふのなら仕方がないが、併し結果は今日のやうな光榮を生んで、あべこべに先生の門下といふものに光彩さへそへてゐるのである。それを自分はどうしてかうまで侮辱を受けなければならないのであらうか。さう思つてくると、彼女は今迄に嘗つて覺えなかつた憤怒の情と反感とを先生に對して持たずにはゐられないのであつた。

京子はもうむしやくしやして耐らないので、何處かへいつてこの悶々の情を吐きつくしたかつた。さうなると先づ第一に浮んでくるのは、あの笹山のゆつたりした顔であつた。笹山

も郷里へ歸つたら手紙を呉れるなぞといつてゐながら、まだ一度も寄越さない。それにもう今日は約束の一週間も最早過ぎ去らうとしてゐるのである。京子は彼の顔を思ひ浮べると、耐らなく逢ひ度くなつてもしひよつとしたらもう今日あたりは東京へ歸つて來てゐるかも知れないと思つて、彼女はそれなりその足で四谷の家へ訪ねていつてみようと思つた。で、彼女は本郷通りからお茶の水の方へ出て、外濠電車に乘つて四谷へ向つた。

電車の中でも彼女はもうどうあつても協會へ入らうと固い決心をきめてゐたのであつた。

笹山の家へ來てみると、二階の雨戸は閉つてゐて、門の扉にも閂がおろしてあつた。傍の潜り戸から玄關へ入つて案内を乞ふと、なかからは腰の曲つたやうな老婆が出て來て、旦那樣はまだ御歸京がないといふ。京子は落膽して、何日頃歸つてみえるかお宅の方へはお報らせはないかと訊くと、婆やはじろじろ京子の姿を見ながら、まだそんなお便りはないといふ。

京子はその返事を聞くと、何んだか腹立たしいやうな氣持ちさへして、そのまゝ又別れを告げて戸外へ出た。

もう四邊はとつぷりと暮れて、宵闇の町には軒燈の光がぽつりぽつりと瞬きだしてゐる。うすく漂つた暮靄をみても梧桐の葉を鳴らしてゆく風の音を聞いても、もう秋が來たことがはつきり分つて、薄着の肌には夜寒らしい冷たさが犇々としみ渡つてくる。京子は町を歩いてゐると何とも云へない人戀しさが、心の底から湧いて來て、こんな時にあの笹山がゐてくれゝばとしみじみ思つたのであつた。友達といふものゝない身には、かうした時に心の中の思ひを訴へる人の一人もないのが耐らなく寂しいのであつた。彼女は又喜美子のことさへ思ひ出してゐたのであつた。

四谷見附まで來ると、彼女はふつと思ひついて、今度はいつそのこと白峯の家へ此方から訪ねていつてみようと思つた。此間貰つた名刺に書いてあつた彼の住居はたしか彌生町の三番地としてあつたやうに覺えてゐる。彌生町なら歸りに一寸廻ればさう大した道程でもないと思つて、彼女は又そゝくさ電車に乘つて本郷の方へ歸つていつた。

高等學校前の停留場で下りて、大學と高等學校の間の暗い道を下谷の方へ向けて下りてゆく間もなく彌生町の通りへ出た。三番地はいづれも可成りな家構への邸ばかりなので、その中を一軒一軒軒燈を眼當てに探してゆくと、やがて彼女は塗塀で取廻した大きな衡門に白峯といふ軒燈が出てゐるのにはたと打衝かつた。それは豫想外に立派な構へなので、京子は初めのうちは果たしてこれがあの白峯の家かどうかと疑つたが、標札をみるとちやんと彼の名前が書いてあるので、彼女は少時の間そこの前へ立澱んでゐた。

さう云へば白峯はさる地方の金滿家の娘と結婚して、その親の仕送りで立派な家邸を構へてゐるといふことはよく噂にも聞いてゐた。彼は身分の低いものゝ家に生れて畫壇へ出るまでは刻苦して業を勵んだ男なので、その娘と結婚した當時は可成いろいろな世評も受けたものであつた。京子はその頃のことを思ひ出して、彼が今かうした豪奢な生活をしてゐるのも尤もなことだと思つたのであつた。

京子はあんまり堂々とした家なので、初めは入りそびれたが、併しさうして立つてゐる譯にもいかないので、やがておづおづ門を入つて、正面の格子を開けて廣々とした三和土の玄

關へ立つた。格子のうへについた電鈴が消魂しく鳴つたので、やがて二十歳ばかりの袴を穿いた書生が取次ぎに出てくる。京子は態と隅の方へ入りながら、自分の名を云つて來意をつげた。

書生は丁寧に辭儀をしてそのまゝ奥へ入つていつたがやがて又出て來て、どうぞ此方へといつて京子をうへへ請じた。

京子が通されていつたのは二階の十六疊の客間であつた。そこには天井から御殿風の飾電燈を下つてゐて、九尺の床の間にも、違ひ棚にも見事な裝飾が施してあつた。つい此間亡つたばかりの有名な大家の額や、すばらしい蒔繪の文臺や、金砂子を置いた紙襖なぞをみてゐると京子は何んだか自分が來てはならないやうなところへやつて來たやうな心細さを覺えるのであつた。そしてそこは高臺になつてゐるので、緣先の硝子戸の向うには上野の森がこんもりと見晴らされ、不忍の池畔に明滅する燈影がまるで川を距てゝ對岸の町を眺めるやうにみえてゐた。庭の方からは蟲の聲が降るやうに聞えてきた。

若い小間使が茶道具や菓子なぞを運んでくると、やがて廊下の方で足音がして、白峯が湯上りのやうなてかてかした顏をして間内へ入つて來た。

京子はそれをみると何とも云へない懷かしさを覺えて疊へ手を支へながら、丁寧に挨拶をした。

白峯はさも彼女の來訪を嬉ぶやうに、

『やあ、よくいらしつて下さいました。實は今夜あたり私の方からお邪魔に伺はうと思つてゐたんですよ。』と、此間よりも更に打解けた調子でいふ。

京子も遠慮がましく嬌態をして、

『先日は態々お出で下さいましてほんとに有難う御座いました。私あれから是非一度伺はなけりやならないと存じて居りまして……』と、いふ。

白峯は自分で茶を入れて京子にすゝめながら時候の挨拶なぞをしてゐたが、やがて待ち兼ねてゐたやうに笑ひながら、

『ときに横川さん。如何です、何んとかお考へが極りましたか？』と、いふ。

京子は顔を伏せて、

『は、あの、實は今日はその御返事を致さうと存じまして伺ひましたんで御座いますが、：：：』と、云つて、一寸言葉を切りながら、『あの、私、實は有難い思召しに甘えまして、もし私のやうなものでお構ひなくば協會の方へ入れて頂き度いと思ひまして、：：：』

白峯はそれを聞くと、眉を開いて、

『いや、御決心がついたですか。そりや何よりです。私も實はその後何んともお便りがないんで、内々心配して居つたのですよ。その御返事を聞いてほんとに安心しました。』と、嬉しさうに云つて、『それで田原さんの方の問題は何うなりました？』と、訊く。

京子は膝のうへで袂を弄びながら、

『あの、その事で實は唯今も先生のお宅へ伺つたんで御座いますけれど、逢つても下さらないもんで御座いますから、私あんまりだと思ひまして、：：：先生の方でさういふ思召しならば私も何んとか考へなほさなければならないと存じまして：：：。』

『ふむ、さうですか。逢つても呉れんといふのは少し酷過ぎますなあ、あの人は頑固だから或はさうでせうとも。一旦破門したものには唾もひつかけんとか何んとか云つて、下らん虚勢を張つて居るのでせう。考へてみりや馬鹿馬鹿しい話ですなあ。はゝゝゝ。』と、笑つて、白峯は今度はじいつと京子の顔をみながら、『それでそんな風ぢやもう當然あなたと田原さんの間の關係は斷絶してしまつた譯ですなあ。』

京子は顔をあげずに、合點いて、

『まあ、さうと申すより他に仕様が御座いませんわ。此方ではもう一度お縋りしてもとのやうにして頂かうと思つて居りましても、先生の方でそれを許して下さいませんければ何んともなりませんから。』

『さうですとも。併し田原さんにしてみると、全く貴女のやうなお弟子は實に惜しいのですがなあ。もし私が地をかへて田原さんだつたら、すぐに貴女を許して、今度はもうどうあつ

ても離れてはいかんやうに大いに待遇を厚くしますがなあ、はゝゝゝゝ。』と、云つて、煙草を取上げながら、『それで一體その誤解といふのはどういふことなんです？　もしお差支へがなかつたなら、私も伺つて置き度いもんですなあ。』と、いふ。

京子はもう包んでゐられなくなつて、

『あの、そりやあなたほんとにつまらないことなんで御座いますの。』と、云つて、今度の展覽會の一件を順々に白峯に語つて聞かせた。笹山のことに觸れては此方が不利益になるので、彼女はなるべく彼のことは話の圏外に置くやうにしてゐた。

白峯はすつかりその話を聞いてしまふと、笑つて、

『たつたそれだけの理由で破門ですか。はゝゝゝゝ。しかしさうなると先生といふものはえらい權力をもつてゐるものですなあ。それぢや一旦弟子になつたものは人間としての權利さへ放棄してしまはんけりやならんことになるぢやありませんか。實に馬鹿々々しい話だ。』と、云つて、彼は嘲けるやうに笑つて、『藝術の世界に生きてゐるものは、毎日々々先へ先へ

と進んでいくものです。それと同時に自分の歩いて來た道を示す爲めに作品を發表したいといふ慾望は常に胸の中に燃えてゐる。それを先生自身の意志で抑壓しようといふのは、一種の人權蹂躙といつて差支へないと思ひます。そんな不條理な話が何處にあるでせう。實にどうも何んと云つていゝか、そんなことぢやとてもあの田原さんも覺醒の見込はありませんなあ。』

京子も白峯の云ふことが一々胸に當るやうに思はれた。時勢は駸々として進んでゆく。師弟の情誼といふやうなことも、今の人間にはたしかに或變化を生じて來てゐる。田原先生のいふことも決して昔風に解釋すれば無理はなかつたが、併し白峯にさういはれてみると、京子にはそれもさうだと合點かれるのである。人間が生きてゆく權利、自己を主張する權利といふやうなものは、現在の自分から考へてみて絶對のものでなければならないといふやうな心持ちもたしかに彼女の胸中には芽ざしてゐるのであつた。

白峯はやがて又口を切つて、

『あの、それで貴女が協會へ入つて下さるとすれば、無論あのお七の繪は私の方へ下さるでせうなあ。』と、いふ。

京子はやつと顏を上げて、

『あの、私、田原先生の方と關係が切れてしまひましては、帝展の方へ出すのも無意味になりますから、もし何んで御座いましたら是非さうさせて頂き度いんで御座いますけれど……。』

『いや、そりや帝展なんかへ今更出すは愚劣ですよ。そりや世間的にはいゝかも知れんが、藝術といふものを鑑賞してくれる人の眼が違ふですからなあ。どうか今度はあれを一生懸命にお描きなすつて、協會の展覽會に花を添へさせて頂き度いんです。』と、云つて、微笑みながら、『それから先達金屏風といふお話があつたですが、あの方はどうなりました。甚だ失禮な申分ですが、もしそんなことで御不自由があるんなら、私の方にはいくらも便宜がありますから、どんないゝのでもすぐに貴女の方へお廻ししますよ。』と、いふ。

京子はさしあたつて屏風にはひどく困つてゐるので、その實情を打明けて訴へたうへで、もし出來ることなら月賦ででも賣つて貰へるやうな便宜を得たいと云つた。京子は同じ畫家仲間でゐながらかうした豪奢な生活をしてゐる白峯の前でそんなことをいふのは恥かしかつたが、いづれにせよ、もう大急ぎで執筆にかゝらなければならないので、そんなことに構つてはゐられなかつた。

白峯はそれと察して、それなら早速表具屋に命じて明日にもお宅まで屏風を届けさせるからと親切に云つてくれて、彼女の前途の光明を讃しながら頻りに勵ましてくれた。

京子は屏風のことが思ひがけもなく手つ取り早く解決がついたので、唯嬉れしくて、もうきうきしてゐた。それから一時間ばかり畫壇の噂なぞをして、彼女はあんまり遲くなつて迷惑であらうと思つて、そろそろ立ち支度をした。

白峯はもう少しいゝだらうといつて頻りに止めたが、それでも京子が遠慮して歸るといふので彼もやむなく立ち上りながら、

『それでは横川さん、いづれ其の内に協會のもの達にも正式にお紹介はせがし度いですから、お忙がしいところ御迷惑でもどうかお出懸けになつて下さいまし。いづれ私の方から何んとか沙汰をいたしますから。』と、いふ。

京子はにつこり笑ひながら合點いた。

京子はやがて白峯に送られて玄關へ出て、そこで再會を約して、彼の家を辭し去つた。

戸外へ出ると、京子はもう足が地についてゐないやうに嬉れしくて耐らなかつた。これからはもう繪畫協會の一員としていよいよ畫壇に打つて出ることが出來るのかと思ふと、胸は搖られるやうに躍つてくる。殊に彼女はお七の畫を描く屏風が譯もなく手に入つたことが何よりも嬉れしかつた。それと同時に、やさしい親切らしい白峯の風貌が彼女の心に忘れられない印象を與へたのであつた。

京子はその足でぶらぶら本郷通りを歩いてやつと池島の家まで歸つて來た。もう十時過ぎてゐるので四邊はひつそりとして、夜寒は益々ひいやりと肌に迫つてくる。

京子は池島の夫婦に挨拶をして、英一が自分の居間で居眠りをしてゐるのを横眼にみながら自分の部屋へ上つていつた。とみると、そこにひろげてあるお七の下繪が今日はひどく生彩を帶びて、自分にはもう二度と再び描けない傑作のやうに眼に映つてくる。じいつとみてゐると、お七が畫面からぬけだして來て自分の光榮を讃美してくれてゐるやうにさへ思はれてくるのであつた。

京子はそのまゝさすがに疲れたので自分の机の前にいつてぐつたりと腰を下ろしたが、とみると、机の上には二通の郵便がのせてある。ひとつは西洋封筒に入れられたもので、ひとつは帶封をしに新聞であつた。

京子は先づ角封の方から取り上げてみた。見覺えのある手蹟だと思つて裏を打返してみると、それは笹山から來たものであつた。

京子はもう戀人の手紙でも開けてみるやうに、とる手おそしと封を破つてみた。と、なかからは啓文社の用箋が出て來て、それには萬年筆で細かく書きつゞけてある。彼女は何うし

たのかわくわくしながらそれを讀んでいつた。

笹山は郷里へ歸つてからの樣々の出來事をかいたあとで、亡き人に對する追懷のやうなものを訴へるやうな調子で書いてゐた。殊に日數がたつてみると、彼には子を失つたことが何よりも辛いらしく、埋葬の光景なぞは涙の滲むやうな文章で巧みに書いてゐた。

京子は讀んでゆくうちに知らずしらずの間にその感情の波に引入れられて自分も涙ぐんでゐた。二人の遺骨を提へて故郷へ歸つていつた笹山の心中も思ひやられて、何んだか彼が失意の人ででもあるやうな哀憐の念さへ覺えてくる。もし笹山が今彼女の眼の前に坐つてゐたら、彼女は涙ながらに言葉を盡して彼を慰めてやり度いやうな、遣り場のない同情がしみじみと湧いてくる。

笹山はさうしたことを記したあとで、もう滯在も大分長びいたから、親戚の方の義理が濟み次第歸京する。多分この手紙を出してから四五日目には東京へ着いてゐる筈であるから、又逢つて詳しい話はする。もう貴女ひとりが何んだか自分にはこの悲しみを訴へることの出

來る人であり、又涙をもつて聞いて貰へる人のやうな氣がするから、何をおいても一日も早く逢ひ度いといふやうなことがまるで妹にでも打明けるやうな態度で書かれてゐた。

京子はこの手紙をよむと唯笹山が懷かしかつた。自分にはどう考へても兄のやうな氣のする彼が、今思はぬ不幸の爲めに心の平和を破られて、苦しみ、喘いでゐるのかと思ふと、何よりも氣の毒でならなかつた。この手紙を出してから四五日といふと、もう明日か明後日には必ず彼も歸京してくるであらう。さうしたらすぐに逢つて心からの同情をもつて、彼を慰めてやらう。それが自分の義務であり、又彼に對する報恩の道であると思ふと、彼女は妙に心が勇んでくるのであつた。

京子は笹山の手紙はそのまゝ机のうへゝ置いて、今度はもう一通の新聞の方を取り上げてみた。何氣なく帶封を破つてみると、その新聞の第一面の隅のところには、東京新報といふ文字がありと讀まれた。東京新報といへばあの黑田夢人が入社した新聞である。

京子はそれをみるとかつとしてわれにもなく手先がぶるぶると慄へてくるのであつた。

二十八

上野公園の竹の臺で開かれた繪畫協會の秋季展覽會はすばらしい成功であつた。何をいつても當時新進の白峯秀邦や仙波湖山の一味が腕に縒をかけて描き上げた作品が數多く展覽されてゐるので、折柄すぐ近くで開催されてゐる帝展の向ふを張つて、非常な人氣を呼んでゐた。繪畫協會が帝展に叛旗を飜してから、もう今年で丁度五年目になるので、その時分にはまだ腕の定まつてゐなかつた連中も、今ではすつかり陣立てが出來て、押しも押されもしない名聲と價値とをもつてゐた。時勢は駸々と進んで、帝展の勿體ぶつた、大業な展覽に反感をもつてゐる鑑賞家の面々は皆清新の氣宇に富んだこの協會の人々の前途に矚目し、その人々の作品の新味に傾倒してゐるのであつた。各新聞雜誌なぞでも筆を揃へて、この協會の作品を賞讃してゐるので、その爲めに一層人氣を煽つた形があつた。

その展覽會のなかでひとしほ世上の好評を博してゐるのは、横川京子の描いたお七の畫であつた。畫題は「元祿の夢」といふので、美人畫中でも唯一の出來榮だといふ折紙がついて、もう寄ると觸るとその噂ばかりであつた。これこそ横川京子が二箇月の間精神をこめて描き上げた畫で、彼女の血も涙も總てその畫面に打込まれてゐるといつても決して過言ではなかつた。

その日は丁度土曜日であつたので、上野は押返すやうな人出であつた。小春日和のうららと晴れ渡つた青空には、雲の影さへなく果敢ない枯色をみせた櫻の霜葉は、風もないのにほろほろと廣い並樹路に散りこぼれてゐた。その中を美しく着飾つた女達や、紳士や學生の群がぞろぞろと櫛の齒を挽くやうに雜沓してゐる。自動車がいく。俥がいく。中には古めかしい二頭立の馬車なぞも群衆を分けてかけぬけていつたりした。

繪畫協會の入口にも入りそびれた人が二町の餘も人垣をつくつてゐて、警官は聲を嗄らしてその混雜を制してゐた。札賣場や下足場はまるで戰のやうな騷ぎで、太い丸太で柵を結

つた中では幾百とない人數が右に左に揉合つて、場内からみると女子供には恐ろしい程人雪崩を打つてゐた。

横川京子の「元祿の夢」は第六室にかゝつてゐた。豫ねてから新聞や雜誌で唄はれてゐるので、その前なぞは身動きも出來ないやうな人込をつくつてゐた。それは六曲屏風で、八百屋お七が吉祥寺の緣先で空中に幻影をみてゐるやうな眼眸をしながら柱に倚つてゐる圖であつた。色調の美しさといひ、構圖の大膽さといひ、それから又全體の思想の表現といひ、實に一點の批の打ちどころもない出來榮で、殊に戀の思ひに責められたその顏の表情がいかにも眞に迫つてゐた。一體に研究の行届いた描法で、しかも何處かに京子の天才の閃めきがみえ、一種人に迫つて來るやうな不思議な力をもつてゐる畫であつた。

その前ではさまざまの人がさまざまの評を試みながら往つたり來たりしてゐた。學生らしい若い男は連の男を顧みて、

『ねえ、君、實に綺麗な畫だねえ。かうなると、こんな色彩は到底男の畫家ぢや出せないといふことになるね。評判だけあつて、すばらしい畫だ。』と、云つて、うつとり畫面をみながら、『併しこの畫の作者の横川京子といふのは一面非常な無節操な、墮落した女だといふぢやないか。何んでもいつだつたか、東京新報に詳しく出てゐたが、その記事でみると、可成り猛烈な女らしいねえ。それに美人だといふんだから素敵ぢやないか。』

と、連れの男はそれを打消すやうに、

『いや、新聞の記事なんて當てになるもんか。殊に君、東京新報ぢや猶ほ信用出來んさ。僕の聞いたところに依ると、あれは嘘で、非常に堅い、賢明な女だといふぜ。何にしろあの有名な横川蓼坡の娘だつていふもの、畫風はお父さんとは違つてゐても、併し性格はやつぱりあの通り清廉な、藝術家風な女と解釋する方がいゝと思ふよ。』

『いや、併しさう一概にも云へんさ。何にしろ自家廣告をするために、啓文社といふ出版社の有力者である笹山とかいふ男と浮名を流したり、金の爲めにあの白峰秀邦に關係したりしたといふことだが僕は萬更ないことぢやないと思ふ。女の畫家なんていふものはさうしたも

のさ。はゝゝゝ。』

『いや、そりや可哀さうだよ。それにあの女は田原翠嶺の弟子だといふぢやないか。田原翠嶺と來たら有名な堅人だからなあ。まさか女弟子がそんなに墮落してゆくのを、知らん顔でみてゐる筈がないさ。』

『ところが君、さうぢやないんだ。あの横川京子は田原翠嶺から破門されてゐるんだ。あんまり身持ちがよくないんで、翠嶺もすつかり愛想を盡かして、破門してしまつたといふんだが、さうとするともういかに君でも辯護の餘地はあるまい。はゝゝゝ。』

又その傍では一人の青年紳士が、畫家らしい男と並んで立ちながら、

『ねえ、原野君、この横川京子といふ名はあんまり今迄聞かなかつたが、急に名聲が出た人のやうですな。一體いくつ位な女なのですか？』と、訊いてゐる。

と、畫家らしい男は心得た顔で、

『いや、まだ二十二ださうですよ。二十二にしちやい、腕を持つてゐますなあ。あのお七の

顔の工合なんぞは實にうまいものだ。』と、云つて、『尤もこの人は去年の帝展にも入選してそれからこの間の三越の展覽會の時にもやつぱりお七を描いて評判をとつた人ですよ。私は二つともみましたが、さすがお父さんの子だけあつて、非凡なところがありますね。この調子でうまくやつていけば、きつと將來は大成する人ですね。何處かに天才らしいところがありますよ。色に對して非常に敏感なところが一寸他に類がありませんからなあ。』と、いつて、飽かず畫面に見入りながら、頻りに感じ入つてゐた。

青年紳士も「元祿の夢」の細部を瞻めながら、

『併し新聞などでは、ひどく身持ちがよくないやうに書いてゐるが、やつぱり女の畫家なんていふものは、素行の點ぢやあんまり香ばしくないのが多いでせうなあ。』

『いや、そんなことは決して咎む可きことぢやないと思ひます。これほどの畫を描く人ですもの、世間の所謂道德で律することは出來ませんよ。それくらゐのことは許してやらなければとても畫なんか描けませんからなあ。』

『はゝゝゝゝ。原野君、君なんかも一つ穴の貂なんだから、我田に水を引いちやいけませんよ。はゝゝゝゝゝ。』

『はゝゝゝゝ。』

さうしたまちまちな風評を立てながら歩いてゆく群衆の中に揉まれて、今一人の美しい細面の女がそつと四邊の人々の言葉に耳を傾けながら棕櫚竹の大きな鉢物の陰に佇んでゐた。黒つぽい地味な風姿をして頭髪も平凡な束髪に結つて、その女は何の奇もない、おとなしやかな姿で、立つてゐたが、それこそ當の噂の横川京子であつた。彼女の傍にはこれも今噂にのぼつた啓文社の笹山が、細かい縞の背廣服を着て立つてゐる。二人は時々そつと顔を見合はせて、何か眼顔で話してゐたが、その時、京子の美しい顔には何とも云へない苦悶の表情が溢れてゐた。

二人はやがてそつとそこを離れて、一言も言葉は交はさずにずうつと出口の方へ歩いていつてしまつた。

群衆は誰一人として、それが、これほど人氣の立つてゐる「元祿の夢」の作者の横川京子であることを少しも知らないのであつた。

二十九

出口の事務所のところまで來懸ると、その時、そこの垂幕をあげて、一人の眉目清秀な三十近い男が出て來た。地味なお召の着物に紋付袴のいでたちで、分けた頭はつやつや美しく光つてゐた。

笹山はそれをみると、につこり笑つて、

『お、白峯先生。久濶でした。』と、鷹揚に云つて、『唯今お出懸けですか。はゝゝゝゝ。さぞお忙がしいでせう。』と、愛想らしくいふ。

白峯も丁寧に挨拶をして、

『久濶でした。又先達はとんだことで。さぞ御愁傷でしたらう。大層御郷里の方の御滯在が長びいたぢやありませんか。』と、いふ。それはこの協會の重鎭である白峯秀邦であつた。

笹山は笑つて、

『いや、どうも妻と子とを一時にやられてしまひましたんでさすがの私もすつかり閉口してしまひましてなあ。全く運の悪い時には悪いもので、まさか二人とも一緒にいかうとは思はなかつたもんですから……』

『いや、何うも全くお氣の毒でした。私も實は横川さんから詳しいお話を伺つて、しみじみ御同情を申して居つたんです。』と、云つて、そのまゝ又今出て來た幕をあげて、『さ、まあ兎に角事務所でしばらくお話しなすつて下さい。さあ、どうぞ……』と、云つて、中へ誘ふ。

笹山は京子に眼配ばせをして、

『それぢや一寸お邪魔をしませうか。』と、云ひながら、事務所へ入つてゆく。京子もつゝましやかにそのあとに續いた。

なかには三脚ほど事務用の卓子が据ゑてあつて、窓際のところには接客用の椅子が小卓のまはりに並べてあつた。白峯はそこへ二人を連れていつて坐らせた。その室にはたつた一人看守のやうな女がゐるつきりで、その他には誰れもゐなかつた。白峯はその女に茶をもつてくるやうに命じて、又笹山の方を顧みながら、

『それに奥さんも、お子さんもたしかチブスだとかいふことを伺ひましたが、さうでしたんですか。』と、眞顏で訊く。

笹山はポケットから煙草を取出して、火をつけながら、

『さうです。どうも兩方とも生憎心臟が弱かつたもんですから、到頭いけませんで。』と、云つて、紫色の煙を吹きながら、『それに郷里の方でいろ〳〵面倒なことが先から先と起つて來たもんですから、明日は歸らう、明後日は歸らうといつてゐるうちに、到頭一月半ばかり彼方にゐてしまひましたよ。今度の會のことでも、私が東京に居りさへすれば、社の方で出して居る雜誌なり、又は關係新聞なりにもう少し運動してもつともつと効果のある宣傳をする

のでしたが、生憎なことで、全く申譯もありませんでした。』

『いや、そのお言葉で却つて恐入ります。もう啓文社の方にはビラを刷つて頂くやら、何やら大變にお世話になりましてもう協會のものは皆大いに嬉んで居りますのですよ。それに又新聞社關係のことも、貴方が御郷里の方からお手紙や電報で交渉して下すつたさうで、皆御親切に對して非常に感謝して居るのです。』

『いや、まことに行届かんことで。併しまあ帝展を壓倒するやうな盛況で何よりでした。もう何を云つても、先生方の世界になりましたよ。舊いものゝ眞の價値が是非される時世がたうとうやつて來たのです。何にしろ愉快ですなあ。はゝゝゝゝ。』と、浩然と笑つて、『それからあの、私の口からは一寸申憎いですが、この横川さんのことに就いて、いろいろ又先生に御厄介になりまして、有難うございます。たしか屏風から何から皆協會の方で御支辨下すつたさうで、それに又御親切な御指導もして頂いたとかいつて、横川さんも非常に嬉んで居りますのです。私からも厚く御禮を申上げます。何にしろ田原さんとの關係があゝなりま

してからは、私も心配でどうかして先生方の方へ接近された方がこの横川さんとしても、はるかに御自分の藝術的生命のうへにいゝ結果を齎らすだらうと思つて居りましたんですが、幸ひ貴方の御盡力で協會の方へ入れて頂くことが出來て、私も乍蔭ひどく嬉んで居つたのです。それに又「元祿の夢」が大變な評判で、これも先生の御盡力の結果と私までが感謝をしてをる次第なんです。』

白峯は謙遜な態度で、

『いや、今度のこの人氣は皆横川さん御自身の努力の結果なのです。實際御覽のとほりすばらしい出來榮ですからなあ。私達も横川さんのやうな方に協會へ入つて頂けたことを非常に心強く思つて居るのです。昨日も田原さんが飄然と見にやつてみえまして、あの「元祿の夢」の前へ立つて、長い間じいつとみてゐられたといふ話です。いかに保守的なあの人でも、あの畫の價値だけは認めない譯にはいかんでせう。横川さんも破門になつて、却つて田原さんに對して復讐をしたやうな形になりましたなあ。はゝゝゝゝ。』

笹山も笑つて、

『はゝゝゝゝ。いや、世の中といふものは實にうまく出來てゐるものですよ。さすがあの頑固な田原先生も「元祿の夢」ぢや驚いたでせう。今になつてさぞ惜しいことをしたと思つてゐられるかも知れませんなあ。あの人の門下では先づ何を云つても横川さんでしたからなあ。』と、云つて、京子の方をちらりと見ながら、『併しあの先生も私は隨分狹量だと思ひますよ。つまらん世間の噂なぞを氣にして、大事な門下生を破門にしてしまふなんて、實に愚劣極まる話ぢやありませんか。あんまり眼先がみえな過ぎます。私なぞもお恥かしい話ですが、例の東京新報の件では隨分煩くやられましたが、自分さへ潔白なら何も構はんぢやないですか。藝術家なんていふものはどうせ毀譽褒貶の的になるものですから、何うしたつて世評なぞに超然として居らなけりや駄目です。とかく世間なんていふものは、若い女の畫家なぞに對していろんな難癖をつけ度がるもんですからなあ。はゝゝゝゝ。』

白峯も苦笑ひをして、

『いや、あの東京新報には私も驚きましたよ。何の關係もない私まで渦中に捲き込んで、とんでもないことを書かれたんで、協會のもの達もひどく憤慨して居るのです。この會が開かれてからは、一層惡辣になつて、横川さん御自身も隨分迷惑されてゐることゝ思ひますが、何んとかあれを打潰す方法はないもんでせうかなあ。』

笹山は大きく腹をゆすつて、

『いや、氣におかけなすつちや駄目です。あんなものを眼中にお置きになつちやいけませんよ。此方で少しでも困つたやうな顏をみせりや、向うはつけあがつて何をしだすか知れませんからなあ。まあ時機を待つて、私が根柢からたゝきつけてやりますから、どうか御安心なすつて下さい。きつと眼にものをみせてくれますから…』と、云つて、又煙草を取出しながら、『第一あの記事を書いてゐる奴はもと啓文社で私が下に使つて居つた黑田夢人といふ男でしてねえ。底を割つてお話しゝますと、少しばかり小說か何か書いて名が出だしたもんですから、すつかり有頂天になりまして、人もあらうにこの横川さんに不純極まる戀をしかけ

たのですなあ。それが成功せん爲めに自棄になつてあんなことを書いて居るのですよ。それに私が啓文社を放逐したものですから、常に私には恨を含んで居つて、あの新聞へ入りましてからは何かにつけて、私の不利益になるやうなことばかり企んで居るのです。併しまだ生若い青二才で、大した仕事は出來んのですから、私も眼中には置いて居りませんが、併しそれにしても或時機に立ちも匍ひも出來ないやうにしてやるつもりで居るのです。譯はないですからなあ。』と、肩を張りながらいふ。

白峯はそれでも胸がをさまらないやうな顔でじいつと笹山の顔をみてゐた。

三十

白峯は少時すると、もうその問題はそのまゝにして置いて用ありげに京子の方を向きながら、

『あの、横川さん、實は今貴女がみえてゐるつていふ話を聞いたもんですから場内へ捜しにいかうと思つて出たところなんですが、實は今日あの「元祿の夢」の賣約を申込んで來た人があるのですよ。それは御存知でもありませうが、あの土屋伯爵なのです。伯爵は非常に我々の會へ同情をもつてゐて下すつて、いつも二つや三つは買上げて下さるのですが、今度は非常な乘氣で、あの賣値どほり千五百圓で是非自分の手許へ入るやうにして呉れといはれるのですが、何うしたものでせうなあ。』と、いふ。

京子はそれを聞くと俄かに眼を輝かして、

『まあ、あの土屋樣が私の畫を？』と、云つたが、ひどく嬉しさうに、『そりや私としてはこんな光榮なことは御座いませんわ。賣價のことなんかどうでもよろしう御座いますからどうか皆さんの御都合のいゝやうになすつて頂き度う御座いますわ。』と、いふ。

白峯はそれを聞くと笹山の方を向いて、

『ねえ、笹山さん、一體どうしたものでせうなあ。横川さんさへ承諾して下されば、會とし

ては賣約をつけるのに、何の異存もないのですが、一應貴方のお考へも聞かせて下さいませんか。』と、いふ。

笹山は自分も嬉しさうに笑つて、

『いや、私にだつて何も異存はありません。異存どころか、私は双手をあげて贊成します。實にいい、鹽梅だ。あの土屋伯爵に賣約されるといふことは此際横川さんにとつて非常な利益なことですからなあ。』

京子は土屋伯爵といふ名をもう一度心に思返してみたが、唯もう嬉しくて耐らなかつた。伯爵は鑑賞家としてもすぐれた眼をもつてゐるし、それに今貴族社會でも傑出した人物の一人として、常に新聞紙上なぞでもてはやされてゐるので、さうした人の邸宅へ自分の作品が飾られるといふことは此上もない幸福であつた。それに今の貧しい生活の間に千五百圓といふ大金……それを思ふと、京子はもう躍り上り度いほど心が勇んで來た。

それで話が極つたので、京子はもう一度明日事務所で白峯に逢ふことにして、やがて暇を告げて歸り支度をした。

白峯はそれを出口まで送つて來て、

『それぢや横川さん、明日又お眼にかゝります。これで失禮します。』と、いつて、笹山と肩を並べて歸つてゆく京子の姿をじいつと見送つてゐたが、その眼には何かしら不思議な感情が燃えてゐるのであつた。

京子はもう一度振顧つて、丁寧に別れを告げた。

戸外へ出ると、もうそろそろ四邊には黄昏が近づいてゐた。橙紅色の秋の夕陽は蠱乎と天心を刺してゐる杉の大樹の梢を美しく染めて、公園の道にはいつの間にか少しづつ風立つてゐた。

笹山は雜沓を避けながら、

『ねえ、横川さん。噂の高い今だから、誰れに見付かるかも知れない。何處かあんまり人通りのない方から歸らうぢやないですか。』と、いふ。

京子もいそいそしながら、

『さう致しませう。それぢや動物園の裏をぬけて、根津の方から本郷へ出ませうか。』と、云つて、親しげな眼で笹山をみながら、『でも貴方はさう遊ばすと、大變に遠廻りになりますわねえ。』

笹山はふつと寂しさうな眼色になつて、

『いや、私は何うだつて構はんですよ。どうせ家へ歸つたつて、誰れも居らんのですから：：』と、云つて、聲を落としながら、『私も妻や子をなくしてからは、自分の考へがすつかり變つてゆくのが分ります。今迄は家へ歸つても家庭的な一種の温みがあつて、それが實に私を慰めて呉れたですが、此頃ではもう家へ歸つてもがらんとしてゐて、唯寂しくて耐らんのですよ。ですから社が退けても何んだか自分の家へ歸つてゆくのが厭で、銀座邊で夜遅くまでぶらぶら時を過ごして歸ることが毎日のやうに續くんです。それに家に居ると妻や子供の記念になるものを始終見聞しなけりやならんので猶ほ一層寂しくなるのですなあ。全く私は

それが何よりも耐らんのですよ。』と、しんみりといふ。樹蔭の道を歩いてゆく彼の姿は何處か悄れ返つてゐて、時折落葉がはらはらとその肩へ散りかゝつてきたりするのが、ひとしほ哀れを增すのであつた。

京子は常から頼りに思つてゐる笹山にさう云はれると、ほろりとして、彼の心の中を深く察しながら、

『ほんとにねえ、さぞお寂しいだらうと思ひまして、私、いつもお目にかゝります度に、何んだか自分までが悲しくなりますんですわ。何うかしてお氣がうきうきするやうなことがあればいゝと思つて、私始終心配してゐるんで御座いますけれど：：』

笹山は又寂しく笑つて、

『いや、そのうちに癒りますよ。薄情なやうだが、去るもの日々にうとしでねえ。はゝゝゝ。全く私達位な年恰好のものには、妻に亡なられるといふことが一番打撃ですよ。自分自身から云つても、又家庭といふことから云つても、その影響は隨分ひろく及びますから

なあ。その癖、妻よりも子供の方に餘計に執着が殘つてゐるんだが……』と、云ひかけてふつと悲しげに口をつぐんでしまふ。

京子は耐らなくなつて、

『貴方、もうそんなことをお考へになるのはおよし遊ばせよ。こんなことを申しちや何んですけれど、いくらお考へになつたつて、もう何うなるもんでも御座いませんし、それよりも却つて他へお氣持を移しておしまひになる方が、どんなにいいか知れませんわ。何事も運命なんでございますもの……』

さういはれても笹山は妙にしんみりした眼つきをして、夕陽の射し渡す落葉の路をじつと見つめながら、力ない足調を運んでゐた。

二人はいつかしら動物園の裏をぬけて、寺ばかりの寂しい片影の道へ來かゝつてゐた。もうそこいらには人の往來も稀れで、靜かな墓地の方からは小禽の囀りなぞが聞えて來た。日は漸次と西に沈んで、とある坂路へかゝると、谷底のやうな町には暮靄がうすくたなびいてゐた。

笹山はそれからも心の中の寂寥を訴へては儚なげな顏をしてゐたが、そのうちに根津の大通りへ來ると、とある西洋料理屋をみつけて、ふつと歩みをとめながら、

『ねえ、横川さん、貴女都合が惡くなかつたら、夕飯を一緒につきあつて呉れませんか。此處いらの家だから食物はどうせ旨くはなからうが、併し客が少ないから、ゆつくりお話が出來るだらうと思ふんですよ。どうです。つきあつて呉れませんか。』と、いふ。

京子は嬉んで、

『え、有難うございます。私もどうせ家へ歸つても仕樣が御座いませんから、お言葉に甘えて御馳走になりますわ。私のやうなものでもお相手が出來れば、何んですから。』と、につこり笑ひながらいふ。

笹山はその足で精新軒といふその西洋料理屋の店口へ入つていつた。京子もスカーフで顎を包みながら、そのあとからついていつた。

中からは女給仕の聲が、

『入らつしやいまし。』と、云つたが、二人はそのまゝ階段を上つて、二階へいつた。二階には二つ小室があつて、兩方とも空いてゐた。

笹山は奥の方の室を選んで、

『さ、横川さん、此處がいゝでせう。』と、云つて、室の中へつかつか入つていつた。そして二人は窓際の小卓へ對向に坐つた。

女給仕が上つてくると、笹山は見計らひで夕飯の支度を頼んで、

『おい、それから私にウキスキイを持つてきてお呉れ。』と、云ひ添へた。

三十一

やがて註文した料理が來ると、笹山はさも餓ゑてゐるやうに、ウキスキイの洋盃を取つて、

ちびちび飲みながら、

『さ、横川さん。貴女お腹が空いたでせう。どうか遠慮なく食つて下さい。私はこつちの方でおつきあひしますから。』と、寂しく笑ひながらいふ。

京子もにつこりして、

『有難うございます。頂きますわ。』と、云つてうまさうに酒を飲む笹山の顔をみながら、『貴方もたうとう強いお酒を召飲る癖をつけておしまひになりましたのねえ。ほんとに可けませんわねえ。』と、いふ。

笹山は小さな洋盃をすぐにあけてしまひながら、

『いや、全く自分でもいかん、いかんと思ひながら、此頃のやうな心持ちだと何うしてもやつぱり酒精の誘惑には勝てんですなあ。つひ心寂しいと、他に紛らかすものがないもんですから、先づ一杯と、かつなつてしまふのですよ。人間といふものは、考へてみると、實に弱いもんですなあ。』

京子もしんみりした顔になつて、

『やつぱり貴女のやうな方でも、そんな風にお考へ遊ばすんですかねえ。私、貴方はもつともつと強い方だと信じて居りますわ。』と、云つて、自分も料理の皿へつゝましやかに手をつけながら、『かうやつてお見懸けしたところだつて、肥つて丸々して被居いますし、何が來てもお驚きにはならないやうな風をして被居いますけれど、それでもやつぱりお心の中はさうぢやないんですかねえ。』と、いふ。

笹山は笑つて、

『いや、私はこれでみかけによらない意氣地なしなんですよ。えりや對世間の問題や職業上のことでは可成強いところもあるんですが、今度のやうに妻や子を一時に亡してしまつたりすると、どうもやつぱりセンチメンタルになつてしまふのです。これで、ふつと涙を零したりするやうなことがあるんですからなあ。』

『まあ、そんなことが？　でもそれは當然ですわ。何んな強い方だつて、奥さまやお子さんをお喪しになりや何うしたつてさういふお心になりますわ。』と、云つて、引込まれるやうに眼を濕ませながら、『でも考へてみますと、ほんとにお氣の毒で御座いますわねえ。お酒なんか召飲るやうになるのも、私決して御無理ぢやないと思ひますわ。ですけれど、いくら何んでも、その爲めにお體でも悪くしちやそれこそ大變ですから、どうかあんまり無理なお酒は召飲らないで下さいましな。私、乍陰それぱかり御心配申上げてゐますんですもの。』と、眞實な調子でいふ。

笹山はさう云はれると、少しく涙含んで、

『有難う。そんなに親切に云つて下さるのは貴女ばかりだ。感謝します。』と、云つて、又次の洋盃を命じながら、『私も何うかして平靜な心持ちに歸らうと思つて、此頃では非常に努力して居るのです。なあにもうこの年ですもの、さういつまでもこんな情ない心の狀態でもゐないでせう。そのうちにはもつと明るい心持ちになつて、どしどし働けるやうになるだらうと思ひますよ。』と、いつて、急に話頭をかへながら、

『それはさうと横川さん。ほんとに貴女も今度はうまくやりましたね。もう此處まで來れば大丈夫だ。私もこれですつかり肩がぬけますよ。これからはもう貴女の努力次第で、何うでもなるのです。ほんとに私もこれほどに思つて居るのですから、どうか今後も充分ひとつ勉强をして下さい。』と、勵ますやうにいふ。京子も嬉しさうに、

『有難う御座います。かうなりましたのも、皆貴方のお庇護で御座いますわ。私もうほんとに何とお禮を申上げていゝか分らないんで御座いますもの。』

『いや、そのお禮には及ばんですよ。唯貴女がこれから先うんと勉强をなすつて、一日も早く大家の列に入られるのを私は衷心から望んでゐるのです。さうなつたら、』『私も實際鼻が高いですからなあ。』と、云つて、笹山は女給が運んで來た次の洋盃を取り上げながら、『實際世の中といふものは妙なものだ。かうなつてみると、先刻も云つたやうに、貴女は田原先生にも立派な口がきけるし、又お父さんやお母さんに對しても立派に復讐が出來たのです。もう何を云つても、誰れにだつて後指はさゝれませんからなあ。』と、いふ。

京子も眼を輝かして、

『ほんとにさう仰有ればさうで御座いますわ。私、それを思ふと、何んだか夢のやうな氣が致しますの。』と、云つて、顏を伏せながら、『それにつけても、私、妹の喜美子がもし傍にゐて呉れましたら、何んなにか嬉んで呉れるだらうと思ひましてねえ。いづれ養父も母も新聞なぞで噂も聞いて居りませうから、いゝ氣味だと思ひますけれど、妹が何う思つてゐるかと思ひましてねえ。』と、いふ。彼女には辛かつた養父の峯村と、實母のらく子のことを思ひ出すと、今迄散々に虐げられ、責められてたつた一人で家出をするやうな目に逢はされてゐるだけに彼女は、何とも云へない痛快さを覺えるのであつた。

笹山は何か考へてゐるやうに、

『ねえ、横川さん、それで此頃はお母さんや久保さんからはあれつきり何の音沙汰もないんですか？』と、訊く。

京子は合點いて、

『え、もうあれから後は何のたよりも御座いませんの。ですから喜美子がどうなつて居りますか、まるで分らないんで御座いますわ。』と、いふ。一度は自分に求婚して、それに失敗したゝめに、實母のらく子と共謀して妹の喜美子を何處かへ隱してしまつたあの工學士の久保のことを思ふと、京子は今更のやうに腹が立つてくるのであつた。大方は養父の峯村の家へかくまはれてゐるのであらうと當てはついてゐるものゝ、彼女には今でも妹から何のたよりもないだけに、始終氣になつてならないのであつた。

笹山は洋盃ばかりあけながら、

『それにしてもほんとにあの喜美子さんはお氣の毒ですなあ。今頃は何うしてゐられるでせう。あのおとなしい方でしたから、さぞ苦しんでゐられることでせうが、何うかして行方をつきとめて、もう一度此方へ連れ戻して上げ度いですなあ。』と、いふ。

京子も双眼に一杯涙をためて、

『私、氣にかゝるのは、あの人ばかりですわ。此間うちは仕事のことでもう胸の中が一杯になつてゐましたから、忘れるともなく、忘れて居りましたが、今になつてみますと、ほんとに心配になりましてねえ。私にはたつた一人の妹で御座いますだけに、妙に愛着が深いんで御座いますわ。』

笹山は深く合點いて、

『いや、さうでせうとも。私もそれはお察し申してゐるのです。併しまあ、今いかに焦つたとて、到底駄目なのですから、もうかうなつたら、時機を待つより他はないのですなあ。』と、云つて、急に氣を變へたやうに、『ねえ、横川さん、そんなに悄れてしまつちやいけませんよ。今日はもうお妹さんの話はこれつきり止しませう。それよりももつともつと明るい話をして、せめて今夜ひと晩は私にも愉快な氣分を分けて下さい。貴女も何うです。今日は祝ふべき日なんだから、何かリキウルのやうなものでも一杯飲んで下さい。強くない酒なら構はんですよ。それに貴女はお父さんゆづりで、いくらかいける方なんぢやありませんか。』と、いつて、彼はウエイトレスに命じた。

京子も妙に引入れられて酒を飲み度いやうな氣がするので、つひ洋盃へ手を觸れてしまつた。

三十二

笹山はもう一杯もう一杯と云つてゐるうちに、あれでも七つ八つは洋盃を重ねたので、顔にも醉ひが上つて、ぼうつとしたやうな眼つきになつて來た。京子もたつた二杯のシェリイが空腹のせゐかひどく體にまはつて、いつにない醉ひ心地を覺えた。

笹山も話の調子を彈ませて、

『ねえ、京子さん。先刻白峯先生から話のあつた土屋伯爵ですね、貴女あの人に逢つたことがありますか？』と、訊く。

京子も顔が熱てゐるのを抑へながら、

『いえ、私、お名前を伺つただけで、一度もお眼に懸つたことは御座いませんの。』

『さうですか。そりやどうも殘念ですなあ。いづれあの「元祿の夢」が伯爵の手に入ることになれば、あの派手な人のことですから、貴女を自邸へ招待するとか何とかするでせうが實のことを云ふと、その前に一度逢つてお馴染になつて置く方がいゝですなあ。』

『私もさう願へればと思つてゐるんで御座いますけれど……あの、何んでも白峯さんのお話では一度何かの機會に紹介してあげるつて仰有つて被居るんですけれど……』

笹山はそれを抑へて、

『いや、白峯先生の紹介もいゝが、併し私も伯爵とはずつと以前から御別懇に願つて居るので、どうか私に紹介させて貰ひ度いですなあ。さうすれば私の面目も立つし、それに貴女ともかういふ御關係になつてゐるんですから、極めて自然に御紹介が出來ると思ふのです。』

京子は嬉しさうにいそいそして、

『まあ、私、さう願へればこれより嬉しいことはないんで御座いますけれど、……』